

うつせみのあなたに

第8巻

星野廉

目次

| | |
|--|-----|
| はじめに | |
| はじめに | 2 |
| もくじ | 4 |
| 第1部 09.08.11~09.08.30 | |
| 09.08.11 たわむれる | 8 |
| 09.08.12 なつかれる | 9 |
| 09.08.13 げん・幻 -1- | 9 |
| 09.08.14 げん・幻 -2- | 11 |
| 09-08-15 げん・幻 -3- | 15 |
| 09-08-16 げん・幻 -4- | 19 |
| 09-08-17 げん・幻 -5- | 21 |
| 09-08-18 げん・幻 -6- | 26 |
| 09-08-19 げん・幻 -7- | 30 |
| 09.08.20 げん・幻 -8- | 35 |
| 09.08.21 げん・幻 -9- | 42 |
| 09.08.22 げん・幻 -10- | 48 |
| 09.08.30 こんなことを書きました (その 14) | 53 |
| 第2部 09.08.23~09.09.XX | |
| 09.08.23 げん・言 -1- | 60 |
| 09-08-24 げん・言 -2- | 64 |
| 09-08-26 げん・言 -3- | 68 |
| 09-08-27 げん・言 -4- | 79 |
| 09.08.28 げん・言 -5- | 86 |
| 09.08.29 げん・言 -6- | 92 |
| 09-08-31 げん・言 -7- | 103 |
| 09.09.01 げん・言 -8- | 113 |
| 09.09.XX げん・言 -9- | 121 |
| 09.09.XX げん・言 -10- | 131 |
| 09.09.XX げん・現 -1- | 138 |
| 09.09.XX げん・現 -2- | 144 |

| | |
|--|-----|
| 09.09.XX げん・現 -3- | 152 |
| 09.09.XX こんなことを書きました (その 15) | 155 |
| 小品集 (1) 09.09.04~09.09.26 | |
| 09.09.04-09.09.26 小品集 (1) | 162 |
| 小品集 (2) 09.09.27~09.10.23 | |
| 09.09.27-09.10.23 小品集 (2) | 168 |
| 小品集 (3) 09.10.25~09.11.14 | |
| 09.10.25-09.11.14 小品集 (3) | 176 |
| あとがき | |
| あとがき | 182 |
| 『うつせみのあなたに 第1巻~第11巻』の記事タイトル | 183 |
| 奥付 | |
| 奥付 | 202 |

はじめに

はじめに

本書を第8巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第8巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いるという仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.08.30 こんなことを書きました(その14)」、そして第2部の最終記事「09.09.XX こんなことを書きました(その15)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部

09.08.11 たわむれる

09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その14）

第2部

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

あとがき

『うつみのあなたに第1巻～第11巻』までの各記事タイトル

第 1 部 09.08.11～09.08.30

09.08.11 たわむれる

◆たわむれる

2009-08-11 15:23:53 | さくぶん

多義性＝多層性＝偶然性＝まかせる＝でまかせ＝かける＝掛ける＝架ける＝駆ける＝
翔る＝賭ける＝書ける＝骰子一擲＝無→有＝有→無＝無即有＝有即無＝中＝なか＝か
ら・殻・空＝うつお・空＝うつろ＝うつうつ＝うつつ＝うつ・虚＝宙＝宙ぶらりん＝ぶら
ぶら＝ぶれる＝ゆらゆら＝ゆらぐ・揺らぐ＝ふるえる・震える＝振動＝うごく・動く＝
運動＝熱＝あつい＝あっちっち＝あっち＝かなた＝あなた＝あ・我・吾＝わ・我・吾＝
たわぶる＝たわむれる

*

うつせみのあなたに

うつせみ・空蟬・現人

あなた・彼方・貴方・貴女

あつきさかりにあうつせみとなりしもうつつにありてうつせみのあなたにかけたわふ
ることのはちりてなほいきゆくことたまのあらぬかきり.....

09.08.12 なつかれる

◆なつかれる

2009-08-12 08:17:17 | さくぶん

なつかれし あしさいのあと くさたかし

09.08.13 げん・幻 -1-

◆げん・幻 -1-

2009-08-13 08:17:06 | さくぶん



幻影という言葉を見聞きすると、いろいろな言葉とイメージがあたまたまに浮びます。「まぼろし」と「かげ」が合体しているからでしょうか。思いつくままに、並べてみましょう。

影絵、幻灯、幻灯機、スライド、スクリーン、銀幕、活動写真、セピア、スチール写真、映画、映写機、映画館、シネマ、キネマ、写真、フィルム、カメラ、暗い部屋、暗室、現像、拡大、引き伸ばし、焼き付け、オーバーヘッドプロジェクター。

そういえば、かつて「幻影城」という本や雑誌の名前もあった記憶があります。

★

幻灯つまりスライドは小中学生のころに、よく学校で見ました。確か、教室の窓という窓を遮光性のカーテンか何かで被うのです。幻影には、あの暗闇が欠かすことができません。

人工的な闇の出現に、わくわくしたものでした。幻灯を見終わって、カーテンを取り外し始めるときに目にするまばゆい光も、強く印象に残っています。いわば非日常的世界から日常に連れもどされるわけですが、一瞬、逆転を感じるのです。

日常である光に満ちた昼間の世界が白っぽい光景となって、ほんの短いあいだですが、闇の世界に劣らないほどの非日常性を帯びるのです。わくわくするような体験ではなく、目を細めるしかない、全身の皮膚に痛みを伴うような強い衝撃を覚えます。

それもつかの間、がっかりした思いがからだじゅうによみがえってきます。朝目覚めたときに覚えるやれやれという脱力感に似ているというのは、個人的なものかもしれません。朝が大の苦手なのです。

★

幻影は、「まぼろし」と「かげ」が合体した言葉でありイメージです。「まぼろし」を、「魔を滅ぼす」とか「間を滅ぼす」とか「真を滅ぼす」と読み換えるたぐいの遊びを、よくします。自分勝手に、言葉とたわむれるのが好きなのです。

大きめの辞書を引いて、言葉の語源をたどるのもおもしろいですが、語源には「正しい」対「正しくない」といった2項対立の影が付きまといますから、どうしても窮屈です。それに対し、たわむれるさいには、夢を見るのと同じで、気兼ねも遠慮も無用です。

夢のなかでは、すべてが肯定されるように、夢想のさなかには、疑問をいただくことはありません。何でも許されてしまうのです。幻灯や映画を見るのと似ています。

★

魔を滅ぼす。この魔って何でしょう。ネガティブな意味合いが濃い言葉ですが、ネガティブとポジティブは反対の関係にあるというより、表裏一体ではないかと、つねづね思っています。見る者の立つ位置によって変わる。そんな感じもします。

科学では、観測者という視点が重要性を増しているという話を、何かで読んだことが

あります。共感を覚えます。そもそも「見る」とは、一介の生き物にほかならないヒトという種（しゅ）にとって、広義の主観的行為であるはずで

それが忘れられがちなのは、残念なことです。話をもどします。

「魔を滅ぼす」でしたね。実は、魔という言葉は、他の言葉呼び寄せる枕詞か触媒のようなもので、あまり意味はないというか、興味がありません。むしろ、「間を滅ぼす」や「真を滅ぼす」のほうに、個人的にはおもしろみを感じます。

★

魔、間、真というように、「ま」という音を、漢字に置き換えてみる。分光する、と言ってもいいかもしれません。つまり、「ま」という表音文字が喚起するイメージを、漢字という表意文字を当てることによって、「分ける」のです。そして、また「ま」に送り返してやる。

すると、「ま」というひらがなと、それを口にしたときに発せられる「ma」という音に、「たましい」が、いわば「やどる」。そんな遊びなのですが、よくやります。もちろん、個人的な次元でのたわむれであり、いたずらです。

意味と音。この2つを、いったん分けて、その中身を確認し、再びくっつける。それこそが、自分にとって、「まをほろぼす」という音と字の発する意味なのです。まさに、まぼろしですね。

★

愛用の広辞苑に、「まぼろし・幻」の語源が記載されていないのを幸いに、ひまつぶしことができました。

09.08.14 げん・幻 -2-

◆げん・幻 -2-

2009-08-14 10:14:48 | さくぶん



幻を「まぼろし」と読んだ場合に、「ま」という音と字に、つい気が行ってしまいます。魔、間、真……という漢字の意味とイメージがちらつくのです。すると、「ま」がひとり歩きしはじめます。

「まほう」、「あくま」、「まら」、「たま」、「たましい」、「ことだま」、「まがさす」、「まがたま」、「まがる」、「まがまがしい」、「まがあく」、「まをとる」、「まをうかがう」、「まがわるい」、「まあい」、「まごころ」、「まにうける」、「まもる」、「まぼる」、「まあ」、「まま」、「mother」、「mammal」、「まーぼーどうふ」という具合です。当然のことながら、「ひとり歩き」とは比喩です。

ヒトとは勝手な生き物ですから、たとえを用いて、ありとあらゆる物・事・現象同士をこじつけ、さまざまな妄想にふけります。現に、今、言葉を使って、妄想の結果を記述しています。単純化するなら、脳のなかで起こっている妄想を、言葉という代理に置き換えて作文していると言えるような気がします。



比喩こそが、この惑星に生息する生き物すべての行動の根幹にあるメカニズムではないか。そう思っています。これは、知覚という仕掛けを重視した考え方と言えるでしょう。知覚とは、隔たったものを「近く」にあるものを感じられるようにする仕組み、つまり「間を滅ぼす・間をなくす」ことにほかなりません。

だから、「まぼろし」なのです。もちろん、言葉の遊びです。どうして、こうした駄洒落にふけているのかと申しますと、自分には何もなくて、取っ掛かりがないので、仕方なく、言葉に引っ掛けているのです。いや、逆に、こっちが言葉によって引っ掛けられているというのが、正確な言い方かもしれません。

いずれにせよ、圧倒的な偶然性が支配する宇宙において、自分が宙ぶらりんな状況にあるために、何かをつかまないと安心できない。とりあえず、思い浮かんだ言葉や気に掛かっている言葉に、手を伸ばしてみようという感じです。とりあえずの行為である限り、これは賭けです。何の根拠も確証もありません。でまかせだとも言えるでしょう。

いや、出るに任せているのですから、でまかせにほかなりません。ちなみに、「でまかせ」という言葉のなかにある「ま」が気になって仕方ありません。



「でまかせ」という言葉とイメージが好きです。「出る」と「任せる」を合わせた言葉らしいのですが、さまざまな意味とイメージを呼び覚ましてくれます。たとえば、「出る」と言えば、決まって「うんち」を連想します。なぜかは、分かりません。自分のなかでは、「あらわれる」と違って、「出る」とは、「なぜか分からないけど出る」状況を指します。

イメージとは、このように個人レベルで各自が勝手にいただくものみたいです。だから、ヒトそれぞれです。共同体や複数のヒトたちが共有するイメージがあるという考え方もありますが、個人的には興味はありません。積極的に、他人様（ひとさま）とイメージを共有しようとは思いません。

「まかせる」は多義的な言葉だと思います。この語を広辞苑で引くと、「まく・任」「まかる・罷」と同源と記してあります。「まかす」という言葉も並べてあります。こうした記述を見ると、もう止まりません。辞書を閉じて、言葉を書きつらねたくなります。

掛詞（＝かけことば）が、次々とあたみに浮かびます。掛詞の例として「かける」を挙げるのは、ややこしいのですが、こういう自己言及的な倒錯が好きなので、ついやってしまいます。たとえば、気懸かりな「掛ける」が、あたまのなかを駆けめぐり、「書く」がその語源だという「引っ搔く」と重なって、全身がむず痒くなり、無性にあちこちを搔きたくなります。すると、からだが熱くなってきて、汗まで搔きます。かくかくしかじかという次第です。

「(偶然性に) まかせる・任せる・負かせる・巻かせる・蒔かせる・撒かせる」、「まける」、「まく」、「まかる」、「まかふしぎ」、「まがまがしい」、「おまかせ」、「でまかせ」、「まけ」、「おまけ」、「まげる」、「まがる」、「まげ」、「ちょんまげ」……。まさに、でまかせで、でたらめですね。でも、こういう遊びが好きです。

★

辞書を引いていて、語源に関する記述を読んでいると「～の転・転じて・転じた」、「当て字」、「約・約音・約言・約転」、「訛り・訛って」といった言葉をよく目にします。要するに、言い間違いや書き間違いや発音上のアクセントが起こったり、簡略化や勘違いが生じたという意味でしょう。言葉を使うのはヒトの自然なとなみですから、そうなるのが当然です。「正しくない」がたくさん起きて、言葉が変遷する。そう理解しています。

「正しくない」が頻発して言葉が生き、そして変わっていくのだと考えると、「正しい」対「正しくない」という対立や、「正しい」が「正しくない」を駆逐すべきだという考え方に違和感と嫌悪感をいだいている身としては、うれしくなります。また、「美しい〇〇語」や「正しい〇〇語」とか、「正しい言葉遣い」や「正しい漢字の読み方」や「正しい文章

の書き方」といった言い方や考え方が、幻想であり、歴史的に見れば劣勢に立たされてきたのだという証しを確認できて、心強く感じます。

最近国語が乱れてきた。正しくない言葉遣いが氾濫している。こうした趣旨の意見が跡を絶たないのは、「正しい」対「正しくない」を根拠にしているようで、実は自分にとって「快い」対「快くない」に基づいているようだと考えられます。言葉に限って言うと、「正しい」とは、「正しい」と教えられ、そう思い込まされたものです。思い込みは洗脳とほぼ同じですから、「正しい」に根拠なんてありません。また、思い込みは「快い」の源泉だと言えそうです。考えなくていいから楽なのでしょう。

たとえば、「当て字」や「らぬき言葉」や「新語・流行語」に対して批判的な意見を述べるヒトたちは、それが自分にとって「快くない」ために悪態をついているように見えます。恐怖感の表れ、あるいは保身のためだという気もします。異なるものを受け入れるには、努力と寛容さが必要になります。時には、勇気も要るでしょう。それが面倒だと感じるヒトがいるようです。

言葉は変わる。それも、勝手気ままに変わる。これが、言葉における変遷のありようだと言えそうです。



当て字と言えば、明治から大正にかけて活躍した、ある作家を無視するわけにはいきません。一般には「文豪」と呼ばれているヒトなのですが、その言葉が好きではないので使いません。「ヒト」や「作家」と書くだけにとどめます。著作権にかかわる場合を除いて、固有名詞はあえて挙げません。固有名詞は強い光を放つので、その前後にある言葉たちの影が薄くなるという弊害が生じるからです。

そのヒトの漢字の使い方は「感字」と表記すべき感覚的なものでありながら、理にもかなっていないように思えます。そのヒトの残した諸作品は、的を射た絶妙な当て字の宝庫です。ただし、虎の威を借る狐のように、そのヒトがやっているのだから、当て字を正当化するという真似はしたくありません。

当て字は、言葉をめぐっての「正しい」対「正しくない」という幻想とかかわるために、批判的な意見を述べるヒトが必ずいます。どうして批判するのかというと、自分にとっての居心地のいい世界が脅かされる気がするからだと思われます。自分にとって、居心地がいい空間を、とりあえずテリトリーと呼んでみましょう。



テリトリーでは、考えるという作業をする必要がほとんどありません。軽度の思考停

止状態というのでしょうか。快い閉じた世界です。「まほろば・まほろ・まほら・はほらば」という言葉を連想します。「まほる・まもる」と関係があるのかしらん。専門家ではないので知りません。無精者の素人ですから、知ろうとせず、言葉やイメージと戯れるだけです。

自分のテリトリーを侵されている。テリトリーに危害がおよぶ恐れがある。そんなふうにした場合、他の多くの生き物と同様に、ヒトは攻撃的になります。ちょっと戯れてみますと、テリトリーは、「まぼろし・魔を滅ぼす・魔滅ぼし」と関係がありそうです。魔物やよそ者を成敗する、という発想ですね。

困ったことに、ヒトは自分たちのテリトリーにおける居心地の良さ、つまり価値観や掟を、よそのヒトたちにまで押し付ける習性があります。あれこれ思い悩んだり、考える必要のない土地を拡大したいのかもしれませんが。横着なだけでなく、残酷ですね。他人様を犠牲にしてまで、楽をしたいのですから。

テリトリーの類語に「なわばり・縄張り」があります。ヒトの場合には、縄を自分の土地を囲うためにだけでなく、異なるヒトたちを縛るのにも使おうとします。こうした魔こそ、滅ぼし、無くなってほしいと願っています。

でも、まほろばをつくるために、まもり、まをほろぼさなければならないとするならば.....。まよってしまいます。まよう・迷う、まどう・惑う、まどう・魔道、まどう・償う、ですか。先の戦争が思い出されます。現時点において世界各地で起こっているらしい紛争や戦争のことを考えると、致し方ないという思いを強くします。

まどえども まほろばとおし ままのかわ

09-08-15 げん・幻 -3-

◆げん・幻 -3-

2009-08-15 08:22:09 | さくぶん

★

「まぼろし」を「間を滅ぼす」と読んだときの、「ま・間」という言葉の意味とイメージですが、説明しにくく感じます。たとえば「間の取り方」というときの、「間」を他の言葉を使って説明しようとする、困ってしまいます。辞書で語義を調べるという手もありますが、すぐに辞書を引くのではなく、自分で考えてみるのもおもしろいです。

とは言うものの、芸も知識もありませんから、せいぜい類語や似た言葉で置き換えてみるくらいが限度です。とっさに、あたまたに浮かんだのは「あいだ・間隔・隔たり・すきま・休み・休止」です。「ま・間」をセンテンスで説明しようとしても、できそうもありません。

観念して広辞苑を引くと、語義に「リズム」という言葉が見えます。日本的だと思い込んでいる「間」という言葉の説明に、外来語が紛れ込んでいるとドキッとしますが、興味も覚えます。「拍子・ころあい・まあい」という言葉を使って定義を試みている辞書もあります。

ある言葉を辞書で引いて語義を確認したのち、その語義で使われている言葉を同じ辞書で、あるいは他の辞書で調べてみる場合があります。「ま・間」の場合には、さらに「リズム・拍子・ころあい」を国語辞典で引いてみるとか、「rhythm」を英和辞典で調べてみます。

「リズム」については、「時間的な諸関係（広辞苑より引用）」、「音の長短や強弱の組み合わせ（新明解国語辞典より引用）」、「構成要素の相関的調和・不随意行動のパターン（リーダーズ英和辞典より引用）」、「周期性・周期的な変動（ジーニアス英和大辞典より引用）」というフレーズが目を引きました。

★

「間」という漢字と「あいだ」という読みを頼りにしながら、辞書をさまよっているうちに、「間」には「かん」という音読みのほかに、「あい・あわい」という訓読みもあることが分かります。

音読みは漢語系の読み、つまり中国語での読み方を日本風に読んで記したものです。いく通りかの読み方がある場合には、時代や地域による発音上の違いみたいです。一方、訓読みは大和言葉系の読み方、つまり漢字にその意味に相当する日本語を当てた時の日本語の発音だと理解しています。

まず、訓読みのおもしろさを味わってみましょう。たとえば、「ま（間）」が、「ma」という音と同音の他の語や、「ma」のつく言葉やフレーズを、呼び寄せてくれます。「ま（魔）・ま（真）・ま（摩）……」や「まよう・まもる・とんま・まま・おしまい……」

という具合です。この時には、「ま」の意味は希薄になり、あるいはまぼろしのように消えて、代わりに「ma」という音が前面に出てきます。

「ま（間）」が「間」という漢字と一体になって、「間」のつく言葉やフレーズを、引き寄せる場合もあります。たとえば、「間合い・床の間・隙間風・間が悪い……」が、これに当たります。「ま」と「間」が合体しているというか、音と意味とがぴったりと重なり、くっつき合っている感じがします。

音読みをすると、どんな感じでしょう。「かん・けん・げん（間）」ですから、たくさんありそうですね。「間隔・空間・世間・人間・間接税」は序の口で、続々出てきそうです。中国から伝わった言葉もあるでしょうし、日本でつくられたフレーズもあると思われます。その区別や実例については知りません。

いずれにせよ、音読みをした場合には、音と字と意味という3者の間にある関係は曖昧なようだというのが、個人的な感想です。分かるような分からないような感じでも申しましょか、つかみどころがないのです。ひよっとすると、音読みする漢字のフレーズ、つまり熟語は抽象的な意味のものが多くからではないかという気がします。

大和言葉と、漢字と、漢字の音読みと訓読みとの間には、何があるのでしょうか。「あわい・ま・あい・かん・けん・げん・間」と文字を並べて、声に出してみたり、じっと眺めてみたりする。そのうち眠くなる。そんなことが好きです。

★

思いつきというか、でまかせなのですが、どうやら、「間」という漢字は、日本語に流れている、漢語系と大和言葉系という2つの系統を浮き彫りにしたり、両者をつなぐ役割を担っているという気がします。

このように、漢字という、いわゆる表意文字をながめることで、その字の意味とイメージが広がります。でも、表意文字と言っても、同時に音も表しているわけですから、漢字は表音文字でもあるわけです。

一方、ひらがなやカタカナやローマ字は、表音文字と呼ばれています。でも、その字面（じづら）を見ていると、音以外のものを感じます。字の面と書くのですから、顔みたいなものですね。それぞれの文字が持つ形には、音でも意味でもないイメージや動きや表情とでもいうべきものが感じられます。

字面という視点から見ると、表意文字対表音文字という構図は意味をなくしてしまいます。すべてが、形としてとらえられるからです。ヒトが個人レベルでその時の気分や事情に応じて書く文字には、違いがあるはずで。また、印刷された活字の書体による

差異に注目すると、なかなか奥深い世界に導いてくれます。



大学3年生になり、就職について考えはじめたころに、活字のデザイナーを志したことがありました。写植機（写真植字機）のオペレーターになろうとも思い、その操作を教える学校にも通いました。タイポグラフィーと呼ばれる分野の本、印刷会社や活字メーカーが出している書体見本を集め、虫眼鏡で書体ごとの特徴を鑑賞する楽しみも覚えしました。

一口に印刷物と言っても、紙やインクの質、刷り上り具合やレタッチ（写真製版の修整）の状態によって、ふだんは気にも留めない違いが生じるのを知ったのが、そうした時期でした。今でも、新聞・雑誌の文字や写真を、虫眼鏡で拡大して見る習慣があります。趣味と言ってもいいかもしれません。ときどき熱中しすぎて、時が経つのを忘れてしまいます。

テレビ画面やパソコンのモニターでも同じです。画質、書体（同じ書体名でもメーカーごとに違いがあります）、画面の明るさといった条件の違いで、同じ文字や文字列の印象が異なり、印象が変わります。そういえば、パソコンでは、フォントという言葉が使われていますね。パソコンを操作してこの言葉を見かけたら、ちょっと休憩するつもりで、たくさんある書体のそれぞれの美しさや、活字の大きさによる印象の違いを、ぜひ楽しんでみてください。

以上挙げた例も、一種の「ま・あいだ・あわい・かん・間」ではないでしょうか。「あわい」という言葉に「あわ・泡」を見て、「淡い」という言葉を連想しました。まぼろしは、はかないです。あわいはあわい。そんな気がします。



意味という点では、「間」と「関」とは、それほど隔たっていないように思われます。もう少し長くして、「間隔」と「関係」という言葉を比べてみるのも、おもしろそうです。「隔たり」と「関わり」という意味を持つ語の、隔たりと関わりをながめ、思いにふける。その再帰というか回帰というか、たとえば言えば、脳が脳について思考するみたいな遊びが、好きです。

比べるとは、違い、つまり差異について考えることだと言えそうです。「さい・差異・際・再・采・賽」と並べてみると、その言葉たちが「差異」という「祭」を演じているようで、見ていて飽きません。

こんなふうには、何でもつなげてしまう、あるいは何とでも言えるのが、言葉の働きの

1つではないでしょうか。もちろん、つなげるのはヒトです。もっと正確に言うなら、脳の仕組みなのかもしれません。ひょっとすると、脳の仕組みを超えた、さらに大きなもの、または多くのものにかかわっている仕組みなのではないか。そんな気がします。

そう考えると、つなげているのか、つながっているのかが、分からなくなります。もしかすると、このあたりに言葉の限界、つまりヒトの思考の限界があるのかもしれません。

いずれにせよ、こうしたことは、ヒトには「分かる」ことではなく、「想像する」しか、あるいは「たとえる」しかないたぐいの話にちがひありません。「ま・間・さい・際・差異」は「きわ・際・きわみ・極み・はて・果て・かぎり・限り」でもありそうです。

ヒトにとっては、宇宙は「まぼろし・幻界」であり、「ぎりぎり・限界」ということですね。身の程を知るべきだ、ということでしょうか。

09-08-16 げん・幻 -4-

◆げん・幻 -4-

2009-08-16 10:13:34 | さくぶん

★

「まぼろし」を「間を滅ぼす」と読んでいると、知らぬ間に「真を滅ぼす」とも読んでいるような気持ちを覚えます。事物や現象のあいだの隔たりをなくす。これが「間を滅ぼす」だとすれば、その行為は、「真」つまり「真実」と呼ばれているものを、無化するまでには行かないまでも無力化する作業に、近づくと考えられます。

つまるところ、「真を滅ぼす」とは「真をなくす」です。「真を生かす」お話をしているわけではありません。その意味では、殺伐（さつぱつ）とした場に立ち会うことだと言えます。

間・差異・違い・隔たりがなくなっていく様子は、真実と虚偽という対立した構図が

薄れていくさまと重なって見えます。すべては、まぼろし、つまり幻想である、という安易な話におさまってしまいがちです。

ところで、今、こうしてイメージと戯れながら書いているのは、あくまでも、うさんくさくて、いかがわしい物語です。実体、現実、事実、そして真実といった言葉が指し示していると信じられている、うさんくさくて、いかがわしい神話とは次元が違うように思われます。言葉が足りず、ややこしい言い方をしてしまいましたが、分かっていただけかもしれません。

★

ここに書かれている駄洒落に満ちたたわいない話も、論証や実証といった手続を踏んだいかめしい科学・学問の話も、うさんくさくて、いかがわしいという点では共通しています。うさんくさいとか、いかがわしいというのは、人知の及ばない事象を、知ったり分かったりできると思い込んでいる状態くらいの意味です。明らかに語弊のある言葉ですが、大切だと思うことを訴えたいときに使っています。

自分たちにとって免れることができない限界を、ヒトという種（しゅ）は受け入れ、自覚しているのでしょうか。これは大切な問いだと思っています。ヒトは、何かの代わりに、その何かではないものを用いるしかない。これが、ヒトの限界です。

具体的に言えば、知覚という仕組みです。知覚器官から脳にいたるまでの各所で生じているという、信号あるいは情報の伝達と処理という形でしか、ヒトは世界および宇宙を知覚できないらしいのです。

こうした仕組みは、ヒトに限らず、この惑星に生息するほぼすべての生き物に共通した知覚の手段だそうです。でも、その仕組みを自覚し、受け入れることができるのは、おそらくヒトという種だけみたいなのです。

もし、そうであれば、自覚し、受け入れようではありませんか。自分たちの知覚に備わった、うさんくささと、いかがわしさを認めようではありませんか。敗北を認めようというではありません。むしろ限界を自覚することで、科学や学問の精度は高まるのではないのでしょうか。それだけでなく、この惑星での無軌道な行いに歯止めをかける一助になるかもしれません。

★

自分を含め、ヒトのなすことはすべて、いかがわしく、うさんくさい。そうした思いを前提に、ああでもありこうでもある、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもない、ああでもないこうでもあるという具合に、「さまよい・さ迷い・呻吟い」なが

ら、言葉とたわむれていこうと思っています。

真剣にならずに本気に、本気にならずになら真剣に、という感じです。何についてもそうですが、半酔または半睡というのでしょうか、一途になって、のめり込むのを避け、風通しをよくしておくことが必要ではないかと自戒しています。

★

「まぼろし」という言葉を口のなかで転がしていたら、「マーボー豆腐のロシア風」が転じて「ロシア風麻婆豆腐」という、荒唐無稽とも言えるイメージというか言葉があたまに浮かびました。

ボルシチをベースに絹ごし豆腐をぐつぐつと煮込むなどという、レシピにまで思いをめぐらしそうになりました。意外と、おいしいかもしれません。冬なんかに、熱々の「ロシア風麻婆豆腐」をスプーンにすくって、ふうふうと息を吹きかけながらすすると、からだは温まりそうです。

そんなまぼろしに浸っていると、「うつつ・現」つまり現実が、「うつうつ・うつらうつら・うとうと」つまり「ゆめうつつ・夢現」に侵され、やがては「ゆめ・夢」へと移ろっていくようで、いい気持ちになります。夢はすべてを肯定してくれます。それは、夢の主語が何か、あるいは誰かという問いと関係がある気がします。とはいえ、答えは誰にも分かりません。いずれにせよ、安心して身をまかせられるのが、夢の魅力です。

09-08-17 げん・幻 -5-

◆げん・幻 -5-

2009-08-17 08:37:44 | さくぶん

★

「まぼろし」という言葉のなかでも、とりわけ気に入っている「ま・ma」という音を発して遊んでいたら、官能的とも言うべき体験を味わうことができました。

まず、口をしっかりと閉じます。両唇に力を入れるのがコツです。これが、「m」の発音の構えです。そのまま、声を出そうとしてみてください。鼻から空気が抜けてハミングする状態になりますね。鼻の奥から喉にかけて、わずかな隙間に残っている空気が震えるのを感じ取ってみましょう。

次に、上の口の構えから、一気に息を吐き出す要領で、大きく口を開けます。口の後部にある軟口蓋（なんこうがい）と呼ばれる皮膚の外壁と、鼻の奥が、そこを通る空気と共に振動します。これが「a」です。

以上の「m」から「a」への移行を、繰り返してみましょう。口の動きと状態に集中し、できれば、あたまを「から・空・殻」にして、何度か試してみてください。

★

学生時代に、言語学や音声学をかじったことがあります。そうした分野では、「ma」という音、1つを取っても、それをさらに意味素、形態素、あるいは音素という言葉で「分ける」作業を行っていました。現在でも、あのような言葉が使われていて、あのような作業をしているのかどうかは知りません。

そうした作業に意味があるのかどうかは分かりませんが、話としておもしろかったことは確かです。そのこじつけの妙技と、荒唐無稽なところが、おもしろかったのです。うさんくさいとも言えます。

今になって思うのは、たとえば「ma」を分けることで、「何か」が「分かる」のかと言えば、それははなはだ疑問だということです。「分ける」作業で、「何か」が「分かる」のではなく、「生じる」のだとすれば、「まぼろしをいだく」ことではないかという気がします。「ma」と発音してみることで「何かは分からない何か」を「感じ取る」ことのほうが、ずっと刺激的な体験ではないかと思っています。

★

「ma」と発音しながら、その行為を「何か」に置き換える作業は、2つに「分けられる」気がします。1つは、意味素、形態素、あるいは音素という具合に、その音の構成要素に「分ける」方法です。もう1つは、「ま・間・魔・真・麻・馬……」というふうに意味やイメージに「分ける」やり方です。

繰り返しになりますが、両者に共通するのは、「置き換える」、つまり「すり替える」という動作が行われているらしいということです。これは、ヒトにとって免れない行為のようです。

「ma」と発音する行為だけでなく、話を広げて話し言葉と書き言葉について考えてみても、事態は変わらないみたいです。言葉を発する、つまり話したり書いたりする、ヒトという種に特有の行動は、「置き換える・すり替える」という仕組みを基本としていると言えそうです。

一見、遠いようですが、「置き換える・すり替える」と「まぼろし」とは、深くかかわり合っている。そんな気がします。ふだんは意識されないのですが、そうなっているのに気付くこともあるみたいです。「あれっ」とか「おやっ」とか「あらまあ」という感じでしょうか。

「あはっ」とか「なるほど」とは違います。「分かる」や「ひらめく」のではなく、あくまでも「気付く」のです。「分かる」や「ひらめく」には、あらかじめシナリオが用意されている気がします。やらせや出来レースみたいです。だから、驚きはなさそうです。確認できた喜びならありそうです。

いずれにせよ、「まぼろし」には驚きが伴う場合が多いようです。喜びが伴うという保証はない感じがしますが、「思い込み」という「まぼろしのまぼろし」というか、「二重のまぼろし・ダブル・double（※この単語を大きめの英和辞典で引いてみてください。おもしろい意味がいろいろあります。）」にはあるみたいです。

一方で、「すり替わっている」のに気が付かないケースも、意外と多いみたいです。「まぼろし」は「化ける」のがうまいのでしょうか。ヒトが迂闊（うかつ）なだけなのでしょうか。

★

「ま・ma」という、音であり言葉であるものの持つ、イメージの喚起力と意味の生成力は、かなり強そうです。「ま・間・魔・真・麻・馬……」という意味の連鎖や、「マーボー豆腐のロシア風」転じて「ロシア風麻婆豆腐」といった荒唐無稽なイメージについての話とは別の考え方をしてみます。

とは言っても、基本的には似たような「置き換え・すり替え」作業をしているだけなのですが、たとえば、日本語以外の言語で使われている、母親を意味する「ママ・マー・マーマ・マーム・マンマ・ママン」、古い日本語で乳母を意味する「ママ・めのと」、ご飯を意味する日本語の「まんま、ママ、めし」、日本語以外の言語で、乳や乳房と関係のある「mammal（英語で「哺乳類」）・mammalian（近代ラテン語で「乳房の」）（※以上はジーニアス英和大辞典を参照しました）」という語に、目を向けて考えてみます。

「ma」という類似だけでなく、さらに細かく「m」と「a」に「分ける」ことも、言語学上

は可能らしいです。その上で「m」に注目してみます。すると、「milk (英語で「乳・母乳・牛乳」)・meolc および milc (古英語で「人間・動物の乳や乳汁」)(※以上はジーニアス英和大辞典を参照しました)」との類似にまで、話を「つなげる」ことができます。

以上の話を、単なる「こじつけ」とみなすヒトがたくさんいそうですね。無理もないことだと思います。確かに、いかがわしくて、うさんくさい話ですよ。それとも、「なるほど」と納得なさいますか。

★

「こじつけ」で「でまかせ」ですが、「ma」に言語とまぼろしの根源を見る思いがすることがあります。「リアル」だという、まぼろしの特徴を備えている点が、まさに「まぼろしっばい」のです。

「ma」という音を出すさいには、「m」から「a」へと口の構えと呼吸を移行させていきますね。「m」とは言語学上は子音と呼ばれているのですが、日本語ではローマ字とは異なる制約があるために、「む・ム・無・无・武・牟・務・夢……!」というふうにしかな記述できません。

どうしても「mu」のように、母音の「u」が伴います。もっとも、実際にはあいまいに発音されるようです。「すきやき」や「キムチ」が「sukiyaki」や「kimuchi」ではなく、「skiyaki」とか「kimchi」と発音される場合が多いのと同様です。

「m・mu」というと、その音に相当するものが数多くあるにもかかわらず、個人的なイメージでは、「無」を特権化させてしまいます。「何もない」という意味の漢字ですね。好きな文字です。めったに目にしない漢字ですが、「む・无」も「何もない」という意味らしいです。

「a」については、「あ・ア・阿・吾・我・彼・亜・鳴……」のうち「阿」を優先させたい気持ちになります。「阿吽の呼吸」というフレーズのイメージが、強いからかもしれません。「阿」を広辞苑で引くと、「阿字 (=あじ)」「阿字観 (=あじかん)」「阿字本不生 (=あじほんぶしょう)」などというフレーズにまで導いてくれて、その意味のうさんくさに驚き入ってしまいます。

ここでは、「どうだ!」・「梵語だよ。分かんないの?」・「密教だよ。大したもんだらう!」・「真理様の象徴だよ。ご存じない?」という具合に、虎の威を借りる狐のような真似はしたくありませんので、ご興味のある方は、大きめの国語辞典で、上記の「阿」の付くフレーズをお調べになってください。意味をお確かめになり、感動なされば、そんないいことはないと思います。



「あうん・あーむ・おおん・おーむ・おうむ・aum・om」という、言葉とも音とも言えるような言えないような声の出し方があるそうです。インド哲学や仏教と関係ある「聖なる音」らしいのですが、詳しいことは知りません。「ま・まー」や「ma」が「m」から「a」への移行だとすれば、「あうん・あーむ」は「a」から「m」への移行だと言えそうです。

両者は逆だと考えられるみたいだし、連続して繰り返して唱えれば、「えん・円・縁・延」、つまり「わ・輪・環・和」を延々と描いているようにも思えます。ヒトが口をぱくぱくさせながら「話している」さまを見ていると、そんな気がします。だから、「わ・話」なのでしょうか。「話す」は、両唇を「離す・放す・放つ」、あるいは、声つまり息を「発する・発す」なのでしょうか。

こういう、でまかせで、トリトメがなく、いかがわしい思いに耽るのが好きです。根拠がないというのは、個人的には、自由という状態を意味します。宙ぶらりんですが、心地よいです。

唐突ですが、ジャンガリアンハムスターを見ていると、「あーむ」という感じで背伸びをしながら、あくびみたいな仕草をしますね。かわいいです。その様子を見ながら連想したのですが、ヒトの赤ちゃんの泣き方は、あくびの逆で「むあー」とも聞こえなくもないです。一言発するのではなく、繰り返して「むあーむあーむあー…」と泣くのですから、逆ではなくて、やっぱり「わ・輪」なのでしょうか。

「むあー」と「あーむ」が、始原的な行為だという気がしてきます。なんだか、話が、宗教・カルト・スピリチュアリティ・オカルトめいてきました。一緒くたにくくってしまい、関係者の方には失礼かと思いますが、個人的には苦手な分野です。こうしたたぐいの生業（なりわい）とは、これまで無縁で来ました。この先も無縁でいたいと思っています。



宗教、カルト、スピリチュアリティ、オカルト……と、つぶやいていたら、「近親憎悪」という言葉が浮かびました。実際、自分の言動は、うさんくさくて、いかがわしいと思えますし、自意識過剰だからでしょう。

自意識とは、文字通り、自分の意識について考えることですから、それが近親憎悪とかかわっているかどうかを決定する側にはありません。ですから、何とも言えませんが、「近親憎悪」という言い方に対し、いい気持ちがないことは確かです。もしも自分の意識のなかに、生業としての宗教・カルト・スピリチュアリティ・オカルトめいたものがあれば、「まぼろし・魔を滅ぼす・魔滅ぼし」したいです。

もっとも、群れることには大きな抵抗感があるので、仮に魔を滅ぼせなかったとしても、組織には属せないだろうと思います。組織には、ふつうリーダーが必要です。程度の差はあるでしょうが、個人崇拜は避けがたいと思います。そう考えると、やっぱり群れるのは嫌です。でまかせは、ひとりでやるほうが気楽です。罪つくりにもならないと思われま

09-08-18 げん・幻 -6-

◆げん・幻 -6-

2009-08-18 09:04:02 | さくぶん



類似、つまり「似ている」という感じを、ヒトは重視しているようです。「似ている」は、「つなげる」、「こじつける」、「たとえる」にも、「似ている」感じがします。

「比喩」という、抽象度が高く、強い響きのある漢語でくくることもできそうです。「比喩」というと、個人的には、「表象・表象作用・再現・ルプレザンタシオン (représentation) ・代理・代行・再現代行・代行作用・上演・再現前・再現前化」など、ある種の人たちが多用する一連の類語を連想します。

学生時代には、そうした言葉たちがよく使われる領域を勉強していました。今は、そのたぐいの分野の勉強はしていません。もともと勉強は好きではありませんでした。好きなことだけ学ぶ。そんな感じでした。年を取るごとに学ぶことすら億劫になってきて、この数年間は、読むより書く時間のほうが長くなっています。

インプットするよりアウトプットするという具合に、横着な態度が身につけてしまいました。アウトプットと言っても、出るに任せて書く、つまりでまかせを並べているだけです。やはり横着としか言いようがありません。書くといっても、かゆい皮膚を搔くようなものです。かゆい。確かにむずがゆいです。

★

ヒトは、「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いている。

「比喩」や「たとえ」を、今述べたフレーズに、言い換えることもできそうです。「その「何か」ではないもの」とは、「何か」の「代理」であるわけですから、「何か」と「その「何か」ではないもの」とのあいだに、「似ている」という「感じ」がすることが、ヒトにとっては大切な基準となると考えられます。あくまでも、「感じ」つまり「イメージ」です。あるいは、もっと生物学的に記述して「知覚」でしょうか。

唐突ですが、「似ている」と「まぼろし」とは「似ている」と感じられます。「まぼろし」を「間を滅ぼす」と読み、「複数のものたちのあいだにある隔たりをなくす」という考え方をすれば、両者は「似ている」ほどの意味です。ここでも、「ま・あいだ・あわい・間・さい・際・差異」という言葉とイメージが、かかわってくるようです。

★

人面〇〇という言葉がありますね。たくさんありそうです。こうした現象に共通するのは、いろいろなものに、ヒトの顔を見てしまうという点です。ヒト以外の生き物の顔、毛皮の模様などヒト以外の生き物の身体の一部、ヒトの皮膚にできた出来物のもとより、無生物、つまり、壁や天井の染みの一部、カーテンの模様、空に浮かぶ雲、石や岩といったものに、見えるはずのないヒトの顔を見てしまうのです。

きわめて主観的な現象のようですが、複数のヒトたちに共有される感覚だということになると、主観的では済まされないという思いに、ヒトはとられるみたいです。ただ事ではない、という感じでしょうか。人面〇〇だけでなく、イエスや聖母の顔・姿、あるいは観音像が何かに出現したという噂をめぐって、大騒ぎする例があるのも、理解できる気がします。

ヒトは、ヒトの顔や表情に大きな反応を示すと言われています。ヒトが赤ん坊のときから、観察される習性のようなのです。顔と表情とは区別して、つまり「分けて」考えるべきだという気がします。「顔」が即物的な意味合いを持っているのに対し、「表情」という言葉にはトリトメがないというか、抽象的なニュアンスを感じます。

★

顔をつくる。これも、ヒト特有の習性みたいです。

表情をつくる。お化粧をする。仮面やお面をつくる。ヒトやヒト以外の生き物を描く。「にんぎょう・ひとかた・人形」をはじめ、ヒト以外の生き物に「似せた」ものをつくる。

今挙げた一連の行為には、たいてい、「顔をつくる」という行為が含まれていると思われます。

顔を構成するパーツは、目、口、鼻、頭という順序で重要度が決まっているのではないかと、個人的に感じています。どういうわけか、哺乳類・爬虫類・鳥類・両生類・魚類・昆虫には、たいてい、目、口、鼻、頭が備わっているように「見えます」。

とりわけ目が特権的な位置をもっている気がします。目を「見て」、あるいは、目に「見られて」、やすらぎを覚える場合もありますが、怖い、不気味だ、心が乱されるという思いにとらわれることも多いです。人面〇〇のたぐいだと、後者がほとんどだという気がします。

★

生き物の生態を写した映像を、テレビなどで見るとき、ヒト以外の生き物をつい擬人化している自分を意識し、はっとすることがあります。そうした映像に添えられるナレーションが、被写体である生物を擬人化した物語となっていることにも、気が付く場合があります。

テレビや映画に限らず、身の回りを見ると、「にんぎょう・ひとかた・人形」だけでなく、擬人化された生き物を模した玩具のたぐいや絵が多いのに驚かされます。いわゆるキャラクターという映像つまり視覚的イメージや、キャラクターグッズという物体や、人面〇〇と呼べそうなものに取り囲まれているのにも、驚かされます。

「何か」に似たものに囲まれているというぼんやりとした感じから、世界そして宇宙は比喩あるいは暗号であるという確信までは、ほんの数歩だという気がします。「何か」とは、必ずヒトの属性を備えているように思われます。

ヒトにとって、森羅万象は「ヒトのようなもの」なのかもしれません。そう思うと、ヒトはある種の「心の病」にかかっているとも言えそうです。

★

擬人化されたものが、夢にまで出てくるのには、閉口し感心もします。思いつき、つまり、でまかせですが、夢というのは、擬人化という仕組みを原理としているのではないのでしょうか。夢のなかでは、何もかもが、ヒトである自分と通底しているように思えてなりません。

夢の主語は自分であり、自分と万物のイメージをつなげる、非人称的で匿名的でニュートラルな仕組みだという感じもします。「非人称的で匿名的でニュートラルな」というの

は、ヒトに深くかかわりながら、ヒトがコントロールできない自立した状態にあるという意味です。だから、ヒトは夢のなかで自由であると同時に不自由を感じている、という気がします。

★

ヒトと、ヒトが知覚する森羅万象とは、ヒトの意識および無意識のなかで「つながっている」というか、比喩的な意味で「血縁関係にある」のではないか。もしかすると、それは、ヒトの知覚と意識のなかにおいてだけでなく、宇宙に広がっている仕組みなのではないか。ふと、そう思いました。

ヒトという種に特有の、身の程をわきまえない不遜な考え方だと反省しつつも、こういったことについて思いをめぐらしてしまいます。致し方ない気がします。ヒトからこの性癖を取り除いたら、何が残るのでしょうか。尻尾のないおサルさんたちのなかでも、とりわけ弱い種でしょうか。

★

ここであることは、むこうでもある、同時にいたるところである。大雑把で、飛躍しているうえに、いかがわしい考え方かもしれませんが、そういう気がします。根拠はありませんが、そこに「つながり」、しかも「血のつながり」を悪感じます。「血」とは、もちろん比喩です。

すべてのものが「血でつながっている」から、さまざまなしがらみや制約から意識が解放されている夢のなかでは、何もかもが肯定されるという形で、知覚され意識されるのではないか。そんなふうにも思います。

知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理される。これがヒトにおける知覚および意識だとすれば、よく見聞きする安直な考え方である、「すべては幻想である」という物語に行き着きそうです。その考え方を部分的に拝借すると、夢と現（うつつ）とは、幻（まぼろし）つまり、「まを滅ぼす」という仕組みによって「つながる」と言えるように思えます。

★

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

存在をめぐるすべての物語や神話は、今述べた、個人的に気に入っている2つのイメージの変奏なのでしょうか。このイメージが思い込みとなっているために、「(世界や宇宙においては) 何もかもがつながっている」とか「(夢のなかでは) 何もかもが肯定される」と感じられるだけなのかもしれません。

きっとそうです。思い込みの産物でしょう。心の病のあらわれでしょう。投げた言葉は、たいてい自分自身にかえってきます。メタな立場に立つ、つまり自分を棚に上げることのできるヒトはいません。自分で自分を見下ろす視点はないように思われます。幻界は言界であり現界でもあり限界だと言えそうです。

09-08-19 げん・幻 -7-

◆げん・幻 -7-

2009-08-19 10:22:29 | さくぶん

★

ふつう、「そっくり」とは、「似ている」を強めた状態だと考えられている気がします。「そっくり」がさらに強まり、ジャンプすると「同じ」という状態になる、と思われている気もします。この調子で行くと、「似ている」の究極の姿が「同一」ということになるのでしょうか。

いわば、「似ている」、「そっくり」、「同じ」、「同一」という格付けです。こうしたイメージは、個人的なレベルでいただくものですから、人それぞれだと思われます。

たった今書いた「格付け」を見ているうちに、「そっくり」は「似ている」が強化されたものではないような心持ちになりました。両者は次元が違うような気がしてきたのです。もちろん、これもまた、個人的なレベルでの印象の話です。

★

スーパーの棚に置かれた、プラスチック製容器に入ったヨーグルトを思い浮かべてく

ださい。何種類かのヨーグルトが陳列されています。各メーカーの販売している、ある特定の品名が容器に記された「そっくり」なヨーグルトが複数並べられています。「そっくり」なのは、大量生産されたからです。他のスーパーでも、その商品と「そっくり」なものが並んでいるにちがいません。

次に、電気製品の量販店で売られている、パソコン用のマウスを例に取ってみましょう。ヨーグルトと同様に、メーカーによって、あるいは同じメーカーでも違った色・形・大きさのものが置かれているはずですが、そうした店では、透明のプラスチックに収められたマウスが、長いフックに吊るされて並んでいるのを、よく目にします。これも、「そっくり」なものが、たいてい複数ぶら下がっています。他店でも、同じように販売されていることは、ほぼ間違いないと思われます。

「そっくり」なものとして、ヨーグルトとマウスを例として挙げましたが、お茶漬け海苔、サンマの煮付けの缶詰、ジュース、冷蔵庫、乾電池、ボールペン、紙おむつなどについても、ほぼ同じ状態が想像されます。共通するのは、大量生産され、大量に流通し、大量に販売され、大量消費されていることです。それが、「そっくり」の大前提だと言えます。

キュウリ、ナス、キャベツ、サンマ、イカ、ウナギも、「そっくり」と言えば「そっくり」な状態でずらりと並べられたり、積み重ねられて売られています。農産物や魚介類の場合には、大量に栽培され、または漁獲されるのが共通点と言えます。これらが、大量に流通し大量に販売され大量消費されるのは、ヨーグルトやマウスなどの場合と同じと言っていいと考えられます。

★

「似ている」は、「別のものに似ている」が前提になっている気がします。それに対し、「そっくり」は、「そのもの自体に似ている」が前提であるように感じられます。当然のことながら、あくまでも個人的な意見です。思いつきであり、でまかせなので、たいした根拠はありませんが、おいおい説明するつもりです。

「似ている」も「そっくり」も「言葉」、つまり「代理」ですから、いかがわしく、うさんくさいことは言うまでもありません。「いかがわしい」や「うさんくさい」というのは、「いかがわしくない」や「うさんくさくない」を確かめる方法も手段もヒトは手にしていない、くらいの意味です。

「いかがわしい」か「いかがわしくない」か、および「うさんくさい」か「うさんくさくない」かを、ヒトは決定できない点が、「いかがわしい」し「うさんくさい」というふうにも言えると思います。

「いかがわしい」や「うさんくさい」を、「根拠がない」という言い方と同義だと、理解することもできそうです。ただし、ヒトという種（しゅ）の知覚と意識に、絶対的な信頼性と有効性を認めているヒトたちには、縁遠い考え方だろうと想像されます。



「似ている」が、兄弟姉妹、親子、親戚といった血縁関係を比喩にして語るができるとするなら、「そっくり」は、コピー機での複写、印刷、大量生産にたとえられそうです。

ところで、比喩、つまり、「たとえる」という行為は、有効性に支えられています。たとえば、AをBにたとえた場合、AとBとのあいだに認められる共通性および関係性がどこまで有効であるかで、その比喩の説得力が決まるという意味です。

「似ている」は、血縁関係のある人たちの間だけでなく、他人同士の間でも、成立する様態です。それなのに、どうして血縁関係という比喩を優遇するのかというと、「つながっている」という属性を強調したいからだとと言えます。

また比喩を使うことになりますが、たとえば、他人同士であっても、同じ〇〇人であったり、同じヒトという種であったりするわけですから、「つながり」はあります。でも、話の説得力を持たせるためには、系図という、いわば「見える」形でプレゼンテーションできるくらいの「濃いつながり」が必要なのです。



「似ている」の根拠となる「関係性」と「共通性」という基準を支えている比喩である、「(血が)濃いか薄いか」は程度の問題だと言えそうです。「関係性」と「共通性」という言葉の正体らしい「説得力」というものが、いかがわしく、うさんくさいのは、根拠を欠いている場合がほとんどで、またもや、たとえて言うなら、「声が大きいほど」説得力があるからだと言えそうです。

「関係性」と「共通性」の実体らしい「血縁関係」および「血の濃さ」という比喩、言い換えると道具立てですが、これは「声の大きさ」、つまり「説得力」とほぼ同義ではないかと考えられます。

万が一「何らかの根拠に基づく有効性」と「声の大きさによる説得力」とが別物であったとしても、混同されやすいだろうと推測されます。これを「見分ける」ことは難しそうです。いずれにせよ、「似ている」を成立させているらしき条件は、やはり、いかがわしく、うさんくさいと言えそうです。



学問および科学と呼ばれるものの基本的な作業の1つは、「見る」と「分ける」、つまり「見分ける」みたいです。当然のことながら、「比べる」作業が伴います。「似ている」かどうかを判断する必要があると考えられます。同時に「異なる」かどうかを判断する必要があると言えそうです。

「似ている」および「異なる」ように「見える」の根拠となる「関係性」と「共通性」は、「血縁関係」つまり「血の濃さ」（※ともに比喩です）と、「声の大きさ」つまり「説得力」（※ともに比喩です）という基準で決定されている。仮説の段階でも、実証・観測のレベルでも、その基準は変わらない。そんな気がします。

以上のような事情で、学問および科学における説や法則はぶれるのであり、揺るぎない場合には、声の大きな、そしてたぶん腕力に優れた特定グループの支配に支えられているからだという気がします。

たとえば、ノーベル賞のうち、比較的ハードな物理学賞や化学賞であれ、ソフトな経済学賞や平和賞であれ、上述の力関係（＝ダイナミックス）に、左右されているように思われます。進歩、貢献、普遍性という言葉は、このたぐいの賞にはそぐわないという印象をいただいています。建て前と現実の違いという言葉で説明できそうな感じもします。



物理学では、現在、従来の考え方に代わって、量子という考え方、および量子に関する考え方が、揺るぎない地位を獲得しつつあるとのこと。

もし、ヒトの五感に基づくイメージと実証・観測の結果であるならば、当然のことながら、限度と制約があるわけですから、「血縁関係」つまり「血の濃さ」（※ともに比喩です）と、「声の大きさ」つまり「説得力」（※ともに比喩です）によって、「真偽」が決定されているという話の域を超えるものではなさそうです。

いつか、量子という考え方と量子に関する考え方にぶれが生じ始め、やがて揺るぎなさが持ちこたえられなくなったときには、別の「血縁関係・血の濃さ」を基準とする「有効性・関係性の存在」つまり、いわゆる「説」や「理論」の「有効性」を主張する、「声の大きい」つまり「説得力のある」新興グループの「説」や「理論」に取って代わられるのではないかと予想されます。

量子という考え方と量子に関する考え方が、ヒトの五感に基づくイメージと実証・観測以外の有効性に支えられた結論であったり、あるいは、その考え方を支持するグループの「声の大きさ」つまり「説得力」が揺るぎなく維持されている限りは、近い将来に

交代劇は見られないだろうとも考えられます。



「似ている」が前提として想定しているのは、オリジナルとコピー、本物と偽物、出来事と出来事の再現、という一連の神話であり物語です。

今挙げたペアには、かなり「濃い血縁関係」（※比喻です）がなければなりません。なぜなら、各ペアの間で、激しい勢力争いが生じるほどの類似性、言い換えるなら、各ペアの一方が主となってもう一方を従として卑しめる、あるいは、一方がもう一方を排除するという事態が起こったとしても、双方がその役目を立派に果たせるだけの類似性が備わっていないからなのです。



さかんに比喻つまりたとえを用いていることに、辟易（へきえき）なさっている方もいらっしゃるにちがいません。言い訳をさせていただきますと、それしか頼るものがないからなのです。

ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

今挙げた2つの限界であり幻界であり言界でもある現界のなかに投げ込まれているらしい、ヒトという種は、森羅万象と直接出会うことはできず、森羅万象の「代わり」を務める「処理された情報」つまり「その「何か」ではないもの」という「代理」を相手にするしかないと言えそうです。蛇足ですが、「事実」と「意見」を「分ける」ことも、ヒトにはできそうに思えません。ただ、努力目標にしたいというのであれば、その気持ちは理解できる気がします。

比喻しか頼るものがない状況というのは、そういう意味です。せいぜい比喻という仕組みを意識しつつ、（森羅万象の一部の）比喻つまり代理を用いて思考するなり記述するなり働きかけるという方法で、（森羅万象の一部の）比喻に向かい合う。そんな感じでしょうか。いかがわしく、うさんくさい話ですが、致し方ありません。

比喻という仕組みを意識する。言うのは簡単ですが、実行するのは、きわめて難しいと思われれます。できれば、考えたくない、忘れたいというのが、人情みたいです。

比喻という仕組みを忘れてたり、忘れた振りをするのではなく、常に意識しつつ、（森羅

万象の一部の) 比喩つまり代理を用いて思考するなり記述するなり働きかけるという方法で、比喩の仕組みそのものを対象に、徹底的に取り組むというスタンスも可能かと思われます。個人的に魅力を感じている姿勢です。これもまた、いかがわしく、うさんくさい話ですが、致し方ありません。

以上の話が、個人的な思い込みの産物であることは言うまでもありません。まぼろしです。

09.08.20 げん・幻 -8-

◆げん・幻 -8-

2009-08-20 10:40:12 | さくぶん



「似ている」は、「別のものに似ている」状態であり、「そっくり」は、「そのもの自体に似ている」状態だという気がします。こんなふうに言うと、「そっくり」のほうがイメージしにくいように思われます。

「そっくり」は「別のものに似ている」のではなく「そのもの自体に似ている」とは、「そのものをそのままのものとして見る」という感じです。「そっくり」は、「そっくり」が並んでいたり、別の場所にも「そっくり」がたくさんあるという状態および状況を指します。

比喩的に言うと、「静的な(=スタティックな)実体や概念」ではありません。「動的な(ダイナミックな)状態および状況」です。何が動的、つまり揺らいで動いているのかというと、「そっくり」ではなく、「そっくり」を見る側のヒトの知覚・意識・イメージだと言えそうです。見方の問題だとも言えそうです。

ですから、「そっくり」をながめるさいの比較の対象は「そっくり」なそのもの自体の様態であり、また、「そっくり」とは単数であると同時に複数であるという、ヒトがいたくイメージに支えられています。複数の「そっくり」が並んでいても、ヒトは「そっくり」という様態に単数・複数の差異を感じていないという意味です。

「他のものと比較しようがない」というか、「他のものとの比較にまで思いがおよばない」光景とも言えそうです。「そっくり」は固定したイメージではありませんから、ある「そっくりな」製品が並んでいるとき、その製品の1つを手に取り、たとえば競合他社の同種の製品と見比べた場合には、「(別のものに)似ている」が問題になることは言うまでもありません。この場合には、比較の対象になるわけですから、いわゆる「差別化」や「コモディティ化」という現象が起きる時と、ほぼ同種の視線にさらされていると考えることもできるでしょう。

以上の考え方では、「そっくり」も「似ている」も、ヒトがいただく「静的な(=ステティックな)実体や概念」という意味でのイメージつまりまぼろしではなく、ヒトがいただく「動的な(=ダイナミックな)状態および状況」という意味でのイメージつまりまぼろしだという点が大切です。



個人差はあるでしょうが、「そっくり」はめまいを誘います。大量生産された「そっくりな」製品が、目の前に100個くらいずらりと並んでいるさまを想像してください。めまいに似たものを覚えませんか。

内部の壁全面が鏡張りの立法体の部屋に、自分が閉じ込められたとします。真っ暗なかで、手に持ったライトのスイッチがとつぜんオンになります。ライトを持った自分とそっくりな像が、あちこちに反射することになるでしょう。吐き気を催すほどの、めまいに襲われるのではないのでしょうか。

そこまでしなくても、2枚の鏡を向き合わせて、そのあいだに何かを置き、斜めから覗くだけでも、「そっくり」のイメージを体感できると思われます。

こうした状況においては、圧倒的な「複製の複製」の氾濫(はんらん)に目がくらみ、目が舞い、「オリジナルの影」は失われはしないとしても、薄まり、ほとんど知覚も意識もされなくなると思われます。



「そっくり」を支えている基盤は、現代という社会であるとも言えそうです。現代社会を成立させている重要な要素として、グローバル化と市場経済が挙げられます。社会主義や共産主義という言葉もありますが、それはいわばお題目であり、経済というより、政治体制およびイデオロギーという側面で機能してきたというべきでしょう。歴史的に見ても、いわゆる社会主義国家や共産主義国家は、抜け穴だらけだった気がします。

実際には、ヒトが太古に、言語・交換・貨幣という仕掛けを用いるようになって以来、ヒトは広義の市場経済の下にあったと考えられます。広義の市場経済の根底にあるのは、広義の交換および代行という仕組みです。現代、近代、中世、古代、太古といった言葉とイメージは、便宜的なものであり、その区分は時の隔たり以外に根拠がなく、連続しているとも考えることもできる感じがします。

現代社会とは、言語・交換・貨幣という仕組みが、物理的に高速化しグローバル化した社会と定義できそうです。また、生産技術・輸送技術・通信技術およびそれが進化した情報技術が、質・量・速度の面で飛躍的に向上したことが、現代社会の特徴である、という説明の仕方もできそうです。

「そっくり」という考え方は、大量生産・大量流通・大量消費と、グローバルな規模の生産・流通・消費という現代社会の経済状況を説明するのに、きわめて有効なモデルだと考えています。「そっくり」に備わっている、取り換え可能という側面も無視できません。スーパーで売られている大量生産された製品だけでなく、テレビやネットで配信され流通している、映像や音楽やニュースを含む広義の情報も、「そっくり」状態にあります。

★

「そっくり」は、ヒトにも起こっている様態です。スター・タレント・政治家・有名人は、誰もがユニークであるように見えて、実際には、取り換え可能な存在であることを忘れてはなりません。誰かが消えても、その跡を継ぐ、つまり補充してくれるヒトが必ずいます。「ユニーク」は、「そっくり」の極限とも言うべき状況だと考えられます。

「ユニーク」とは、「そっくり」のいわばチャンピオンの「座」であり、「地位」なのであって、そこにたまたま座ったヒトが幸運にも、「ユニーク」という冠をいただくことができると言えそうです。でも、これは言葉の綾にしかすぎません。「ユニーク」状態を成立させている条件と、「そっくり」状態のそれとは、大差なさそうです。

「ユニーク」が「そっくり」になるケースが数多く見受けられます。物故したスターや有名人や政治家が、大量に複製され生産された、写真・動画・書籍のテーマ・神話の主人公となって、「そっくり」状態で、大量に流通し、販売され、消費または利用されるというあり方は、「ユニーク」が「そっくり」化している光景と見ることができそうです。

お断りしておきますが、以上の例はいわばレトリックであり、それ以上でもそれ以下でもありません。「ユニーク」を取り分けて説明する必要性は、きわめて希薄だという気がしてきました。ただ、何でも「そっくり」つまり典型的なまぼろしになり得るという点の確認の意味では、取り上げる価値があるように思われます。



「そっくり」とは、抽象的な枠組みであり、物の見方であり、その中身は何であってもかまわず、誰であってもいいと考えられます。また、ブランド・ロゴ・レーベル・ステータスシンボル・政府の保証・いわゆる権威のお墨付き・ブーム・ファッション・流行・ニュース・時の話題といった、広義の言語と親和性があります。

広義の言語とは、話し言葉や書き言葉だけでなく、図・絵・写真・記号・状態・状況も含む、交換・代行・流通・消費（and/or 利用）・保存・廃棄（and/or 処分）の対象となり得る、具体的な物および抽象的な物事や現象を指すと考えていただいてもかまいません。

「そっくり」においては、「濃い血縁関係」（※比喩です）は、属性として備わっている場合もありますが、大きな意味を持ちません。「そっくり」における重要な点は、「たくさん存在すること」、「取り換え可能であること」、「コモディティ化（＝陳腐化）と差別化の対象となること」、「商品のサイクルというイメージと親和性があること」が挙げられます。

「そっくり」は「似ている」と同様に「実体」ではなく、「あり方」であるとも考えられます。ヒトがいただくイメージの問題であるとも言えそうです。このように、森羅万象の「抽象的な側面つまりイメージ」をめぐっての物語および神話ですから、たとえば、ヨーグルトあるいはタレントそのものではなく、ヨーグルトあるいはタレントの生産・流通・販売・購入・消費（and/or 利用）・廃棄のあり方が問題となっていることに注意を払う必要があります。



「似ている」においては「それ以外のものに似ている」ことが、そして、「そっくり」においては「そのもの自体に似ている」ことが不可欠な条件になると考えられます。「似ている」も「そっくり」も、その「実体」ではなく「あり方」が問題になっているので、あるものにおいて「似ている」が問題となる場合があったり、「そっくり」が問題となる場合があります。今、「もの」という言葉を使いましたが、ヒトやヒト以外の生き物である場合もあります。

森羅万象が「似ている」状態にあったり、「そっくり」状態にあるという言い方も可能でしょう。この言い方を採用すると、話をいろいろなバリエーションに捏造して展開することができ、たくさんのがわしく、うさんくさい物語や神話を製造できそうです。



さまざまな分野やテーマをめぐっての捏造された物語や神話が、「そっくり」状態の商品（※比喩ではありません）として、流通・販売・購入・消費（and/or 利用）・廃棄の対象となっているさまは、現代社会で日常化しているようです。これは、テレビ・新聞・雑誌・書籍の出版・ネット空間を舞台にした、噂話・ニュース・情報・流行という形で、目にし耳にすることができます。

たとえば、書籍のベストセラーリストに見られる、「脳」・「頭脳」・「こころ」・「健康」・「発想法」・「創造力」・「思考」・「法則」・「〇〇法」・「生き方」・「分けない」・「わかる」・「よくわかる」・「なぜ」・「図解」・「〇〇入門」・「〇〇術」・「変わる」・「変える」・「日本語」といった言葉やフレーズ、つまりイメージやレトリックが、スキルやノウハウとして見なされ流通し販売されています。

こうした言葉やフレーズをめぐってつづられる物語・神話の有効性と信頼性については知りません。その種の書籍が次々と多量に生産され消費されている現象を見ると、風邪薬が胃腸薬程度の有効性、つまり効き目はあると推測されます。そうした書物を、必要としているヒトたちが、風邪や胸やけや食べ過ぎ（※比喩です）程度の症状の悩みを抱えているとも言えそうです。

ところで、ヒトは、ふつう、一生の間に何度も風邪を引きます。薬のたぐいを拒否する少数のヒトを除いて、たいてい、存命中に何度も風邪薬を服用します。まさに、「そっくり」状態だと思います。ずらりと「そっくり」が並んでいる空間的イメージが、時間的イメージに置き換わっただけです。風邪と風邪薬の服用が延々と続くのです。

音楽、いやし、健康法、占い、ファッション、流行語の変遷も、「そっくり」状態にあると言えそうです。流行る時期ごとに、その内容は異なっていながら、「そっくり」状態と「そっくり」な動きが観察されるのは、ヒトが「内容」や「実体」自体ではなく、それらが「次々変化する」つまり「次から次へと移り変わる」という意味での「そっくり」の「動き」を求めているからかもしれません。

★

「そっくり」をもっとも体感しやすい、日常生活においてありふれたものである「製品・商品」のレベルで考えて、「そっくり」状態のありようを整理してみましょう。

あるメーカーが製造した、ある品名が容器に記されているヨーグルトを例に取りましょう。工場で大量生産されて、スーパーで複数並んでいる「さま」は、まさに「そっくり」です。

その品名のヨーグルトしか食べないというヒトがいたとします。そのヒトにとって、

他の品名のヨーグルトは「偽物」ということになります。そのさいには、そのヨーグルトはそのヒトにとっては「本物」のヨーグルトなのですから、「似ている」状態にあるとも言えます。

「そっくり」状態が広義の「差別化」現象とかかわり合う場合には、以上のようなことが起きます。ある品名のヨーグルトが、あるヒトにとって「これしかない」ほどの、別のものとは「似ている」けど異なる「特別」つまり「ユニーク」なものであるとしても、そのヨーグルトは、「そっくり」なものが並んでいるうちの1個であり続けているわけですから、状況に変化はなく、依然として「そっくり」状態にあるとも見なせます。

「そっくり」と「似ている」が、ヒトが個人レベルでいだけイメージの問題であるために、混同しがちな点だと言えそうです。もっとも、混同しても、何ら問題はありませんし、起こりません。「そっくり」と「似ている」との相違は、レトリックや言葉の綾のレベルの話です。

まぼろしについての話とも言えます。どうして、念を押すのかと言うと、まぼろしを「実体」や「概念」と混同するヒトが多いからです。トリトメのない話を、トリトメなく受け止めることは、意外と難しいと言えそうです。

★

「そっくり」をヒトのレベルで考えて、「そっくり」状態のありようを整理してみましょう。

ある会社に勤務する、ある男性を例に取りましょう。そのヒトには、妻と2人の娘がいるとします。会社員であるそのヒトが、会社においては取り換え可能な社員の1人である場合には、そのヒトは「そっくり」な社員の1人、つまり「そっくり」状態にあると言えます。

そのヒトの家族にとって、そのヒトが「世界でたった1人の夫」および「世界でたった1人の父親」である場合には、そのヒトは「本当の夫」および「本当のお父さん」であるわけですから、別の本当ではない夫やお父さんに「似ている」状態にあると見なせません。

そのヒトと「似ている」他の男性を、そのヒトの家族が、「取り換え可能な」夫あるいは父親と見なす可能性は低いと思われます。とはいえ、いろいろな家庭の事情がありますから、可能性はゼロとは言えません。

以上も、あくまでも、イメージの問題です。個人の好みや傾向もあるでしょうが、「実体」という物語・神話に、あえて「分け」入る必要はありません。



ヒトにとって交換・代行・流通・消費（and/or 利用）の対象となり得る森羅万象の一部は、「似ている」および「そっくり」という状態に置かれると言えそうです。「似ている」および「そっくり」という状態は、ともに「まぼろし」だという見方もできると思います。逆に、「まぼろし」は「似ている」か「そっくり」か、あるいはその両方の状態にあると見なせるとも考えています。

さらに言うなら、ヒトにとって交換・代行・流通・消費（利用）の対象となり得る森羅万象の一部は、「まぼろし」でなければならず、同時に「似ている」か「そっくり」か、あるいはその両方の状態になければならない、とも言える気がします。

「まぼろし」とは、知覚器官と脳によって処理されるという形で、知覚および意識された対象だと考えています。知覚および意識には、誤作動ともいべき重度の錯覚、あるいは病理としての幻覚（※ヒトが日常生活のレベルでいなく、軽度の幻覚である幻想とは区別しましょう）が起こる場合が頻繁にあるようです。

ただし、錯覚や重度の幻想や幻覚は、ヒトの社会でそれなりに有効性を持っていたり、それなりに活躍する場を与えられていることが多いようです。たとえば、科学、宗教、政治、経済、司法は、錯覚や重度の幻想や軽度の幻覚なしには成立しないシステムです。

ヒトがいただくものすべてをまぼろし、つまり広義の幻想と見なす杜撰（ずさん）で安易な考え方を採用するなら、まぼろしの程度や格付けや種類について、こだわる必要はありません。個人的には、深入りしない程度にこだわってみたい気がありますが、ここでは立ち入りません。「(精神医学的見地から見た) 正常対異常」や「正気対狂気」という、いかがわしくうさんくさい、水掛け論や堂々巡りに陥る恐れがあるからです。



「似ている」とは、ヒトが愛・友情・信頼・人間関係・信仰などの言葉およびイメージで語る文脈のもとで機能する様態（状態）だと考えています。一方、「そっくり」とは、広義の経済・政治・司法・文化・学問といった、非人称的で匿名的でニュートラルなシステムのなかで機能する様態（状態）だと考えています（※「非人称的で匿名的でニュートラルな」というのは、ヒトに深くかわりながら、ヒトがコントロールできない自立した状態にあるという意味です）。

「まぼろし」は、「似ている」や「そっくり」という衣もまといながら、ヒトに対して「立ちあらわれる・立ち現れる・立ち表れる」と考えています。「あらわれる」という、ヒトの知覚と意識に対する「働きかけ」である点に注目してください。この「働きかけ」は、

ヒトとの間においてのみ、成立する「関係性」だと言えます。

よく考えると当たり前のことなのですが、誤解されがちな点なので、念のために、「まぼろし」がいわゆる「実体」や「概念」ではないことを、強調しておきたいと思います。あえて言うなら、「ありよう」「ありかた」「しくみ」という感じです。「考え」ではなく「考え方」だという言い方も、イメージしやすいかもしれません。いずれにせよ、いかがわしくうさんくさい「実体」や「概念」や「意味」や「内容」は、棚上げにしての、いかがわしくうさんくさい話なのです。

09.08.21 げん・幻 -9-

◆げん・幻 -9-

2009-08-21 13:35:02 | さくぶん



太古に、ある尻尾のないおサルさんの脳内で何かが起きた。ずれたらしい。その結果として、本能が壊れ、広義の言語が生まれ、その尻尾のないおサルさんがヒトとなった。そんな物語および神話があります。

さまざまなバリエーションがありますが、そのどれもが、あらゆる物語および神話が免れることができない、いかがわしさと、うさんくさを備えています。

ここでは広義の言語を、広義の交換・代行・流通・消費（or 利用）という仕組みに支えられた、ヒトにとって知覚可能な、森羅万象の一部と考えてみましょう。根拠の乏しい、いかがわしい話であることを、あらかじめお断りしておきます。

具体的には、話し言葉、書き言葉、手話、表情、仕草、合図、めくばせ、動作、声、音、ヒトがつくったものや仕組み（※たとえば、衣食住に関する道具や掟など）、ヒトがつくったのではないものや仕組み（※特に、衣食住に利用可能な自然物や、引力などの物理現象・燃焼などの化学反応など）が挙げられそうです。

広義の言語には、絵、図、像、物の配置、数字、記号、点字、アイコン、アナログ信号、

デジタル信号、アイコン、遺伝子情報と呼ばれるものも含めていいかと思われます。「発する」、「受け取る」、「伝える・伝わる」、「あわらす」、「読む」といった言葉と親和性があるようです。

★

ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

今述べた2つのフレーズを前提にすると、広義の言語とは、ヒトが知覚および意識する「代理」であると言えそうです。ヒトは、その「代理」を交換し合ったり、さらにまた何かの「代理」として、伝えたり移動させたり消費したり利用したりする、と考えることができそうです。

★

「まぼろし」とは「代理」であるという考え方は、どんなに強調してもしすぎることはないと思います。この考え方ほど、ヒトという種にとって、忘れられがちであり、意識されたとしても、便宜的に意識の外に置かれるものはないからだと言えます。

ヒトが意識したがらないというのは、要するに、ヒトにとっては窮屈で、邪魔な考え方だからだ、とも言えそうです。ヒトにとって都合のいい、つまり受け入れやすい、あるいは使い勝手のいい考え方は、ヒトは自分が森羅万象の一部の「代理」ではなく、森羅万象の一部「そのもの」を常に相手にしているというもののようです。これは、錯覚および幻想だと思われます。

知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されているという考え方と、その考え方から導かれる、自分の知覚と意識が一種の錯覚および幻想であるという状況を、ヒトは受け入れたくない習性があると言えそうです。プライドが許さないのでしょうか。

一方、自分の知覚と意識が「錯覚および幻想」ではなく「現実」であるという、「錯覚および幻想」をぜひとも信じたい習性があるようです。この考え方のほうが、すっきりしています。ややこしくありません。ヒトのプライドも許してくれそうです。

ヒトは、代理つまりまぼろしを相手にしてはいない。そう信じているヒトが、この惑星に多数いても、驚くにはあたりません。たとえば、複数の宗教観においては、こうした「まぼろし」とか「錯覚および幻想」という考え方が入り込む余地はまったくないみ

たいです。「代理」という発想自体がないようです。

そうした宗教が権力と同等の地位を持っている地域においては、「まぼろし」や「代理」という考え方は異端あるいは邪教というラベルを貼られ、運が悪ければ、処刑の対象にされるでしょう。

恐ろしいですが、その種の宗教を信じるヒトびとが、「まぼろし」や「代理」という考え方を恐れる気持ちも、わかるような気がします。自分の居心地の良さを脅かすものに対しては、不寛容になり攻撃的になるのも、ヒトの習性であり、容易には避けられない心理みたいです。

★

「まぼろし」つまり「代理」とは、必ず「何かに似ている」ものでなければならぬと考えられます（※この場合の「何か」には「そのもの自体」も含まれます）。言い換えると、ヒトの知覚および意識の対象は、ヒトの知覚器官および脳が、情報あるいは信号として受信することが可能なものでなければならない、ということになりそうです。

比喩的に言うと、知覚器官および脳という「網」あるいは「篩（ふるい）」にかからないものは、知覚も認識もできないという意味です。フィルターに「かかる・かける・かけ」と言葉を転がすと、「賭け」という言葉が出てきました。圧倒的な偶然性のゆきわたっている宇宙においては、ヒトは「賭ける」しかない気がします。

「賭け」が当たったかに「見える」とき、ヒトは「真理」「実体」に「触れた」と「錯覚」するのではないのでしょうか。「錯覚」とは「代理」という考え方を前提にしての、うさんくさい話であることを承知のうえで続けますと、「賭け」はある限度を持つ「有効性」に支えられていて、「確率」や「有意性」といういかかわしい考え方で「数値化」できるみたいです。「数値に変える」わけですから、この作業も、「代理」の仕組みを基本としているように思われます。

★

ヒトに備わった知覚および意識という「仕組み」、言い換えると「システム」が受信できないものは、知覚も意識もされないとも言える気がします。今のフレーズも、「仕組み」および「システム」という比喩を用いた言い方でしたが、生物学的に考えると、どうなのでしょう。

たとえば、イヌには知覚できる匂い、コウモリには知覚できる音、キツネザルには知覚できる味、イヌワシには知覚できる光景、トカゲには知覚できる皮膚感覚、あるいはコビトカバには知覚できるいわゆる「第六感」みたいなものがある、そうした情報が

ヒトには知覚できないということは大いにあり得ると考えられます。

種（しゅ）が異なるのですから、当たり前と言えば当たり前と感じられる一方で、不思議と言えば不思議に思われます。

ところで、種を「分ける」という作業はヒト特有の行為みたいですが、意味はあるのでしょうか。あるとしたら、ヒトだけにある意味なのでしょうか。分かりません。不思議です。

もしかすると、そもそも「種という考え方」も、「種を分けるという作業の意味」も、「まぼろし」かもしれません。「まぼろし」について、突き詰めると、こうした袋小路に迷い込むことになります。こうした迷いは、不毛とも言えます。

「まぼろし」に「不毛」は「つきもの・付きもの・憑物」だと居直る、あるいは諦めるスタンスも可能かと思われまます。

★

「何かに似ている」まぼろし。たとえば、映画やテレビやパソコンの映像、印刷物としての小説、新聞のニュース記事、司法の場で使われている事件の調書、目の前にあるパソコンという機械。

「そのもの自体に似ているそっくり」状態にあるまぼろし。たとえば、映画やテレビやパソコンの映像、印刷物としての小説、新聞のニュース記事、司法の場で使われている事件の調書、目の前にあるパソコンという機械。

今挙げた2種類の「まぼろし」は、「同じ」と言えるし、「同じ」だと考えられます。でも、どこか違っていても感じられます。見方が違うみたいです。「同じ」ものでも、「再現」という言葉とイメージを重視すると、「何かに似ている」まぼろしであるという気がする一方で、「コピーのコピーのコピー……」「複製の複製の複製……」という言葉とイメージにこだわると、「そのものに似ているそっくり」状態にあるまぼろしであるという気がする。そんな感じですよ。

あくまでも、「気がする」とか「感じ」です。こうした言葉の遊びは、不毛とも言えます。「不毛」とは、「実用性」がほとんどなく、いわゆる社会の進歩への「貢献度」がきわめて低く、「有効性」が著しく乏しいという意味にとれるだろう、と考えられます。

「不毛」は「いかがわしい」や「うさんくさい」と通底しているようにも思えます。そうであれば、「いかがわしい」や「うさんくさい」には、ヒトを鼓舞するものと、気を滅入らせるものの2種類があると言えるかもしれません。いわゆる世の中が、前者の「いか

がわしい」や「うさんくさい」に満ちていることは言うまでもないようです。

もっとも、たった今書いたことは、言葉の綾だとも言えます。正確には、ヒトを鼓舞する「いかがわしい」や「うさんくさい」と、気を滅入らせる「いかがわしい」や「うさんくさい」とは、別個のものではなく、見方の相違である、つまり観測者側の問題であると言ったほうが妥当かと思われます。

このように前言をあっさりと翻したり、否定したり、ずらしたりするのが、まぼろしの特性に配慮した付き合い方だと言えそうです。まぼろしは、断定や結論や真偽や客観性とは、親和性がきわめて希薄である、あるいは、まったくないという意味です。希薄なのか、皆無なのか、決定できない点が、まぼろしのまぼろしたるゆえんだという気もします。

トリトメがなく、がっかりするほかしかない。そんな感じです。すっきりして、明快で、割り切れる感じがしたとすれば、まぼろしをつかみそこなっているとも言えそうです。せっかちな性格のヒトには、付き合いきれない相手のようです。矛盾を宇宙の常態と感じられないヒトにも、不向きな対象だろうと思われます。

もちろん、以上は、あくまでも個人的な感想です。イメージと同様に、まぼろしを独り占めできるヒトは、たぶんいないでしょう。みんなのものであり、同時にだれのものでもないという感じです。

★

「まぼろし」は毒（※比喩です）であり、「まぼろし」にこだわり続けると、中毒症状（※比喩です）に陥り、気を滅入らせることなく生き延びるためには解毒（※比喩です）が必要になる。そんなふうにも言えそうです。

「まぼろし」という迷宮（※比喩です）にはまり込んだ場合には、比喩を用いて思考することで打開策を探るという方法がありそうです。この方法には、ある程度の有効性が認められるように思われます。

「まぼろし」病（※比喩です）に比喩が有効なのは、「薬は一種の毒である」という比喩的な言い方、つまり、「毒を以って毒を制す」というたとえが変奏されたフレーズに、ある程度の効き目があるからかもしれません。ヒトは、言葉やフレーズという「代理」に大きく左右される生き物みたいです。言語の効用という考え方も説明できそうです。言葉はヒトを癒やすとか、逆に傷つけるとか、人間関係を良好にする、あるいは損なうという言い回しが、例として挙げられます。言葉はひとり歩きするという、ややこしいですが、看過できない比喩的状况もあります。

「まぼろし」つまり「代理」は、広義の「比喩」つまり「たとえ」だと言えそうです。「代理」「たとえ」には、「緩和（かんわ）」という働きがあるように思えます。がん治療の1つの方法である「緩和医療」という言葉もあたまたに浮かびます（※この不用意な記述に対し、気分を害された関係者の方がいらっしやいましたら、深くお詫び申し上げます）。

もちろん、これも比喩です。痛みや衝撃や苦しみをやわらげてくれるのなら、そんないいことはありません。しかし、「置き換える」「すり替える」という「代理」の仕組みが働いた結果であるという、「代償」を払っていることを忘れてはならないと思います。

★

太陽を直視すると目に損傷を与え危険だと言われています。そのため、日食の観察などでは、間接的な方法で、つまり「代理」を用いて、日食を「見ます」。ただし、厳密に言う、太陽を「直接的に見る」と、「間接的に見る」とのあいだには大差はないようです。前提に、知覚という「代理」つまり「間接的」があるからです。

まぼろしのまぼろしのまぼろし……。代理の代理の代理……。たとえのたとえのたとえ……。置き換えてそれを置き換えてそれをさらに置き換えて……。まさに、「そっくり」状態のまぼろしの「再現・再演」あるいは「変奏・ずらし」だという気がします。

いずれにせよ、二重であれ、三重であれ、多重であれ、間接的にしか、森羅万象と向き合ったり、触れたり、働きかけたりするしか、ヒトには方法はないと考えられます。そうした限界のなかで、「まぼろし」という「毒」「痛み」「不自由さ」「絶望」（※比喩です）に立ち向かうしかないヒトは、「たとえる」「置き換える」「あいだに別のものを置く」「ほめかす」「黙示する」（※比喩です）という間接的な方法で、その苦しみを「忘れる」「意識しないようにつとめる」、あるいは、「やわらげる」しかない。そんな感じがします。

★

ヒトはからだとの「付き合い方」（※比喩です）について、思いをめぐらし、健康法や医療という広義の道具（※比喩です）、つまりシステムを作ったり、利用してきたと言えそうです。そうであれば、比喩という仕組み、つまりシステムに対する「付き合い方」（※比喩です）を考え出したり、利用したりすることもあっていいと思います。それを「ヒトとして生きる知恵の1つ」（※比喩です）と名付けると、「救い」に似た感情を覚えます（※比喩です）。諦めと居直りと希望が混じり合ったような思いをいただきます（※比喩です）。

比喩という仕組みにこだわるあまり、気持ち良くない思いをするのは、ご免こうむりたいです。比喩という仕組みと心中（※比喩です）したくはありません。比喩は、風刺

だけでなく、ユーモアや笑いにもなり得るみたいです。比喩しかないのなら、比喩を楽しみましょう。

いくぶん、不毛感がやわらいだでしょうか。

09.08.22 げん・幻 -10-

◆げん・幻 -10-

2009-08-22 09:36:13 | さくぶん

★

影、影絵、写真、幻灯、映画、テレビ、パソコンのモニター、ケータイの液晶画面。こうしたものたちは、すべてまぼろしです。広義の影です。幻である影、あるいは幻の影、つまり幻影と言えます。映った像、つまり映像とも言えます。何かの代わり、つまり代理と見なすこともできそうです。

要は、「何かの代わり」であって「何かそのもの」ではないという点です。だから、どこか、いかがわしいし、うさんくさいし、はかないし、たよりないのです。そうしたネガティブな言葉およびイメージを、そのまま逆転し、ポジティブに変えるのが、ヒトの想像力であり、その同音異義語とされる創造力だと言えるかもしれません。個人的には、両者は同義語だと思えてなりません。

ポジティブもネガティブもない。両者は表裏一体であり、ヒトがどう「見る」かにかかっている。そんな考え方もあるでしょう。多数のヒトにおいて、考え方や意見が一致しなければならないという、必要性や必然性はないと思われます。唯一の真理がなければならないという、必要性や必然性もないと思われます。「なければならない」とか「あるはずだ」とは、ヒトという種の「願い」であり「欲求」だという気がします。それも、「まぼろし」だと言えそうです。

★

「まぼろし」しかないのであれば、「まぼろし」の仕組みを「まぼろし」として知覚し意識

しようという、冒険心があってもいいように思います。冒険ですから、賭けであり、危険を冒すことであり、何かに身を任せることだと言えるでしょう。

たった今、冒険という比喻、つまり代理、つまり、まぼろしを使いました。「冒険」という言葉とイメージを出したために、「賭け」とか「危険を冒す」とか「何かに身を任せる」という言葉とイメージが連なって出てきたのです。こういう現象を「連想」とも言います。これが、代理を用いる代償です。「代償」という言葉とイメージは、「代理」という言葉とイメージにおびき寄せられたものであることは言うまでもありません。比喻に導かれた連想とも言えるという意味です。

言葉が言葉を引き寄せる。言葉が言葉を呼ぶ。言葉が言葉を立ちあらわせる。言葉の磁場ができる。万事がこんな感じなのです。

「思考が言葉に優先し先行する」とか、「言葉はヒトの道具であり僕（しもべ）だ」とか、「言葉とヒトとの関係において主導権はヒトにある」という考え方や感じ方や主張もあるにちがいません。そういう考え方をするヒトたちにとって、「言葉がひとり歩きする」とは、きっと、失言した政治家の言い訳でしかないでしょう。

ちょっと遊んでみます。

まぼろしがまぼろしを引き寄せる。まぼろしがまぼろしを呼ぶ。まぼろしがまぼろしを立ちあらわせる。まぼろしの磁場ができる。万事がこんな感じなのです。

「思考がイメージに優先し先行する」とか、「イメージはヒトの道具であり僕（しもべ）だ」とか、「イメージとヒトとの関係において主導権はヒトにある」という考え方や感じ方や主張もあるにちがいません。そういう考え方をするヒトたちにとって、「まぼろしやイメージがひとり歩きする」とは、きっと、心の病にかかっているヒトの症状でしかないでしょう。

★

「crazy ape・狂える尻尾のないサル・cruel 尻尾のないサル・残虐な尻尾のないサル・ヒト・Homo sapiens・ホモサピエンス・人間・人類・現生人類・wise man・知性・ち・知・知る・ち・血・血を流す・ち・地・地を支配する・地球を支配する・まぼろし・間を滅ぼす・真を滅ぼす・魔を滅ぼす・魔にすり替わる・魔を用いる・魔となる・四魔（煩惱魔・陰魔・死魔・他化自在天魔）をいだく・magic・magic・まじ・蠱・まじもの・蠱物・image・イメージ・イマージュ・像・かたち・ありよう・すがた・かた・方・型・形・片・か・化・た・他・他者」

何の必然性もありません

出るに任せているだけです

ひとり歩き

連想・つらなる・つながる

あわられる・でる

まかせる・まける

圧倒的な偶然性のなかでまけるだけ

まける・間を蹴る・真を蹴る・魔を蹴る・蹴鞠・けまり・まりけ・まけ

まけるに何かをよもうと、懸命にもがく

ma ke ru ・ m 無 a 阿 k 苦 e 会 r 縷 u 有

ま・け・ま・し・た

★

「かげ・影・陰・翳」という言葉とイメージはきれいだと思います。「おもかげ・面影」なんて言葉も、趣が感じられて好きです。

「ぞう・像」や「しょう・ぞう・象」もいいですね。意味とイメージの似たものに「形・型・姿・態・様・容・相」などがあります。抽象的で、トリトメがなく、それでいて何か強く訴えてくる力を感じます。

「うつる・映る・写る・移る・うつす・映す・写す・映す・うつろう・映ろう・移ろう・うつろい・移ろい・うつろ・空ろ・洞ろ・虚ろ・うつお・空・うつほ・空・宇津保・うつほら・空洞・うつ・鬱・鬱・うつ・棄つ・うつ・全・うつつ・現・打棄つ・うつつ・鬱鬱・鬱鬱・うつらうつら」という移り変わりを楽しむのもいいです。

こんな楽しみに耽ることができるのも、まぼろしを相手にしているからでしょう。

★

まぼろしを相手にする。不遜な言い方だと思います。「まぼろし」・「言葉」・「イメージ」

を相手にする。そんなことが可能なのでしょうか。相手にされているのではないのでしょうか。遊ぶのではなくて、遊ばれる。もてあそぶのではなくて、もてあそばれる。

表象あるいは記号あるいはシミュラクルのひとり歩き。そうした比喩は使いたくないというヒトもいるでしょう。

まぼろしを相手にする。杜撰（ずさん）な言い方だと思います。「まぼろし」・「言葉」・「イメージ」を相手にする。そんなことが可能なのでしょうか。「まぼろし」と言ったとたんに、「まぼろし」と念じてあたまに何かを思い浮かべたとたんに、それが「まぼろし」である根拠が消え失せてしまうかもしれないのに。

★

写像という考え方があるそうです。きれいな字面の言葉なので、調べてみました。いろいろな種類がありました。数式を使って説明できるそうです。数式も一種の言葉であり、まぼろしです。写像とは、しゃれたイメージの比喩だと思いました。

写像という言葉とイメージと比喩で、何かを「分ける・分かる」とか「知る」とか「きわめる」ことを、本気で目指しているのだとすれば、絶句します。何と言えいいのか、言葉に迷います。たわむれとして、あそんでいるだけなら、おもしろそうだなと思います。

★

まぼろしにこだわるのは、この惑星では、たぶんヒトくらいではないのでしょうか。まぼろしのかなたにあるものが、何なのかを知ることと分かることもできないのに、です。

せめて、まぼろしの仕組みを、感じる事ができたらと、つい身の程知らずなことを考えてしまいます。ヒトであるかぎり、無理にちがいません。

まぼろしは、ヒトに対して「たちあらわれる」というイメージで感知される気がします。「たちあらわれる」という形での「はたらきかけ」だとも言えそうです。ヒトは、その「はたらきかけ」を「よむ・読む・詠む」のではないかと思います。

言うまでもなく、今、用いているのは言葉の綾です。レトリックです。比喩とも言えます。現に「はたらきかける」という形で、擬人化をしています。また、「よむ」という「たとえ」を使っています。うさんくさいです。

言葉の背後にあると言われている実体や概念の有効性に「かける・掛ける・賭ける」のではなく、言葉とともに「たちあらわれる・立ち表れる・立ち現れる」であろう関係性

の有効性に「かける・掛ける・賭ける」という「かけ」あるいは「かたり・語り・騙り・カタリ」をする。ここでしているのは、そんな感じのお遊びなのです。

いかがわしいですね。でも、それ以外に、まぼろしについて語ったり、記述する方法は見当たりません。もちろん、個人的なレベルの感想です。意見と言えるほどのものだとも思えません。

★

書くときには、夢のなかにいます。少なくとも、そう思いながら書いています。夢のなかでは、説とか意見とか主張はないみたいです。あるとすれば、感想とか、感じとか、想い。やっぱり、そんな感じですよ。

★

夢を見る。万物に「何か」を読む。すると、心が反応し、思わず口から言葉や音（おん）が出る。場合によっては、語や句や歌を詠む。

★

まぼろしにまぼろしをよむ

うつるにうつるをよむ

かげにかげをよむ

むにむをよむ

よによをよむ

よむによむをよむ

★

よむによむよまざるをえぬ よはむなり

09.08.30 こんなことを書きました（その14）

◆こんなことを書きました（その14）

2009-08-30 08:32:03 | さくぶん

【注：10の「げん」について各10本の記事を書くという無謀な計画を立てたため、心身ともに余裕がなくなり、「こんなことを書きました（その14）」は、収録されている記事が掲載された時より、間を置いて書きました。以下の解説は、これまでの記事の「前書き」として付けておいたものなのですが、長い記事を読まないで、このダイジェストだけに目を通していただくと、ずいぶん印象が変わると思います。人によって好き嫌いが分かれやすい文章なので、この解説だけをお読みになって、「そうか、このアホは、こんなことを言いたかったのか」なんて思っただけであれば嬉しいです。】

「こんなことを書きました（その13）」（2009-07-07～2009-07-17 + 2009-08-01～2009-08-08）の続きです。今回は、現在開設中の当ブログ「うつせみのあなたに・・・」で2009-08-11から2009-08-22にかけて書いた記事のダイジェスト版です。短い解説と、キーワードやキーフレーズが書いてあります。

10の「げん」について各10本の記事を書くつもりなのですが、「げん」はそれぞれが深くからみ合っているために、重複した話になりがちです。10の「げん」について10本の記事を書くとなると計100本ですので、長丁場になりそうです。1本を短めにするために、断章を積みかさねる形式をとっていますが、つつい長くなってしまいます。無理をして抑うつ状態と体調が悪化しないように、気をつけたいと思います。

*「たわむれる」2009-08-11：「げん」シリーズのウォーミングアップのつもりで書きました。記事を書くうえで日本語の多義性・多層性を生かしたいという願いがあつたため、その確認の意味でちょっと解説じみたことを書き、言葉たちにテーマを演じてもらったつもりです。最後に幾通りかに読める言葉のつらなりを書いてみましたが、独りよがりとか言えないものになっています。でも、せつかく書いた、自分にとってはかわいい言葉たちなので、そのまま残しておきました。直接書いたり書かなかったキーワードは、

「多義性」「多層性」「大和言葉」「漢語」「ひらがな」「漢字」「感字」「転じる」「言い間違い」「誤用」「勘違い」「連想」「でまかせ」「偶然性」「たくらむ」「しくむ」「マラルメ」「坂部恵」「仮面の解釈学」です。

* 「なつかれる」2009-08-12：うっかりして、この日に病院の診察予約が入っていたのを忘れていたために、あわてて川柳もどきの句を詠んでみました。いくつかの解釈ができるように「たくみ」「しくんだ」つもりですが、これもまた、独りよがりの句で終わっています。これまででいちばん短い記事になってしまいました。

* 「げん・幻 -1-」2009-08-13：以前の乱暴な文体を反省し、読者の方々に読みやすいようにと心がけて書いたつもりですが、どうでしょうか。自分をせっぱ詰まった気分追い込んだところで一気に、ばあーっと書く従来の方法を改めて、断章を重ねる形式を採用しています。テーマは、「正しい」対「正しくない」という対立から離れて、自分の思いとイメージを頼りに、「まぼろし」という言葉と遊び、戯れることの実践とその可能性です。キーワードは、「幻影」「かげ」「幻影城」「幻灯」「光」「ま・ma・間・魔・真」「ほろぼす」「広辞苑」です。

* 「げん・幻 -2-」2009-08-14：個人的に好きな「言葉」、つまり、「音」であり、「字」でもある「ま・ma」とのたわむれがテーマです。「こじつけ」や「比喩」や「たとえ」と呼ばれている、言葉の仕組みについて、思うところを書いています。「げん」シリーズは、これまでつづってきた記事の「書き直し」、または「集成」にしようというつもりで書いています。いつ誰が飛び入りで読んでも、入っていけるような記事を心がけていますが、つい読者への配慮を忘れた独りよがりな言葉遣いをしてしまいます。自戒したいと思っています。キーワードは、「つなげる・つながる」「ひとり歩き」「妄想」「ちかく・知覚・近く」「圧倒的な偶然性」「宙ぶらりん」「でまかせ」「まかせる・まく・まける」「イメージ」「掛詞」「かける・かく」「転じる」「約」「訛る」「間違い」「言葉の乱れ」「当て字」「テリトリー」「縄張り」です。直接書かなかったキーワードは、「自動書記・自動筆記」「シュールレアリズム」「夏目漱石」です。

* 「げん・幻 -3-」2009-08-15：このあたりで、シリーズの文体が定まってきた感じがします。「ま」のうち「間」という漢字が喚起するイメージを言葉に演じてもらうことがテーマです。日本語における大和言葉系と漢語系という2つの大きな流れについて、読者に体感してもらおうと努めています。「関係性」という、自分にとって大きな問題についても、少し触れています。キーワードは、「間の取り方」という言い回しで使われる「間」「音読み」「訓読み」「間・あいだ・あい・あわい・かん・けん・げん」「表意文字」「表音文字」「字面」「活字」「書体」「フォント」「写植」「タイポグラフィー」「幻界」「限界」です。直接書かなかったキーワードは、「杉浦康平」「佐藤敬之輔」「石井茂吉」「森澤信夫」です。

* 「げん・幻 -4-」2009-08-16：「まぼろし」を「真を滅ぼす」と読むことで、話を展開し

ています。ヒトが「真」だと信じがちな「現実」という「物語」・「神話」に矛先を向け、批判的な意見を述べています。そうした物語が、知覚という仕組みを基本にしているヒトという種にとって、免れないことは致し方ないとしても、少なくとも、その仕組みに敏感であるべきではないかと主張しています。「いかがわしい」「うさんくさい」という語弊のある言葉を、戦略上、あえて使っています。キーワードとキーフレーズは、「真実」「現実」「実体」「事実」「論証」「実証」「知覚」「知覚器官」「現・うつつ」「夢はすべてを肯定してくれます」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「ジャック・ラカン」「エルンスト・カッシーラー」です。

* 「げん・幻 -5-」 2009-08-17 : 「ま・ma」という言葉の物質性を体感することがテーマです。実際に、「ま」を声に出すようと、読者を誘っています。まるで宗教の勧誘みたいですね。言葉の物質性に触れることが、いかに容易であるか、同時に、いかに難しいかという二面性についても論じています。ヒトにおいて知と感が同時に生じる状況に二面性がある、という意味です。一方に傾けば、もう一方が消える。それでいて、両者が同居する状況も可能だとも説明できます。これは、言葉を実際に発して体感してもらうのがいちばんだと思います。いささかオカルトめいたイメージを伴う体験ですが、個人的にはオカルトは苦手だと思っています。その点について、ちょっと自意識過剰になっています。今読み返すと、そんなに気にしなくてもいいのに、と思います。キーワードは、「言語学」「音声学」「意味素」「形態素」「音素」「あはっ」「わかる」「ひらめく」「きづく」「double」「すり替わる」「英和辞典」「語源」「母親」「乳母」「ご飯」「乳」「乳房」「ma」「m」「a」「阿」「無」「无」「aum」「om」「あくび」「赤ちゃんの泣き声」「あーむ」「むあー」「近親憎悪」「宗教」「カルト」「スポリチュアリティ」「オカルト」「組織」「個人崇拜」です。

* 「げん・幻 -6-」 2009-08-18 : 「似ている」がテーマです。「比喩」と「擬人化」という言葉・イメージを手掛かりにして、かなり詳細に考察しています。身の程をわきまえない、自分を含めたヒトという種への批判にもなっています。以前から気になって仕方がない、「夢」と「夢の主語」というテーマについて触れていますが、中途半端に終わっています。いつか時間をかけて考えてみたいテーマです。キーワードとキーフレーズは、「つなげる」「こじつける」「représentation」「人面○○」「顔」「表情」「人形」「ヒトにとって、森羅万象は「ヒトのようなもの」なのかもしれません」「夢」「非人称的で匿名的でニュートラルな」「幻界は言界であり現界でもあり限界だと言えそうです」です。直接書かなかったキーワードは、「宮川淳」です。

* 「げん・幻 -7-」 2009-08-19 : 「似ている」と似ている「そっくり」という言葉・イメージがテーマです。「似ている」が「別のものに似ている」状態であるのに対し、「そっくり」を「そのもの自体に似ている」状態として、話を展開しています。以前は、「記号」や「まぼろし」という言葉を用いてイメージしていたテーマなのですが、現在は違ったとらえ方をしています。「血の濃さ」や「血縁関係」という比喩で、「似ている」を説明している一方で、「有効性」や「声の大きさによる説得力」という言葉を使って、「似ている」のいかがわしさを指摘しています。現在の学問を成立させている前提のうさんくさ

さにも矛先を向けています。批判の根拠としているのは「比喩」という、ヒトが免れない仕組みと、その仕組みへのヒトの無自覚です。かなり長い記事になってしまいました。キーワードとキーフレーズは、「似ている」「そっくり」「同じ」「同一」「対象生産」「大量栽培」「大量消費」「大量流通」「大量販売」「関係性」「共通性」「科学」「ノーベル賞」「物理学」「量子」「実証」「観測」「五感」「説」「理論」「有効性」「信頼性」「オリジナルとコピー」「本物と偽物」「出来事と出来事の再現」「神話」「思い込み」です。直接書かなかったキーワードは、「ピエール・クロソウスキー」「モーリス・ブランショ」「ロラン・バルト」「宮川淳」「記号論」「記号学」です。

*「げん・幻-8-」2009-08-20：前日の記事で「そっくり」状態について、言い足りなかったことを補足しています。「そっくり」を「状態」「状況」「見る側のヒトの知覚・意識・イメージ」「見方」など、どんどん言い換えていく戦略をとり、意味の固定化、概念化を回避しようとしています。その「きりのない言い換え」の運動、あるいは移り行く言葉たちの演技に、「そっくり」が立ちあらわれる「さま」を見てほしいという考え方で書いています。ときには、「現代社会」「市場経済」「グローバル化」といった、抽象度の高い、いかめしい言葉を用いて説明をしていますが、あくまでも、重点は「言い換え」という「運動のありよう」に置かれています。なにしろ、「そっくり」とは「そのものにそっくり」なのです。二枚の鏡を合わせたときの、きりのない映像を目にしたさいのめまいに似ています。この日は、つい熱が入って、ブログ記事の文字制限いっぱい長さになってしまいました。いろいろな言葉やフレーズが出てきますが、この記事ではキーワードは、ありません。言葉たちの演じる動きが主役です。

*「げん・幻-9-」2009-08-21：表象としての広義の言語がテーマです。このシリーズで何度も繰り返されている、「ヒトにおいては、知覚器官と脳のあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である」と、「ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている」という2つフレーズが、不毛とも言える議論しか生まないと思われがちなのではないか。そんな思いから、その「不毛感」もしょせん「まぼろし」にすぎないという視点を示すことで、「不毛感」を乗り越える処方もあるのではないかと訴えています。そのために、さまざま言葉を必死に使って、「不毛感」をやわらげようと努力しているさまが滑稽です。あきれるほど、いろいろな言葉を持ち出してきて説明を試みています。再読してみると、そうした訴えを弁解、あるいは言い訳と解釈するヒトもいると思われれます。そこまで気を使わなくてもいいのに、と思えるほど、気を回している印象を受けます。キーワードは、「交換」「代行」「流通」「消費」「利用」「発する」「受け取る」「伝える・伝わる」「あらわす」「読む」「代理」「錯覚」「現実」「幻想」「賭け」「確率」「有意性」「知覚」「種(しゅ)」「再現」「複製」「実用性」「有効性」「観測者」「知恵」「救い」「諦め」「居直り」「希望」「風刺」「ユーモア」「笑い」です。

*「げん・幻-10-」2009-08-22：「げん・幻」の最終回です。前回の気遣いをまだ引きずっています。ヒトにとって一生付き合うしかない対象である「まぼろし」との付き合い方

を提案しているとも言えます。言葉とイメージを相手にたわむれることで、まぼろしのおもしろさを読者に体感してもらおうとしていますが、共感を得られるかどうかは不明です。この記事を読み返してみて、自分はまぼろしが好きなのだ実感しました。まぼろしと詩は相性がいいです。最後の言葉の遊びめいた部分は、つたない「詩もどき」として読んでください。キーワードは、「幻影」「映像」「想像力」「創造力」「かげ・影・陰・翳」「面影」「像」「象」「形」「うつる」「写像」「かける」「たちあらわれる」「かたる」「よむ」です。

以上です。

第 2 部 09.08.23～09.09.XX

09.08.23 げん・言 -1-

◆げん・言 -1-

2009-08-23 09:16:54 | さくぶん

★

言葉を使えば、何とでも言える。

これが言葉のさまざまな特性のなかでも、とりわけ興味深いものに思えます。何でもつなげてしまおうし、黒と白を言いくるめることもできるし、物は言いようだし、とにかく、いかがわしく、うさんくさい点では他に類を見ないと言えそうです。

★

言葉を用いて言葉を語る。

当然のことですが、言葉について論じるさいには、ふつう言葉を使わざるを得ません。こういう、鏡に鏡を映すような話が好きです。ややこしい作業ですが、軽いめまいを誘うようで、わくわくします。こどもはぐるぐる回る遊びを好むみたいです。それと似ている気もします。

脳について脳が思考する。そういうこともありますね。でも、その作業で用いられるのも、言葉みたいです。すごいと言えばすごいし、仕方ないと言えば仕方ない気もします。

思いつき、つまりでまかせで言うのですが、ヒトは、言葉に対して、言葉に備わっている属性以上のものを期待しているように感じられます。期待され過ぎている言葉がかわいそうです。期待し過ぎているヒトも、かわいそうだと言えそうな気もします。親子の関係に似ていませんか。

こどもって、反抗しますよね。



言葉について話したり書いたり考えたりするときには、注意が必要です。言葉という言葉にいろいろな意味やイメージがあるため、混乱を招く恐れがあるからです。たとえば、たった今書いたセンテンスの意味は、1)「あらゆる言葉にいろいろな意味やイメージがあるため、……」とも、2)「言葉と呼ばれている語にはいろいろな意味やイメージがあるため、……」とも解釈できます。

ここでは、2)の意味のつもりで書いたのですが、表現力が乏しいために、混乱を招く書き方をしてしまいました。ごめんなさい。

言葉はものごとを「分ける」ためにも、「分かる」ためにも使われています。「分ける」ことや「分かる」ことが可能かどうかは分かりませんが、使われているようです。

言葉を「分けて」みましょう。言葉の働きや機能や状態に注目して「分ける」方法と、言葉を比喩つまり「他のものに置き換える」作業によって「分ける」やり方が考えられます。



言葉の働きや機能や状態に注目して、言葉を「分けて」みましょう。

1) 語、単語、語句、フレーズ、センテンス、文章という意味で言葉という言葉が使われる場合があります。今挙げたのは、主に書き言葉についてよく言われる言葉ですが、話し言葉に関しても使える言い回しだと思われま。

2) 話し言葉と書き言葉を合わせて言葉とか言語と言われることがあります。この意味では、手話も言葉・言語です。この使い方は、さらに2つに分けることができます。日本語、アイヌ語、英語、中国語、日本手話、日本語対应手話、フィンランド手話という具合に、個々の言語を指す場合が1つ(※この場合には、方言やホームサイン(家庭で使われている手話)の存在を忘れてはなりません)。もう1つ、そうした諸言語をまとめて、ヒトという種に共通して観察される言語活動という意味での言語があります。ここでいう言葉・言語とは、「狭義の言語」と言うこともできそうです。

3) 「広義の言語」という考え方もあります。2)に加えて、数字、音声、記号、音楽、表情、めくばせ、ボディランゲージ、合図、踊り、絵、図、点字、アイコン、シンボル、雰囲気、空気(※「空気を読む」の「空気」です)、空間(※話す時の相手との距離や、「間取り」の「間」や、上座下座などの意味です)というふうに、多岐にわたる

物・事・現象・状態・状況を含みます。いろいろな説があるようです。「広義の言語」に共通するのは、表現・交換・発信・受信の対象になるという点です。この条件を満たせば、何でも含まれると考えています。

4) 話し言葉と書き言葉に共通するという意味での、言葉遣い、言い回し、表現法、レトリック、物の言い方、口ぶり、語調、語気、丁寧さや敬語的かどうかの程度など。

5) 狭義の人工言語。コンピューター言語、機械語（マシン語）、物理学などで数学的な考え方をを用いて記述するための数字や記号を使った言語など。

いかにも素人っぽい、大まかで粗雑な分類ですが、とりあえず以上のようにも分けることが可能な、くらいに受け止めておいてください。「そういえば、そんなものも言葉と呼ぶことがあるね」ほどの話です。



言葉を比喻つまり「他のものに置き換える」作業を利用して「分けて」みましょう。隠喩でも直喩でもどちらでもいいと思います。隠喩、直喩の順で例を挙げてみます。

言葉は「まぼろし」である。

言葉は「まぼろし」のようなものである。

「○○」のなかに入りそうなものを、思いつくままに並べてみます。鏡、空気、水、こころ、道具、武器、衣装、生き物、流れ、波、悪魔、愛、精神、魂、ゲーム、パズル、海、山、石、麻薬、鎖、神からの贈り物、遺伝子、火、炎、光、灯り、影、潤滑油、お金、貨幣、財産、怪物、宝物、神との契約、遺産、魔法、催眠術.....。

こんなふうに言葉を「定義する」つまり「分ける」ことも、比喻を使えばできそうです。「悪魔の辞典」とかいう本を思い出します。

個人的な感想ですが、隠喩のほうが直喩よりも、説得力があり語呂もいいような気がします。「言語は○○のようなものである」という直喩法を用いた自信のなさそうな言い方に比べ、「言語は○○である」と隠喩で、ずばっと言い切ってしまうほうが、迫力があるように感じられます。怖いことです。何でも当てはまるように思えてきます。

現代詩や、商品・サービスのコピー、プロパガンダ、スローガンみたいです。「言葉は蠍（さそり）である」・「言葉は君の背中にある傷跡である」・「言葉はキリマンジャロのふもとに咲くタンポポである」・「言葉は爆発である」・「言葉は発情である」・「言葉は民族の生命線である」という調子です。

★

比喩、特に隠喩は要注意だという思いを強くしました。迫力や説得力があるだけでなく、比喩だということを忘れさせてしまう危険性を備えているような気がします。

話がいつの間にかすり替わっている。そんな状況を経験なさったことはありませんか。自分が話したり書いたりする時にも、他人の話を聞いていたり書いたものを読んでいる場合にも起こりそうです。

言葉は何とでも言えます。比喩はレトリックであり、言葉の綾とも言うらしいのですが、説得力があるため、その語り口で、つい騙（かた）られる、つまり騙（だま）されてしまう恐れを感じます。語る行為は基本的に騙ることなのですが、語るヒトがその仕組みを利用して、他のヒトを故意に騙す場合もある、という意味で怖いです。

★

言葉と関係ありそうな言葉を並べてみましょう。でまかせに、列挙していきます。言葉の特性を尊重し、「正しい」対「正しくない」という、いかがわしく、うさんくさい2項対立とは、なるべくかかわらない形で、いかがわしく、うさんくさいリストをつくってみます。

「ことば・コトバ・言葉・詞・辞」「ことのは・言の葉・言の端・事の端」「こと・言・事・異・殊・如」「は・葉・端・歯・派・刃・波・八・破・播」「げんご・ごんご・言語」「ご・語・悟・誤」「いう・言う・云う・謂う」「はなし・話・噺・咄」「話す・放す・離す」「はなつ・放つ」「はっする・発する・ハッスル」

「発す・破す」「かたる・語る・騙る・かたり・語り・騙り・カタリ派」「よむ・読む・詠む」「かく・書く・描く・掻く・画く・欠く・掛く・懸く・昇く・駆く・繫く・繋ぐ・構く・構える・番える」「つたえる・伝える・つたう・伝う・繕ふ・つた・鳶」「つげる・告げる・継げる・接げる・つぐ・告ぐ・継ぐ・接ぐ・次ぐ・亜ぐ・つぎ・次・継・注ぎ」「となえる・唱える・称える・となふ・唱ふ・称ふ・調ふ」

「いわく・曰く」「のたまう・宣ふ・のたまう・たまう・賜う・給う・のりたまふ・のりと・祝詞」「のる・宣る・告る・伸る・似る・乗る・載る・罵る・賭る」「のべる・述べる・陳べる・伸べる・延べる・ノベル・のぶ・述ぶ・陳ぶ・伸ぶ・延ぶ・ノブ」「しゃべる・喋る・シャベル・しゃぶる」「くち・口」「した・舌」「くちびる・唇・脣・吻・くちべり・口縁」

「もうす・申す・まをす・まうす・マウス」「さけぶ・叫ぶ」「わめく・叫く・喚く・をめく」「ほえる・吠える・吼える・咆える・ほゆ・吠ゆ・吼ゆ」「こえ・声・聲・乞え・恋え」

「いき・息・意気・いきる・生きる・活きる・熱る・燃る・いきむ・息む・いく・生く・活く」「なく・泣く・鳴く・啼く」「なげく・嘆く・歎く」

「うったえる・訴える・うったふ・うるたふ・うるたう・訴ふ」「うたう・歌う・謡う・謳う・唄う・詠う・うたあう・歌合・うちあう・打合・うた・歌・唄・唱・詩・うたい・謡」「ほざく・ほさく」「ほぐ・祝ぐ・ことほぐ・寿ぐ・言祝ぐ」「よぶ・呼ぶ・喚ぶ」「なのる・名乗る・名告る」「なづく・名付く・なつく・懐く・なづける・名付ける・なつける・懐ける・なれつく・馴れつく」

ぐちゃぐちゃ、ごちゃごちゃしていますね。無理に「分けて」、すっきりさせる必要は、とりあえず、ないと考えています。

上記の言葉たちをながめながら、または口にしながら、いろいろな思いにふける。あたまたまに浮かぶさまざまな言葉やイメージや光景や思いに任せる。夢のなかでのように、ひたすら「見る」。すべてを肯定する。うんうんとうなずく。そのうち、眠ってしまってもかまわない。

それに勝る楽しみはないような気がします。

09-08-24 げん・言 -2-

◆げん・言 -2-

2009-08-24 09:56:40 | さくぶん

★

言語との接し方は、2通りあるのではないかと考えています。

1つは、言語そのものにこだわることです。2つめは、何かをするついでに言語に取り組まざるを得ないために、仕方なく言語に取り組むことです。

前者はとても危険な行為だという気がします。警戒を要すると言っていいほどです。

できれば、避けるにこしたことはないという怖さを感じます。でも、言語そのもののにめり込む人がいるようです。不幸になるのは目に見えているのに、です。自戒の意味でも、そう思います。



言葉について言葉を用いて語るさいに、避けられないのは、用いられる言語という制約つまり枠組みのなかでしか語れないという点です。大きな問題です。まともに取り組めば、さ迷った挙句、狂気という深みにはまり込むしかない不可能性と向き合うことになるだろうという気がします。

ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしたもの、つまり、森羅万象であったり、言語であったりするわけですが、それを、たとえ、あるひとつの言語という枠組みがあるにしても、その制約のなかですっきりとさせようと試みたり、「分ける・分かる」を成立させようとする作業は、危険きわまりない行為だという気がしてなりません。

とりわけ言葉を扱うさいには、過度に真剣になったり、本気になったりするのは、わざわざ危うさを招き寄せるようなものだという気がします。そうならないためには、比喩的な意味での抜け道や風穴やズルが必要だと思います。

幸い、言葉には、「何とでも言える」といういわば「魔法」が備わっているみたいです。その魔法が人知の及ばない力やシステムであるとすれば、その魔法にかかるのはヒトの定めなのですから、無謀な抵抗はやめて、素直に魔法にかかってしまうというのも、1つの知恵かもしれません。

自ら、負けて、任せてしまうという意味です。そのうえで、掛けて、賭けて、翔けて、駆けまくるのです。引っ掻く、つまり書くとか描くくらいなら、それほどの危険はないでしょう。命までかける必要はないと思います。

言葉を扱うさいに、困難と危険を回避し、深手を負わないためには、トリックやレトリックが必要だと考えられます。語る作業が騙る作業にならざるを得ないという言葉の属性は、注目すべき現象だとも言えそうです。

言語そのものや言語に関する問題に真正面からぶち当たり、狂気に陥ったと言われる詩人、哲学者、学者などという名で呼ばれたヒトたちが、著作つまり言葉という形で、その存在の跡をたどる手掛かりを残していることは皮肉と言うべきでしょうか。



現時点で、惑星には多数の言語と方言があり、過去に存続し現在は失われてしまった

ものもたくさんあると言われていました。言語学という分野がありますが、別に言語学者と称するヒトたちに限らず、各言語の仕組みや様態、さらには複数の言語間にみられる共通点や相違点について、調べたり考えをめぐらしたヒトたちがたくさんいたようです。

そうした作業は、言語そのものを知ろうとする探究心からではなく、宗教の伝道に伴う翻訳、教義の注釈の記述、ある時点ではもう読めなくなった古い言葉で書かれた教義の解読、口承として残っている意味不明の教えや神話の解読と解釈、教義の解釈をめぐっての争いといった形を通して、行われてきたと言われていています。

★

ピラミッド、測量、像、建造物、農業（※雨や川などの水との戦い・管理）、土木技術、暦、数字、墓石、文字、碑文、経文、絵画、工芸、錬金術（=アルケミー）、証文、書簡、印、貨幣といった、文明や文化といった言葉でくくられるものを支えてきた、さまざまなスキルや技術や手段の根底には、言語があると思われまます。

かつては、宗教、学問、科学、哲学、農業、建築、工学、文芸、教育、語学、通商、交易、経済、植民、侵略などが「分かれる」ことなく、「からみ合って」存続していたらしいことに、興味を覚えます。

時を経るにつれ、やたら何でも枝分かれし細分化して、近接する分野同士、あるいは、1つの領域内での派閥争いが見られるというのが、現状のようです。

広義の「知」の分野に限らず、「分ける・分かれる・分かる」への反省の気運が、たとえば学際とか量子という言葉や考え方を通して、わずかながら高まりを見せてきているような気がします。それが錯覚でなければいいと思っています。

「分ける・分かれる・分かる」が「人為的な作業・操作」なら、「会う・合う・逢う・会う・合わせる・併せる・遇わせる・会わせる・逢わせる」は「非人称的で匿名的な事件・出来事」であるという気がします。

★

「わかる」の反対は「あわせる」といった形式的な言葉の綾には、いかがわしさと、うさくささを感じます。無理に「あわせる」努力をしなくてもいいという気がします。「わかる」は努力の対象になりそうですが、「あわせる」は努力してできるものではなく、むしろ「あわさる」のではないかと思っています。

そもそも、森羅万象は、ぐちゃぐちゃごちゃごちゃとしたものだという気がします。そ

の状態と「あわさる」とは、それほど隔たっていない感じがするのですが、単なる思いつきですので根拠はありません。

でも、もしもそうなら、言葉も「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃとあわさったもの」と言えそうです。でも、言葉には、「わかる」への並々ならぬ執着心と野心があるみたいです。執着心や野心を指向性とかベクトルという比喻で語る、つまり騙ることもできそうです。

いずれにせよ、今述べていることは言葉自体の属性というよりも、ヒトのあたまのなかにあるものの「反映」・「写像」（※比喻です）と言うほうが、いくぶんか正確な記述かもしれません。



言葉は「はなす・離す・放す・はなれる・離れる・放れる・はなたれる・放たれる・洩垂れる・はっせられる・発せられる」ことと、「かく・搔く・描く・書く・かける・掛ける・搔ける・描ける・描ける・駈ける・駆ける・架ける・翔ける」ことによって、ヒトの手を「はなれる」ものだと言えそうです。

その意味では、言葉は自由です。自ら動きもし、目くばせや合図も送ってくるし、自動的にヒトに働きかけもする。そう思えてなりません。言葉との新しい付き合い方、接し方を模索してみたいです。言葉とヒトの関係が、このままでいいとは思いません。



ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

以上の2つのフレーズを前提にすると、言葉・言語も、お金・貨幣も、「代理」ということになりそうです。

現在、グローバルな規模で起こっている大不況の下で、「貨幣とモノ・サービスの価値、およびその交換」という仕組み・システムに支えられた「市場経済」や「資本主義」に対しての反省や懐疑の兆しがあるならば、ついでに「言葉・言語と森羅万象のイメージ（まぼろし）、およびその発信・受信・伝達」という仕組み・システムに支えられた「知」や「文化・文明」への見直しの芽が生じてもいいのではないかと思うのは、ないものねだりでしょうか。



古今および洋の東西を問わず、ヒトは言語の多様性と向かい合ってきたようです。「言語の多様性と向かい合う」とは、「あう・あわさる」であり、同時に「わかる・わかる」でもある状況だと言えるような気がします。

複数の言語の使用、ある言語から別の言語への翻訳、時の移り変わりや場所の違いおよびヒトの移動によって言語がこうむる変化、文字を持つ言語と持たない言語の存在、ろう者の言語である手話、異なる言語を話すヒトとの間で使われる手話および身ぶり手ぶり、複数の言語が混じり合う現象（※英語のいわゆる「世界語化」や外来語の流入だけでなく、広義のクレオールやピジンという現象も含めて考えています）、新しく言語をつくらうとする試みとその定着……。

言語の多様性と移ろいについて、思いつくままに並べてみましたが、こうした現象や状況は、日常的に体験している、あるいは体験できるたぐいの具体的な話だと思われます。

それを意識するか、それとも無視したり、耳を覆って意に介さないようにするか。積極的にかかわろうとするか、できれば避けようとするか。そうした個人レベルでのスタンスの問題だとも言えそうです。言い換えると、「あう・あわさる」であり、同時に「わかる・わかる」でもある状況を、どのように受けとめるかというスタンスの選択です。

異なるもの、さらに言うなら、異形（いぎょう）のものに、積極的にかかわらないまでも、出来る限り敏感でありたいと願っています。母語か外国語かを問わず、意識的に言葉と触れ合うことが、その一歩であり、一部であるように思います。母語であっても、言葉はそれを話すヒトにとって異形のものであり、絶対的他者だという気がします。

09-08-26 げん・言 -3-

◆げん・言 -3-

2009-08-26 10:56:21 | さくぶん

何かを「感じ」て、それを「分かつ」とするためには「分ける」作業が必要になると言われています。大きなものを「分けれ」ば、当然のことながら、その分小さくなって視界にも入りやすくなるし、手にもつかめるほどの手ごろな大きさになりそうです。

「分ける」ことで、ある物や事や状態の一部が「切り離される」事態となるかもしれません。ちりぢりばらばら。そうになると、全体を見渡したいという野望は打ち砕かれそうです。

でも、そうでしょうか。

言葉は何とでも言えます。部分が全体の縮図だとか、どこを切り取っても全体と同じ形をしているとか、部分の中に全体があるとか、部分は全体の写像であって各所が対応し合っている。そんなイメージや話を思いつくヒトは、古今東西にいたし、いるようです。

いかがわしく、うさんくさい話です。

★

「分けた」としても、全体は再現できるとか、各部分を順番に延々と見ていけばいいのだとか、曲線を拡大すれば直線に見えるとか、無限大・無限小あるいはマクロ・ミクロという魔法の言葉を使えばいいとか、断片を培養して新たな全体に育てる。そんなイメージや話もよく見聞きします。

いかがわしく、うさんくさい話です。

よくできた、すばらしい話です。

言葉を使えば、何とでも言えます。

★

ヒトは各人が1台のテレビ受像機（※比喩です、念のため）しか持っていない。ヒトは1度に1画面しか知覚したり認識できない。そんな感じもします。

1台や1画面だけでは、あまりにも情けないので、もう少し増やしたとしても、そんなに数は多くないように思えます。ある割合で、特殊な知覚機能や認識能力を備えたヒトがいると言われています。まわりを見回してみましたが、縁遠い話です。

テレビ画面、パソコンモニターを例に取りましょう。何枚の画面に集中できるでしょうか。ぼんやりとながめるとか、それぞれの画面を短時間だけ部分的に見るという話をしているわけではありません。持続して集中して見る。そういう意味です。

心もとない感じがします。ヒトという種は、同時に複数の画面を知覚したり認識するようになっていないのではないのでしょうか。知覚器官や脳には、そうしたデータ処理ができるような仕組みが備わっていないと思われまます。

たとえ1枚の画面だけでも、怪しいです。テレビ、あるいはパソコンの1画面に、たとえば0.01秒間に映し出される情報量は、きわめて多量であるという気がします。その情報のうち何パーセントに集中できるのか。詳しいことは知りません。具体的な数値化されたデータも挙げられません。

でまかせですが、わずかの情報にしか集中できないのではないのでしょうか。そんな気がするだけです。ふだん、ぼーっとしていることの多い者の、個人的な体験をもとにした感想です。

★

言葉を使えば何とでも言えます。

多義性とか多層性という言葉とイメージがあります。

すもももももものうち

うつせみのあなたに

空蟬の貴方（貴女・貴男）に 空蟬の彼方に現人の貴方（貴女・貴男）に 現人の彼方に鬱世身の貴方（貴女・貴男）に鬱世身の彼方に 鬱背神の貴方（貴女・貴男）に 鬱世霊の彼方に.....

げんはげんであり、げんであると同時にげんであって、げんとげんのあいだにげんがあるため、げんをげんのげんだと言うこともできる。

間は観と感の関数である。

かんにかんをかんじる。

かんとかんとのかんにかんとかんとをかんじる。

かんにんしてください。

かんべんしてください。

以上は、思いつくままに、つまりでまかせに書いたフレーズですが、言葉を用いれば何とでも言えるため、もっともらしい説明をしたり、別の言い方に翻訳することもできると思われます。そういうことが得意なヒトがいます。

いかがわしく、うさんくさい作業であることは言うまでもありません。でも、場合によっては、いかがしいとかうさんくさい行為だとは言われません。褒められたり感心されることもあります。

そういう作業が得意なヒトが崇め奉られるのも、珍しくない気がします。そんなヒトの口から出た言葉が、真理と言われることが、よくあるように思えます。



宗教や哲学や美術と呼ばれる分野では、ある文字や図を「象徴」として見なし、それにいろいろな意味やイメージを織り込んだり、読み込んだりする場合があります。こうした考え方には、いかがわしさとうさんくささが、どうしても付きまといます。

狭いところにたくさんものを詰め込むという作業なわけですから、無理があります。その無理というか不可能性に臨むスタンスが、逆にヒトを駆り立てるという側面も観察されます。

よくわからないもの、うさんくさいものほど、すばらしいものだという思い込みは根強いようです。「難解だ・難解なもの」が、ほめ言葉であったり、哲学や思想と呼ばれたり、聖なるものとして崇め奉られるのを、よく見聞きしませんか。

つまらないという意味でうさんくさいものも、崇め敬われることもあるようです。たとえば、イワシの頭でも、壁の落書きでも、ただのヒトでも、路傍の石でも、信仰の対象になり得るみたいです。

すっきりとしたもの、単純明快なものは、流通しやすく伝達されやすいみたいです。広く行きわたり、何度も唱えるほど、よくわからないものになる気もします。

「わかる・わかる」もいかがわしく要注意ですが、「わけがわからない」にも警戒する必要があります。



「まつりごと」には「政」という漢字を当てるそうです。広辞苑（※これしか大きな辞書は持っていないため、引用しています。「正しい」を求めるためではなく、言葉というとてもなく大きな読み物の一部、つまり「物語の断片」として辞書を読んでいます）に、「祭事」または「奉事」の意、とあります。

また、「祭事（さいじ）」は、まつり・神事（しんじ）だと書いてあります。「奉事（ほうじ）」とは、「長上（ちょうじょう）」、つまり年長や目上のヒトにつかえることらしいです。

政治と宗教と権力が、結びつき、からみ合っていた時代があったみたいです。想像すると、何だか怖い。今も、3者がわかれていない国や地域や組織があるようです。

★

言葉について考えるとき、その言葉がいわゆる母語であるに越したことはありません。だいいち、楽です。居心地のいいテリトリーだからだと思います。事情があって母語を使えない状況で思考し感じ、作品や論文をものしたヒトたちもいました。

たとえば、中欧や東欧から迫害や殲滅（せんめつ）を逃れた人たちが、欧州の西にへばりついている斜陽の島国や、さらに大西洋を越えて、自由を標榜する新興の大国に移り住み、母語ではない言葉を習得し、大きな業績を上げたという歴史上の物語もそんなに昔のことではありません。同様のことは今も起こっているようです。

「わかれる・ちる・はなれる・さる・のがれる」によって、「あう・まじる・つながる」があったり、「ぶつかる・あらそう・きそう・とってかわる・かわる・かえる」が生じたりして、新しいものが生まれたと言えそうです。

そんな大それた話とは関係ありませんが、母語以外の言葉の辞書をたどたどしく引きながら、ささやかな形で言葉について考える手掛かりとすることもできるかもしれません。

★

「わかれる・わかる」に相当する英語のパーツに、たとえば「part-」があるようです。

「part・部分・部品・パーツ・分ける・分かれる・別れる」「party・一行・集団・政党・宴会」「depart・出て行く・出発する・それる・はずれる」「departure・出発・逸脱・新計画」「department・部門・百貨店の売り場・省・局・課・学科・学部」「department store・depart が集まった店・デパート・百貨店」「partition・仕切り・分配・分割・区

分」「apart・離れて・ばらばらに・別個に・分裂した・異なる」「apartment・アパートの1世帯分・部屋」「apartment house・アパート・マンション・共同住宅」「apartheid・アパルトヘイト・人種隔離政策・差別・隔離」「particle・粒・微粒子・分子・粒子・質点・聖餅（せいへい）」

「まつりごと・政」が「part」に「わかれる」。部門・省・局・部・課・政党・派閥。本来の機能・役割は、「代理」であったはず。神、あるいはヒトを超えた存在の「力」を授かったり、預かった「代理」であったり、近代の考え方では、国民から「権力・権限」を委譲された「代理」であり「僕（しもべ）」であったはず。

でも、現状はどうでしょう。この国の「まつりごと」をみてください。また、分離ではなく、一致が依然としてあったり、復活しつつある地域も、世界には見られます。

すごく単純なようで、すごく複雑な動き、または仕組み。そうしたものが、この世を支配している気がします。



「あう・あわせる・つながる・つなげる」に相当する英語のユニットに、たとえば「uni-」があるそうです。

「unit・単位・一個・一人・一団・一組・一式・構成単位・設備・ユニット・単位量・単元・地区集会」「unity・単一性・均一性・統一性・統一体・まとまり・調和・一致・一致団結・一貫性・固体・単位元」「union・組合・結合・合体・合併・結婚・性交・連合・連合国家・連邦・連合表象・同盟・会・クラブ・化合物・和集合」「universe・宇宙・森羅万象・万物・全世界・全人類・銀河系・星雲・領域・分野・母集団・多数・大量」「uniform・均一な・そろいの・一様な・同形の・一定の・不変の・制服・ユニフォーム・軍服・軍人・制服組」「unique・唯一の・無比の・すばらしい・一意性の・無類の・独特の・独自の・ユニークな・唯一のもの・唯一のヒト」「unite・結合する・合体する・合併する・結合させる・合体させる・化合する・結婚する・併せもつ・兼ね備える」

お馴染みのものですね。英語ながら、よくわかるイメージだという気がします。「あわせる・あう」というイメージに、「とけこむ」「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」という印象が薄く、「あわせる・あう」前の各構成物、つまり個の属性が残っている感じを否定することができません。個人的な印象ですが、個の主張の強さに驚かされます。



「あわせる・あう」というのは、「うつろう・うつりかわる」過程における「仮のすがた」なのかもしれません。だから、個は全を装いつつ、個であり続けるののかもしれません。

生き物やヒトというレベルで考えると、いいことのように思えます。せめて、個であった名残とか証しをとどめておきたい、とどめておいてほしい。

個は全を装いつつ、個であり続ける。そうした仕組みが、この世にあることを祈りたい気がします。二面性、さらに言えば多面性という話（※あくまでも話です）があってもいいような気がします。

こういうのも、うさんくさい話というのでしょうか。



「光の二面性」とかいう説、つまり物語を最近よく見聞きします。だいぶ前からあった話のようです。言葉として知っているだけで、詳しいことは知りません。この話が実証されていない、あるいは実証されたというニュース、つまり物語についても、よく知りません。

1) ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

2) ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

以上の2つのフレーズを前提にすると、「光の二面性」というのも、やはり、「代理」である知覚から生じる印象とかイメージなのでしょう。それとも、知覚という「代理」の「代理」である言葉の「綾」というか、「レトリックというトリック」なのでしょう。

こういうのも、うさんくさい話というのでしょうか。

「光の二面性」という物語が脚光を浴びて優勢になってきたらしいのですが、それまで優勢だった物語は、嘘だったという意味なのでしょう。素人の自分にはわかりません。

嘘という言葉と科学とは相性が良くなさそうなので、「進歩」とか「発展」という言葉に置き換えられて、処理されているような気配を感じます。「光の二面性」もいつか、「進歩」「発展」という名の物語で退出を演じるのでしょうか。

2つの側面を兼ね備える。個人的には、好きなイメージ・言葉です。



「わかる・わかる」「わからない・わからない」「わけがわからない」「わけなし・わからない」

「わけはない・わけもない」「わけあい」「わけあり」「わけがら」「わけ」

「わっか・わ・輪」みたい。ぐるぐる。目が回る。堂々巡り。

ぐちゃぐちゃごちゃごちゃを、わかる・わけない。わからない。わけありみたいだけど、たぶん、わけなし。

★

言語という幻（まぼろし）を用いているヒトという種は、限界で彼方を望みながら、同時に減界の深みにはまっている。そんなふうに考えています。

限界とは、限度、つまりぎりぎりの線だ、というイメージをいただいています。限界を「かぎり」とも言いますね。「かぎり」に「かげる・陰る・翳る・かげり・陰り・翳り・かげ・影・陰・蔭・翳」を読みたい気持ちにかられます。

「正しい」対「正しくない」という、いかがわしい2項対立は脇に置きましょう。「正しい」対「正しくない」はなし、という、うさんくさいスタンスでいきます。

限界はいわば境い目ですから、異人や異形のものたちがいる外界と接し、その外界のかなたを望む位置にあると言えます。居心地のいい自分たちのテリトリーつまり縄張りから、さぞかし窮屈で言葉も通じないわけのわからないだろう世界を眺めやるのです。

減界とは、「何かが欠けている」「何かが足りない」という、常に「乏しい」世界をイメージしています。言葉とは、森羅万象に張り付こうとしても、決して張り付くことのできない運動を常態にしています。万物に名前を付けようとしても、追いつかない。物事や現象をどんどん分けて名付けていっても、きりが無い。減界とは、そんな世界です。

言葉が森羅万象に張り合おうというのは、土台無理な話だという気がします。言葉が限界にあるとは、言葉は柵（かせ）にはめられているとか、言葉は思うように働いてくれないという意味です。言葉が減界にあるとは、言葉は常に足りない、言葉には何かが常に欠けているという意味です。

代理である言葉の限界が減界だとも言えそうです。

うさんくさい話です。

★

「写像」という考え方があります。ヒトのつくったイメージとしては、よくできている感じがします。でも、よくできているからこそ、そのいかがわしさを免れるわけにはいきません。「写像」という考え方を支えているのは「影」の比喩だという気がします。

「あるもの」と「その影」の間では、両者のあらゆる点が「対応」し合っている。そうした楽観主義に基づく考え方だと言えます。写真、スライド、映画、テレビ画面、パソコンのモニター、CG（＝コンピューターグラフィックス）、X線写真、CT（コンピューター断層撮影法）、MRI（磁気共鳴画像法）など、視覚的イメージで、「あるもの」を「その影」として映し出す方法があります。

「対応させる」とは、「うつす・移す・映す・写す」作業に、きわめて近い仕組みだという気がします。以下に、そのバリエーションを3つ挙げてみます。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

ヒトは、「あるもの」と「その影」の間で、点と点レベルの「対応関係」を実現するために、各種多様な器具・機器を作り使用している。

以上の3つのフレーズに共通するのは、隔たりのあるものを「近く」というイメージ、あるいは動きだと思われまふ。これが「知覚」なのではしうが、「近く」に「あるように」「する」のではなく、あくまでも「近く」に「あるように」「見える」「ように」「する」というもどかしい作業・仕組みだと考えたほうが正確だという気がします。

★

幼かったころに、読み聞かせをしてもらったのを思い出すことがあります。文字が読めないために、文字を読んでもらい、その声を聞きながら、あたまのなかで、いろいろなイメージをいだく。

絵本の場合には、本を読んでくれるヒトの傍らに座り、その絵に見入り、同時に、その絵にはないさまざまな細部を付け足していく。

紙芝居や人形劇も思い出します。声が聞こえる。絵や人形の動きが生きているように感じられる。

ないのにあるように見える。遠くにあるのに近くに感じられる。魔法です。おかしかったり、どきどきしたり、時にはこわい気分にもなりますが、心地よい。こわくても大丈夫

夫。こどもはちゃんと知っています。本当は、「遠く」にあることを承知しています。

声や、絵や、あたまのなかの風景が、本物のようで本物ではないことが、何となくわかっています。

物語、フィクション。表象（作用）、代行（作用）。こどもは、そんな難しい言葉は知りません。でも、その仕組みは、ちゃんとからだとあたまでわかるようになっていきます。ひよっとすると、生まれるまえから、わかっているのかもしれませんが。

言語能力（competence）、言語運用（performance）。こどもは、そんな難しい言葉は知りません。でも、おはなしをきいていると、おはなしのなかにでてくるものたちが、めのまえにいるようなきもちになります。はなしたり、うごいたりしているのが、いきいきとかんじとれるのです。

声って、ふしぎです。声は、たぶん、魔法です。おまじないです。ときには、何を言っているのか、わからなくてもいいような気がします。わかる必要のない「ちから」のようなものが混じっているのかもしれませんが。

でも、わからなければならないこともあるようです。わかる必要のない「ちから」にさからうべき状況もあるようです。まじないは「呪い」とも書けます。「まじなう・呪う」は「のろう・呪う」に似ています。

★

「呪う・まじなう・のろう」は「祈る」ことらしいです。問題は、何を祈るかだという気がします。ヒトは、時と場合と気分に応じていろいろなことを祈ります。

気になったので、「いのる」を辞書で調べてみました。「斎（い）告（の）るの意」と広辞苑は説明しています。語義として、「幸いを請い願う」のほかに「（相手や物事に）わざわざ起こるように祈願する」が同居しています。「わかれていない」ということです。

胸に手を当てれば、そしてまわりを見れば、あるいは、世界で起こっている出来事についてニュースを通して見聞きすれば、納得できる気がします。残念ながら、「祈る」に2つの意味があるのは、ヒトの常のようです。

★

童話は残酷だとよく言われます。かちかち山、桃太郎、赤ずきんちゃん。おとぎ話や昔話と呼ばれる物語にも、今思うと恐ろしいストーリーが数々ありますね。だます、傷つける、苦しめる、殺（あや）める。争う、戦う。現在、こどもたちが熱中しているゲー

ムも、そんな筋書きに満ちています。

こどもは、そうした物語をやすやすと受け入れるみたいです。フィクションのさまざまな定型を受け入れる回路が、生前から備わっている。そうした情報が発信されれば、ちゃんと受信する。嘘みたいに楽々と認識し理解してしまう。そんなふうに思えてなりません。

そうしたフィクションの定型とも呼ぶこともできるもの。それは、善悪とか正誤とか真偽などの抽象的な「対立」を越えた、ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしたものとして「ある」。そんな気がします。それを手探りのようにして確かめる手段は、ヒトにとって言葉しかないと思われれます。ぐちゃぐちゃごちゃごちゃした言葉です。

09-08-27 げん・言 -4-

◆げん・言 -4-

2009-08-27 10:54:28 | さくぶん

★

ヒトが世界や宇宙を「見る」とときには、知覚や意識というフィルターを通して、世界や宇宙の「代わり」つまり「代理」を「見ている」のだ。そういう考え方があるみたいです。たぶん、そうなのだろうと思います。ただ、そう断言したとしても、真偽を確かめる方法をヒトは手にしてないという気はします。

そもそも何かを観測したり真偽を判断するという行為は、ヒトには似つかわしくない。こんなふうにも言えそうです。そうであれば、例の「すべてはまぼろしだ」という、明快と言えれば明快、杜撰（ずさん）と言えれば杜撰、興ざめと言えれば興ざめ、不毛と言えれば不毛、他に言いようがないといえれば他に言いようがない、それを言えばおしまいだと言えればおしまいになる話に、落ち着いてしまいます。

★

ニヒリズムという言葉思い出します。もちろん、こんな考え方を意に介しないヒトのほうが、圧倒的多数であるにちがいません。世界や宇宙や森羅万象については、何とでも言えます。

神、神々、仏、愛、希望、真理、聖なるもの、救い、悟り、知識、学び、習得、学習、学問、技術、テクノロジー、スキル、ノウハウ、発展、進歩。

こうした言葉や、その言葉をめぐる物語を口にするヒトたちで、世界は満ちていることは間違いないだろうと思われまふ。こうした言葉とその物語には、こころに訴える力がある。そう感じる、あるいは、そう言うヒトがたくさんいるにちがいないと思ひます。

ほとんどのヒトがそうだと言うべきでしょう。この文章を書いている者も含めての話です。ただ、そうした言葉と物語の力を、全面的に肯定できずに、ためらいを覚えているヒトたちもいるという感じがします。この文章を書いている者も含めての話です。

★

世界や宇宙や森羅万象について、次のような言葉とイメージを用いて語る。

神、神々、仏、愛、希望、真理、聖なるもの、救い、悟り、知識、学び、習得、学習、学問、技術、ノウハウ、発展、進歩。

抽象的です。つかみどころのない、トリトメのない話と言えないこともありません。言葉そのものではなく、言葉というフィルターを通して、言葉の向こうにあるまぼろしとイメージに注意を向ける。そうした意識の仕組みが「抽象的」だという印象を生じさせているのかもしれない。

言葉はそうした抽象化という仕組みを基本としてヒトを動かし、また動かされる側のヒトもその仕組みに慣れ、抽象化という言葉の特性を積極的に利用するようになって今日に至っている。そんなふうにも言えそうです。

★

「言葉の物質性」というフレーズについて、よく考えます。個人的には好きなイメージです。官能的とも言える体験へと導いてくれるからです。

言葉は代理でしかないという、がっかりするほかしかない考え方に立つのなら、「言葉という代理の物質性というまぼろし」という、これまたがっかりするほかしかない話になるのでしょうか。それでも、かまいません。ヒトはヒトでしかありません。それ以上で

もそれ以下でもありません。

「言葉の物質性に触れる」とは、正確には「言葉という代理の物質性というまぼろしを、知覚および意識というフィルターを通して感じ取る」とでも言えばいいのでしょうか。フィルターが比喩であることは言うまでもありません。比喩の比喩です。それでも、かまいません。致し方ないとも言えます。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

今挙げた2つのフレーズを前提として認めるなら、ヒトが何かに、触れたり、何かを耳にしたり、目にしたり、舌で味わったり、何かの匂いを嗅ぐといった行為は、すべてが間接的な擬似世界での行為ということになりそうです。それでも、かまいません。致し方ないことです。

★

言葉の表情、言葉が送ってくるめくばせや合図、言葉の演じる動作に敏感になること。これが、「言葉の物質性に触れる」という意味です。いかがわしく、うさんくさい話であることを承知で、単純にそう考えましょう。

言葉の意味と呼ばれているものや、言葉が指し示すと言われている「何か」や、言葉の背後にあると信じられている「何か」を、見ようとか読もうとか分かれようとする姿勢とは異なる、言葉との接し方や付き合い方だ。とりあえず、そう考えてみましょう。あくまでも、とりあえず。

ややこしいことではありません。日常生活で体験している出来事のはずです。今すぐにも、実行できる行為だと思います。

★

読経をするか聞く。詩吟をするか聞く。知らないあるいは堪能ではない外国語を耳にする。ぼんやりと他人の話し声を聞いている。寝入る寸前に耳に入る会話。ふと耳にするどこかの方言。読み聞かせる。読み聞かされる。カラオケで歌う。カラオケで他人の歌声を聞く。CD・MD・iPodでボーカルの入った音楽を聞いたり、それに合わせて歌詞を口ずさんだりハミングする。発話、つまり言語に障害のあるヒトとやり取りをする。遠くから届いてくる聞き取りにくい声がふいに耳に入る。ささやくような細かい声を聞き流す。

以上は、聴覚および発声を基本とする体験です。「耳を傾ける」というよりも「聞こえてくる」という感じの「聞く」かもしれません。また、「声を出す・歌う」といっても、自分の発する「声」の意味をはっきり意識している行為ばかりのようでもありません。

意味を持つ「声」であるはずのものが、意味とは離れたいわば「一種の音」として耳に入ってくる。あるいは、自分が声を発している瞬間や持続した時間に「身をまかせる」、またはそのなかに「投げ込まれる」体験でもあるとも言えそうです。

「抽象的」というのが、フィルターを通して感じられる「間接的」、つまり「隔たった」という意味なら、この曖昧で漠然とした体験は、むしろ「具体的」、言い換えるとフィルターを通さない「直接的」で「即物的」な音声との触れ合いとも言えそうです。

「ぼんやりしている」のに「具体的」とも言い換えられそうな気がします。でも、単なる言葉の綾だと言って済まされない感じがします。

★

書道。書写。写経。パソコンのワープロソフトを使って文字を表示、あるいは印刷しようとして、フォントの選択に迷う。手書きで年賀状の宛名を書こうとしているとき、緊張したり、逆に集中力が薄れてきて何を書いているのか瞬間的に分からなくなる。本や雑誌を読んでいてだんだん眠くなり、活字を目で追うのさえ億劫になる。

ハングルやアラビア文字で書かれたメールや手紙が届いて、戸惑う。パソコンのワープロソフトで文章を書いていて、文字変換にてこずる。読みにくい手書きの文字で書かれた文章を判読する。眼鏡を外した状態で、目にしたぼんやりとした文字。虫眼鏡で拡大しなければ、小さな虫のようにしか見えない文字。

以上は、視覚によって文字を認識するさいに、「文字が文字として感じられなくなる」体験だと考えることができそうです。

「文字」に備わっているはずの「意味」や「読み」が、曖昧になる。文字が、「かたち」や「もよう」に見えてくる。こうした体験のなかに、目の不自由のヒトが、指先で点字を読む行為を含めてもいいのではないかとも思います。残念ながら点字は読めませんが、点字を指先の皮膚でなぞっていて、点字が点字ではなくなるような瞬間がある。そんなケースも十分ありそうな気がします。

フィルターつまり代理である、具体的で即物的な紙面の染みや凹凸（おうとつ）の形である、文字や点字を通して、曖昧で漠然とした「何か」つまり「意味やイメージと呼ばれているまぼろし」を「読み取る」。

★

ふだんは「読み取る」とは「分かる・悟る・学ぶ」「理解する・納得する・習得する」へと向かう行為だと言われています。それに対し、インクの染みの形を形として、あるいは、紙面に打ち込まれた凹凸を凹凸として、知覚・認識する行為は、「ぼんやりしている」「書かれている内容に集中していない」「変だ」「危うい」と言われそうな気がします。

でも、その「ぼんやり」や「集中していない」や「変」を、ヒトは日常的に頻繁に経験しているはずです。さもないと、起きている間じゅう、神経を集中していなければなりません。そんなことは、ふつう、ヒトには無理なのではないでしょうか。授業中、仕事、自動車の運転中でも、状況は変わらない気がします。適度に気を抜いているからこそ、然るべきときに集中できる、という考え方も可能ではないかと思われま

それはそれでいいとして、気になってならないのは、「抽象的」と「具体的」という2つの言葉の関係性です。一般的には、反対の意味だと言われていますが、何だかよくわからなくなってきました。2項対立というのは、やっぱり、いかがわしくて、うさんくさいという気がします。

この「何だかよくわからない」感じを、馬鹿だからとか、変だからとか、言葉の綾とか、矛盾とか、混乱とかいう、安易な言葉で片付けていいものなのではないでしょうか。もしかすると、そうなのかもしれません。

ため息がもれます。言葉はぐちゃぐちゃごちゃごちゃだ、という思いを強くします。

★

言葉を狭く取ると、話し言葉と書き言葉があたまに浮かびます。話し言葉は肉声かスピーカーを通した声、書き言葉は手書きの文字か活字だと単純化できそうです。

日本語の場合には、音（おん）と字から見た場合、たとえば、次のようになるでしょう。

「chi・ti・ち・チ・千・知・智・値・血・痴・地……」

「ran・らん・ラン・乱・卵・蘭・覧・欄・LAN・run……」

「I・yi・wi・い・イ・ゐ・ヰ・以・伊・井・意・異・緯・胃・衣・医……」

★

試しに、「ち」と言ってみましょう。上下の歯が触れ合いますね。硬い物同士が接するわけですから、ぶつかるという感じでしょうか。するどい音です。

赤ちゃんや、ヒトの生活圏でよく見られるペットや家畜や野生の生物に向かって、「ち、ち、ち……」などと連続してその音を発したら、穏やかではない感情を相手に引き起こしそうな気がします。赤ちゃんだったら、泣くかもしれません。ワンちゃんだったら、うなったり、ほえたりするかもしれません。

「らん」はどうでしょう。英語を日本語で表記する場合には、ラ行は、言語では「r」だったり「l」だったりします。英語を母語としていない場合には、両者の音を区別するのは、難しいですね。英語の「r」と「l」の発音の区別に苦労するのは、日本語を母語とするヒトたちだけではないと聞いたことがあります。

英語の「b」と「v」の区別についても、同様の話を聞いた覚えがあります。ふいに思い出しましたが、スペイン語を母語とする人たちにとっては、「sit と seat」、「pit と peat」の発音をするのも聞き取るのも苦手らしいです。

★

発音、詳しく言えば、子音や母音や、さらにまた破裂音や摩擦音などといった分け方があさうですが、言語間の発音の違いを考えただけでも、その多様さに驚きます。母音は「あいうえお」の5つだけしかない、といった簡単な話ではないようです。

「い・イ・ゐ・ヰ」については、現在話されている日本語では、発音上の差はないみたいです。この国にはたくさんの方言がありますから、詳しいことは知りません。ひょっとして、昔の発音の名残をとどめている方言があっても、不思議はないと思われます。

試しに、「い」と言ってみましょう。少し伸ばして「いー」と言ってみましょう。唇と口に緊張感を覚えませんか。またもや、昔の記憶が呼びさまされました。歌手の松田聖子さんは、「い・き・し・ち・に……」など「i」を伴う語の発音が、格段にきれいだという評を聞いたか読んだことがあります。そう思って「赤いスイートピー」なんてフレーズの音の記憶をたどると、めりはりが利いていて、確かにきれいだったような気がします。

ここで、ちょっと考えてみてください。「ち」「らん」「い・いー」と発音した時に、あたまに何かが浮かびましたか。たとえば、上記の「漢字」やその漢字の意味に相当するイメージが、あたまのなかに「ちらつく」とかしましたか。

何かが「ちらつく」にしる、声というか音を出すのに一生懸命になって「夢中」ある

いは「無心」だったにしろ、たぶん、その時のふつうではない心境、つまり、「ぼんやり」とか「(自分のしていることの意味に)集中していない」とか「変」な心もちが、「言葉の物質性に触れる」だったのではないかと思います。



言葉のフェティシストでありたい。

語弊のある言い方だとは思いますが、そう思っています。フェティシズムとは、何かの機能や目的や役割ではなく、そのもの自体にこだわりをしめすことだと理解しています。その対象になるものをフェティッシュ、そうした傾向のあるヒトをフェティシストと、一般には呼んでいるみたいです。フェティッシュのコレクションに夢中になるタイプのヒトもいるようです。

個人的には、辞書を読むのが好きです。かつてよく「読んだ」———というか、ほとんどの場合が斜め読みですから「見た」というべきかもしれませんが———小説や哲学書を読むよりも、今は好きです。

辞書は言葉の意味を調べるものとされていますが、言葉の表情とか身ぶりとか目くばせを楽しむ場にもなるという気がします。少なくとも、自分の場合には、そうです。

新聞や雑誌の活字を虫眼鏡で拡大して、書体ごとに異なる美しさを味わうのも、好きです。これは、一度やり始めると、1、2時間過ぎてしまいます。ちょっと、後ろめたい思いがあり、それが官能性に結びついている気がします。



言葉の「意味するものやこと」ではなく、話し言葉なら音や声の大きさや質に、書き言葉であれば文字や活字の種類や形に敏感でありたいと願うと同時に、現にそうした言葉の側面に愛着をいだいている自分の性癖を感じます。

その半面と言うか、そのせいと言うか、「言葉の意味するものやこと」に注意を払わなければならない、言葉の操作が苦手です。具体的にいえば、論理的思考とか、筋道を立てて考える・話す・書くとか、話や文章に整合性を持たせるとかいう、一連の作業のことです。そうした行為に対する不信感は強いです。そうした行為を実践しなければならない場合には、苦痛を覚えます。

学校に通っていた頃には、感想文などの「さくぶん」と言われるものは、嘘をだらだらと書くことで切り抜けてきましたが、レポート・小論文・学術論文となると、かなり苦労しました。そうした文章を書くためのマニュアルを参考にして書いていましたが、信

じてもないことを実行するわけですから、今でも思い出したくない心の傷になっています。

言葉の物質性や、言葉の断片的あるいは表層的なレベルでの意味・イメージとたわむれているほうが遥かに快いです。圧倒的な偶然性に身を任せて、でまかせを並べているのが性に合っている気がします。

毎日四六時中、「言葉の物質性に触れていたい」という意味ではありません。そうした極端な話をしてはしません。言葉の抽象性と深くかかわることなしに、ヒトが日常生活を送れないのは言うまでもありません。フェティシズムは、ささやかに、密かに楽しむものだと思っています。

09.08.28 げん・言 -5-

◆げん・言 -5-

2009-08-28 09:48:54 | さくぶん



「わけがわからない」は「訳がわからない」と現在ではふつう表記されますが、語源を考慮すると「分けがわからない」と書いてもかまわないと思われまふ。また、慣用や語源を無視して、「我毛がわからない」や「WAKE がわからない」でもいいと思います。

「わかる・わかる・わかる・わけ」に当てることができそうな漢字には、「分・判・解・別・訳」などがあります。ひらがなと漢字を見比べてみると、ぼんやりとしたイメージのようなものが浮かんでくるというか、感じられます。

そのあいまいな感じを、「わかる・わかる・わかる・わけ」を漢字という手段によって「わけた」と言えるような気もしますが、言葉は何とでも言えるみたいなので、とりあえず、「わけない」状態と呼んでみましょう。

いかがわしく、うさんくさい話ですが、それはヒトのなすことすべてに言える属性で

すから、あまり気にしなくてもいいし、全面的に受け入れて居直ってもかまわないというふうに、ちょっと柔軟に考えてみませんか。



「わけない」状態は、「わかる」状態と大差ないとも言えるような気がします。「わかる」と「わけない」はほぼ同義であるとも言えそうです。このように、言葉のうえで矛盾した言い方になると、眉をしかめるヒトが必ずいるみたいです。

矛盾恐怖症とでも言ったらいいのでしょうか。「理屈に合わない」、「話の筋道が立っていない」、「論理的に破綻（はたん）している」、「つじつまが合わない」、「両立しない」といったフレーズが示す「言葉とイメージのありよう」に不安感や嫌悪感を覚えるみたいです。

個人的には、矛盾というのは、言葉というシステムを使う以上、避けられない状況だと考えています。



言葉・言語は、ヒトが「つくる」ものなのか、ヒトという種に「備わっている」ものなのか、「つくる」と「備わっている」の二面性で語るべきものなのか。ある程度の必然性や整合性や合理性があるものなのか、恣意（しい）的で偶然性やヒトを取りまく環境・状況に左右されるものなのか。

そうした問題については、知りません。いわゆる学問の世界でどんな議論が行われているかに関しても知りません。

言葉・言語が、何らかの仕組みが働いている体系という意味でのシステムだという気はします。ただし、「ヒトが使う」ものようでありながら、「ヒトに主導権がある」とは考えられません。ヒトに主導権があるとするなら、ヒトはこれほど極端な形で、言葉・言語に振りまわされてはいないでしょう。

誤解・曲解・伝達の失敗・思考上の誤謬らしきもの・再現の不可能性など、深刻な問題が日常的に、さまざまなレベルで発生しているようです。言葉・言語は、ヒトの期待を裏切る程度の欠陥品ではないか、とさえ思われます。



「わけない」状態、言い換えると、言葉を用いても世界・宇宙・森羅万象は「わけられない・わからない」状態を受け入れるわけにはいかない分野があります。

代表的な例を挙げると、自然科学と言えるでしょう。たとえば、ヒトを大気圏外の宇宙空間に送り込むためには、物理学、数学、天文学、化学、医学、工学をはじめとする、ありとあらゆる自然科学の諸分野の知識と技術が必要になると考えられます。

ヒトの代理のチャンピオンみたいな存在と化した、いわゆるコンピューターと、それによって制御されている多数の機械の集合であるシステムが、中心的な役割を果たしていることは言うまでもありません。かつて、ヒトは、仲間を月面に送りこみ歩かせるといふ計画を立て、実現したことがありました。この出来事によってヒトが得た満足感と誇りと自信は、大きなものだと思います。

月面着陸と宇宙空間での居住という、上述の2つの大きな出来事を達成するためには、「わけない」状態、つまり言葉・言語を使用することによって矛盾が生じる状態を受け入れるわけにはいきません。有効性と信頼性に欠けるからです。

「わかる・わかる」状態が不可欠です。「割り切れない」状態ではなく、「割り切れる」状態が求められると言ってもよさそうです。簡単な言い方をすれば、「 $1 + 1 = 2$ 」が常に成立する状態でなければならないという意味です。ときどき、「 $1 + 1 = 3$ 」が成立する状態では困るのです。

★

「わかる・わかる・割り切れる」状態が求められるのは、主にヒトがつくった機械やシステムが働いている場であると言えそうです。ヒトが、ある目的のために、「わかる・わかる・割り切れる」という矛盾の生じない仕組みをつくっているわけですから、その機械やシステムに矛盾が起きないのは当然だとも言えます。

機械はその目的を首尾よく達成するように作られている、ということでしょう。正確に言えば、そういう具合に働くようにヒトが作っているわけです。きわめて高い精度を備えた、矛盾のない状態や、必然性の支配する状態、整合性の機能する状態は、人為的な状態、つまりヒトが作った状態だという気がします。

一方で、世界・宇宙・森羅万象は圧倒的な偶然性に満ちているという気がします。ヒトが手製の機械の一種である計器を使って観測した場合には、世界・宇宙・森羅万象に必然性と整合性が「見える」こともあるでしょうが、「まばらな」必然性・整合性という感じがつきまといまいます。もちろん、あくまでも個人的な感想です。

★

「まばら」。興味引かれるイメージを喚起してくれる言葉です。「ま」「ばら」でしょうか。

「ま・ma」が気にかかります。

あーん、あーむ、まー、むあー、あーむ

「m・ん・む」と「a・あ」が出逢(=であ)った「ま」を目にすると、そわそわします。

★

気になったので「まばら・疎ら」を広辞苑で引いてみました。語源の解説らしき記述として、「間疎(=まあら)」の意」とありました。「ま・間・あいだ・あい・あわい」という、大好きな言葉が出てきたので、うれしかったです。

辞書を読むのが数少ない趣味の1つなので、家にあるいちばん大きな国語辞典である広辞苑をよく読みますと言うか、よく見ます。「正しい」対「正しくない」にこだわるとか、権威にすぎるとかいう気持ちはありません。言葉に遊んでもらう。たわむれてもらう。それが楽しい。それくらいの感じです。念のために、申し添えておきます。

ついでに「間疎(=まあら)」の「あら」の親戚らしい、「あら・荒・粗」も調べてみました。「あれはてた」「荒々しい」「こまやかでない」「くわしくない」「まばらな」「人工をくわえぬ」「かたい」という言葉が見えます。反対語として、「にき・和」が紹介されていたので、さっそく会(=あ)いに行ってみました。

「にき・和・熟」の項には、「おだやかな」「やわらかな」「こまかい」「成熟した」という言葉が顔を合(=あ)わせていました。「にこ・和・柔」が紹介されていて、「にこげ・和毛」と「にっこり」にまで遇(=あ)うことができました。

まさに、「わ・和・輪・環・羽・把・話」ですね。

「あう・合う・会う・遇う・逢う・遭う」と「わかる・わかる・分・判・解・別・訳」は、やっぱりつながっているらしいことが分(=わ)かりました。違ったところをうろうろしていたための錯覚かもしれませんが、加ま以ません。

言葉にも、機械にも、システムにも、ヒトの行動にも、ヒトの脳や諸器官・諸機能にも、誤作動は付きものみたいです。

★

「わかる・割り切れる」状態を仕組みとしてつくるという作業は、精緻をきわめるだろうと考えられます。誤りつまりエラーは許されないという意味です。許されるとしても、確率的にかなり低いものでなければならないでしょう。

とはいうものの、ノイズや、エラー、誤作動、原因不明の故障やトラブルを 100 パーセントなくすことは不可能なようです。不測の事態とか、天災と呼ばれているものも、ときとして起こります。

ヒトがつくる機械やシステムは、石器や土器の延長、つまり広義の道具の進化したものだと言っても良さそうです。石器や土器と機械やシステムとの違いは、複雑さと精密さだと思われます。

★

広義の道具の特性として、「非人称的で匿名的でニュートラル」が挙げられます。ヒトに深くかかわりながら、ヒトがコントロールできない自立した状態にあるという意味です。

ナイフとしての機能を持つ石器を例に取りましょう。この石器を使えば、動植物を切ったり、裂いたり、刺したり、皮を剥いだり、刻むといった、ヒトの手や歯だけではできない作業が可能になります。

ここで大切なことは、道具とヒトとの関係は、ヒトが主で道具が従であるとは言い切れない点です。ある機能を備えた道具を手にしたとき、ヒトはその道具に依存するとも言えそうです。いったんその道具を使うことを覚えると、その分だけヒトは、器用あるいは有能になると同時に、不器用あるいは無能になるとも見なすことができるように思います。

その道具があり、その道具を使用する限りにおいて、ヒトは器用さと有能さを身につけたという意味です。逆に言うと、その道具なしでは、ヒトは拡大した器用さと有能さを発揮できないのです。ヒトは、その状況を何かを「失った」と感じるだろうと思います。がっかりするということです。

★

ヒトは道具を「使う」対象、つまり従者・奴隷・家畜と同列に見なしていると考えられます。ここに、「使う」という言葉・イメージを共通項とした、「比喩の仕組み」が働いていると見ることも可能でしょう。

ヒトには、同じヒトという種である仲間も含め、自分以外の森羅万象を「使う」ことができるという「比喩の仕組み」が備わっている、端的に言えば、そうした「思い込み」が刷り込まれているような気がします。

でも、ヒトが「使う」対象に、「(ヒトによって)使われる」習性なり、仕組みなり、システムが備わっているかどうかは、ヒトには決定できないと考えられます。その対象とは、ヒトであったり、ヒト以外の生き物、自然物、人工物などすべてを指します。

ヒトが仲間を月に送り込む計画とその計画を実現するためのさまざまな機械やシステム(※人工物です)を例に挙げると、ヒトは機械やシステムを「使う」と同時に、それらに「依存する」状況にあるとも考えられる気がします。

機械やシステムは、「非人称的で匿名的でニュートラル」、つまり、ヒトに深くかかわりながら、ヒトがコントロールできない自立した状態にありますから、誤作動、故障、失敗と呼ばれる事態が起こる可能性をなくすことはできません。もちろん、精度と確率の問題と言えますが、その「精度」・「確率」という言葉とイメージでさえ、ヒトから自立した状態にあると考えられます。

いずれにせよ、ヒトが「使う」対象に「依存する」という状況は、たとえば言えば、真っ裸のヒトが、富士山のふもとの樹林で長く生きられないだろうという意味で、かなり信頼性のある話ではないかと思われます。

★

ヒトは、どのような「広義の道具」(※「表象」とか「シンボル」と言ってもいいでしょう)を用いようとも、「狭義の言葉」である話し言葉と書き言葉という「道具」(※比喩であることを注意してください)を最優先させて、その「広義の道具」について語り、その「広義の道具」を記述する傾向が見られます。

このさくぶんも、ささやかですが、そうした試みの1つを実践しているわけです。詳しいことは知りませんが、自然科学の領域では、数字や記号を使った「一種の広義の言語」も、「広義の言語一般」を論じたり、記述するのに用いられているようです。

「狭義の」であれ「広義の」であれ、「代理」でしかない言葉・言語を用いることで、「狭義の」および「広義の」言葉・言語について語り記述するのは可能なのでしょうか。

ややこしいですが、「言葉・言語で言葉・言語を語り記述する」、つまり、「道具・代理で道具・代理を語り記述する」という話をしています。

★

仮に圧倒的な偶然性に支配された森羅万象がごちゃごちゃぐちゃぐちゃしているなら、森羅万象の写像(※比喩です)である言語もごちゃごちゃぐちゃぐちゃしているのではないか。そんな気がします。

ただ、言語には、自らの「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」を「すっきり」に置き換えようとする「働き」があるという気がします。その「働き」こそが、ヒトの「正気」を維持しているのではないのでしょうか。そうだとするなら、「狂気」も、その反対だと考えられている「正気」も、ヒトにのみに当てはまる状態を指すとも言えるように思われます。

単純化すると、「狂気」「正気」とは、ヒトにとって意味を持つ考え方だとも言えそうです。この2つの言葉・イメージが、どういう関係性の下にあるのかについては、ヒトは決定できないという気がします。反対の関係だという意見が優勢だと想像されますが、個人的には、相対的とか、連続しているとか、見る側によるとか、見る側の状況によってもその判断は揺れ動いているという、イメージを持っています。

深入りすると危ういことになりそうなテーマだという気がします。

「危うさ」を回避するために、「わかる・わかる・割り切れる」という言葉・イメージを使うのは中絶し、「道具」・「代理」・「システム」・「有効性」・「記述」という言葉をキーワードに、「正気」「狂気」という考え方をつづってみました。結局、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃで終わりました。

これくらいで済んで良かったのかもしれない。



この惑星の他の生き物や、その存在がヒトによって認められていない、ヒト以外のいわゆる「知性」を備えた地球外生物にとって、「正気」というヒトの考え方が、ヒトがイメージしているだけの有効性を備えているかどうかを、観測したり確認したりする方法や手段が見当たらないことを、忘れるべきではないと思います。

それが、自分を含む、ヒトにとっての、そしておそらくヒトにしかできない「身の程を知る」という、たしなみだと信じています。

09.08.29 げん・言 -6-



あくまでも「仮に」つまり「仮定」・「もしも」の話です。自分が見聞きして覚えた言葉やフレーズがすべて「決まり文句」だったら、などと考えることがよくあります。

自分に意見とか考え、ことによると自由意志と呼べるものがないのではないか。何か、あらかじめ決められた仕組み、またはプログラムがあって、それに沿って思考し行動しているのではなないか。そういう意味です。

シナリオとは違います。シナリオというと、人生の筋書きみたいなものですから、運命や宿命みたいに自分の外の世界までが決定されていなければならない気がします。

そうではなくで、世界・宇宙とは関係なくというか、世界・宇宙・森羅万象の動きに応じて、自分の内部で生じる反応が決められているとか、パターンが限られていてそこから選び出しているという感じです。



ヒトにとって、言語が先天的に備わった「回路」あるいは「システム」みたいなものだという考え方が、言語学にあるそうです。だから、ヒトという種という共通項があれば、いわゆる民族や人種に関係なく、どんな言語でも母語として習得できるというのです。

語弊のある言い方ですが、「出来レース」みたいに、言語を用いる「仕掛け」が、生まれつき「仕組まれている」という意味にも取れます。そんなものなのでしょうか。そういうふうには、ヒトはできているのでしょうか。もしそうなら、不思議です。考えると、気が遠くなりそうに感じられます。



ヒトという種には、共通する身体的の器官と機能が備わっている。たとえば、循環器系とか呼吸器系とか消化器系とか、詳しいことは知りませんが、そういうシステムが先天的に備わっているという話は、小中高時代に習いました。

どうやら、そうらしいということは、からだの不調を覚えたり、病気になったり、手術を受けたりした経験から、体感できるような気がします。確かに各人固有の体質とい

うものはあるようですが、病院に行けば、ある程度レディーメイド化された治療を受けることになります。

身体のレベルでは、ヒトという種は大筋で「決まっている」し「共通している」みたいです。ただし、特異体質、身体および精神の障害、医学的意味でのいわゆる異常や奇形と呼ばれる身体上の状態があることを忘れてはならないことは言うまでもありません（※不快な気持ちをいだかれた関係者の方に、深くお詫び申し上げます）。

でも、言語というシステムが、先天的に備わっているという話は、体感しにくいです。こうやって言葉を使ってパソコンで文章を書いている、ぴんときません。きっと鈍いのでしょう。

もしかすると、ヒトには知ることができないかもしれないとか、知ってはならないことだ、という感じもします。



自分の生きている時代と社会が嫌でならない

ああ言われたら、こういう言葉を返す。それで人間関係がいちおう丸く収まったかのように思われる。ああいう場合には、こう言えば波風が立たない。でも、その段取りっぽさが嫌で、吐き気を催すほど苛立たしい。憂さ晴らしに、そういう言葉を集めてまとめて本にしてやろう。

そう思ったかどうかは知りませんが、そんなふうにも感じられる本を書いたフランスの作家が19世紀にいたという話があります。その本が残っていて、日本語にも翻訳されて、大学生の時に読んだ覚えがあるので、たぶん、本当だろうと思います。



個人的な経験を述べますと、小説を読むのが苦手で、ストーリーも登場人物もなかなかあたまに入らないために、学生時代にずいぶん苦勞しました。それなのに文学部の文学科に在籍していました。実は哲学を勉強したかったのですが、親の大反対にあったため、妥協みたいな形でそうなったのでした。

哲学なんか勉強をすると自殺をするか、卒業後に路頭に迷うだけだ。そのように、親は考えていたみたいです。仕方なく、哲学みたいなことも勉強できそうな外国文学科に入りました。

というわけで、その紋切型事典とかいう本は、学生時代に読んだ記憶はありますが、

内容はほとんど覚えていません。痛烈な風刺文学だと言われていました。あれって小説だったのでしょうか、辞書みたいなものだったのでしょうか。調べれば分かると思いますが、億劫なので調べそびれています。

★

本を読むのが苦手なので、タイトルや目次を読んで、内容を想像してでっちあげるという作業を、学生時代によくしていました。今でも、その傾向が続いています。というか、本をじっくり読まずに、または斜め読みし、全体の内容を勝手にまとめて想像するという作業は好きです。性に合っているのか、楽しいです。

ただ、小説のある箇所を、辞書を引くみたいに部分的に読む。そこだけを、丹念に舐めるようにして何回か読む。そういうことは、ずっとやっています。全体より部分というか細部が好きです。断片であってもかまいません。まとまりは求めていません。

★

全貌をつかみたいという思いは希薄です。ひょっとするとないのかもしれませんが。というよりも、経験上、自分には全体がつかめそうもないので諦めているのかもしれません。

新聞の紙面の下にある、書籍の広告を見るのも好きです。書名に、短い説明というか宣伝文句が添えられていますね。タイトルと解説を見比べながら、あれこれ妄想するのは。書評は好きではありません。詳しすぎるのです。タイトルとキャッチフレーズだけで、けっこう楽しめます。

辞書を読むのも好きです。断片的なものが好きなののでしょうか。思い出しましたが、映画も苦手です。長すぎるのです。ただ映画の予告編は大好きです。短くて迫力があって、わくわくします。ストーリーを追ったり、登場人物の人間関係にあたまを悩ます必要はありません。そこが好きです。

★

もしもヒトにとって、自分が見聞きして覚えた言葉やフレーズがすべて「決まり文句」だったら。

広告にそんな言葉が添えられている本があったと仮定してみます。タイトルは、「紋切型としての世界」という感じでしょうか。その本には、たとえば、次のような言葉がたくさん集めてあるのではないかと想像します。

一般に決まり文句とかステレオタイプ化された言い回しとされている、「頭をかかえる」・「目が点になる」・「口を出す」・「〇〇を血や肉とする」・「身を粉（こ）にして働く」・「もう、死にそう」・「健康第一」・「環境にやさしい」・「血税」・「清き一票」・「カラスの足跡」・「〇〇を見ると（聞くと）癒やされるよね」・「〇〇って天才だよ」・「――（笑）」・「――汗」・「～と思われる」・「～と言えそうです」

言葉だけで知っていて、うまく説明できそうもない、「先進国首脳会議」・「〇〇民主主義人民共和国」・「ＱＯＬ（※生活の質）」・「グローバル化」・「見える化」・「カリスマ性」・「スピリチュアル」・「男」・「女」・「こども」・「おとな」・「成熟」・「ＩＴ」・「自虐史観」・「エコ」・「ロハス」・「地球温暖化」・「義理」・「親友」・「幸せ」・「人権」・「平和」・「ニート」・「お金」

よく考えると決まり文句かなという気もする、「頑張る」・「お腹がぺこぺこになる」・「元気を出す」・「お元気ですか」・「おめでとうございます」・「ありがとうございます」・「さようなら」・「うっそー」・「よかったね」・「いただきます」・「ごちそうさま」・「お名前は？」・「わかった、了解」・「お願いします」・「かわいいお子さんですね」・「お手洗いは借してもよろしいですか」・「いつも大変お世話になっております」

今挙げた例は、人によっては異論もあるでしょうが、たとえば、英会話を習う時などには、こうした言い回しが「決まり文句」とか「会話によく出てくる単語」とか「一口〇〇語会話」みたいに扱われているさまを見ると、ほかに言い方が思いつかないから、「条件反射的に使っている」という意味で「決まり文句」の一種と見なせるような気が個人的にはします。

以上の考え方を拡大すると、「ああ、喉が渴いた」・「うちの犬は、よくほえる」・「あなたのことが好きだ」・「ちょっとケータイ貸して」・「職業は会社員です」・「うるせーなあ」・「おれ、今から会社」・「大関の名に恥じないよう」・「ビッグマック２個ください」・「あっ、雨だ」・「お腹が痛い」・「これからも、〇〇校の卒業生であることを忘れず、今後一生懸命に人生を歩んでいくことを誓います」・「暑いなあ」・「気持ちいい」などまでが、決まり文句に感じられてくるのは、自分だけでしょうか。

話は、それだけにとどまりません。「 $1 \text{ (E } 0 = 0)$ 」・「地球は太陽の周りをまわる」・「1日はほぼ24時間である」・「日本の人口は約1億2千7百万人だ」・「日本の首都は東京だ」・「1603年、徳川家康が江戸幕府を開いた」・「水素を燃焼させると酸素と化合して水が生じる」・「トロントはカナダの中部にある」・「光は波動と粒子の二面性をもつ量子である」・「きょうは水曜日だ」というのも決まり文句ということになりそうです。



自分で確かめたことがない、あるいは観測や知覚することができない物・事・現象は、

言葉として知っているだけですから、決まり文句だと言われると説得力を感じてしまいます。

そう思うと、自分の話していることや書いていることの90%以上（※この数字は個人的な印象でしかありません）が、「言葉として知っているだけの決まり文句」だという感じがします。屁理屈だと言う気がしても、その屁理屈を否定する自信はまったくありません。

ひょっとして、いわゆる屁理屈とは、ヒトが論破できない理屈に対する悪態とか罵倒なのではないかという気がしてきました。心もとないです。

★

「あの本、読んだ？」「うん、痛烈な風刺文学だね」

紋切型事典が風刺だというのは、ひょっとして、こういう意味なのではないでしょうか。たとえば、ある本を読んでもいないヒト同士のあいだに、そんな感じの会話が成立してしまうことに、今、ふと気付きました。

「きのうの夜10時からやってた「〇〇」見た？」「見た、見た。涙、涙って感じだったよね」

「地球温暖化だって」「何とかしなくちゃね」「うん、環境にやさしくしよう」「同感」

内容はよく覚えていないのですが、19世紀にフランスの作家が書いたという、紋切型事典。それは、以上のような思考停止状態に等しい決まりきった会話に対する風刺だとも、取れそうです。

そう考えると、すごい風刺ですね。

こんな具合に、その作家の風刺の対象にやすやすとなってしまいました。まさに「してやられた」という紋切型の状況です。

★

決まり文句は、人間関係を円滑にする側面も持っているように思われます。

「いい天気だね」「そうですね」

こうした会話には、文字通りの意味はなく、相手と言葉をかわすことで緊張感をやわ

らげる、話のきっかけを作る、当たり障りのない言葉のやり取りで「同意」という友好関係維持のための儀式のリハーサルを行う、といった働き・機能がある。そうしたたぐいの話は、人間関係をテーマにしたいろいろな本に書かれています。

「雨だ」「嫌だね」

これもよく交わされる会話ですが、農業に従事しているヒト同士だと、雨続きの場合に限られ、日照り続きの状況では、違ったものになるはずです。

「雨だ」「よかった」

こんな感じではないでしょうか。

いずれにせよ、ある言葉やフレーズが発せられると、それに対する決まった言葉やフレーズを返すという約束事、大げさに言うと掟（おきて）めいたものがあるようです。

その約束事や掟に外れた言葉を返すと、白い目で見られたり、偏屈だと思われたり、仲間はずれにされたり、敵とみなされたり、シカトやいじめの対象にされてしまう。そんな状況を経験したり、見聞きすることは数知れないと思います。

★

日常生活を送っていると、決まり文句はどんどん固定化されていくような気がします。ルールに外れた言葉を発したり、返したりすることを、自粛するようになる感じもします。自主的な言論統制と言え、言いすぎでしょうか。

いわゆる社会生活において、そうした自粛が広がれば、これはやっぱり、自主的な言論統制であり、言論弾圧だと言ってもいいような気がします。政治・経済・宗教・信条・時事問題について、自分の思うことが自由に言えない状況なのですから、そう言わざるを得ません。

その意味では、決まり文句は、恐ろしい側面があり、ファシズムや全体主義への芽でもあると言えそうです。

★

赤ちゃんの場合を考えてみましょう。「赤ちゃん」から「幼児」と呼ばれる時期には、ヒトは驚くべき速さで言語を習得していくと言われています。習得することを、「まなぶ」と言い、「まなぶ・学ぶ」は「まねぶ」つまり「まねる・真似る」と語源がいつしよだという話は、よく知れているようです。つまり、紋切型です。

赤ちゃんが言葉・言語を発明するわけではなく、「真似る」つまり「学ぶ」。こういう話は、比較的容易に理解できると思われまふ。そうした「真似る・学ぶ」は一生かけて続けると言えるような気がしまふ。

これまでの自分と現在の自分の状況を考えると、よけいにそう感じられます。毎日どころか、一刻一刻が「学ぶ」の連続だと言っても誇張ではありません。

たとえば、今、こうやってさくぶんをしているわけですが、考えているようでもあり、これまで見聞きした語、語句、フレーズ、言い回し、センテンス、文章、イメージ、考え方、話の筋の運び方、言葉遣い、文体、漢字の使い方、漢字とひらがなの量的なバランス、段落の分け方など、すべてにおいて、「思い出して、借りている」という気がしまふ。「借文」という言い方もありますね。

たとえて言えば、パッチワークというのでしょうか。個人的な感想なのかもしれませんが、そう感じています。

実は、ヒトの言語活動をはじめとする、ありとあらゆる行動が、パッチワークであるという比喩は、何かで読んだ記憶をもとに書いた「真似」です。「個人的な感想」ではありません。嘘をついて、ごめんなさい。万事が、こんな感じなのです。

独創性、つまりオリジナリティなんてかけらもありません。少なくとも、自分に関してですが、そう思っています。これも、以前に読んだか聞いたことの受け売りであることは言うまでもありません。

★

「引用」、つまり「真似・受け売り」、そして「比喩・たとえ」、つまり「こじつけ・話のすり替え・代理の使用」をしないで、ヒトは生きていくことはできないようです。

論文や文章の書き方のハウツー本で、「事実と意見を分けよ」とか、「伝聞は、出典を明記せよ」とか、「ありのままに書く」とか、「描写に徹する」などと書いてありますが、厳密には無理だという気がしまふ。「そこそこ」やりなさい、というふうに暗黙の了解みたいなものがあるのでしょうか。そのように受け取るべきなのかもしれません。

あの種の本に詰まっている、威勢のいい数々のフレーズも、やっぱり、たぶん何かからの受け売りだったのであり、いわば思考停止状態で書いたわけなので、深く受け止める必要はないという気もしてきました。本気にするのはやめまふ。

★

ヒトは、ある時点までに「真似る・学ぶ」という形で蓄積した言葉の断片や、言葉の使い方のパターンを、あたまという倉庫（※比喻です）から取り出しながら、組み合わせたり、そのまま用いたり、変形させたりしながら、狭義の言語および広義の言語を使用していると言えば、言いすぎでしょうか。

大雑把で飛躍した言い方かもしれませんが、次のようにも考えられる気がします。

ヒトは、同じ言語を使用する、ほぼ同年齢で、ほぼ同じような環境で生きてきた他のヒトたちと同じような言葉の使い方や考え方をする。もちろん、変形や逸脱もある。

あるヒトが、考えたり、イメージしたり、妄想したり、話したり、書いたことは、既に、および、どこかでほぼ同時に、他のヒトたちによって、考えたり、イメージしたり、妄想したり、話したり、書いたりされたか、されつつある。

★

発明や進歩や発見は、偶然性の産物だという気がします。たとえば、物理学や化学のいわゆる「新理論」が、世界にニュースとして広まった場合には、然るべきヒトが然るべき時に然るべき状況の下で、その考えを「組み合わせた」あるいは「加工した」からだと言えないでしょうか。

「然るべき」とは、「偶然」と「幸運」をミックスしたような言い回しだと思います。「必然」と近いようで、隔たっている気がします。そもそも必然とか必然性は、偶然とか偶然性が先あって、その後に慌ててヒトが付け足したという印象を強くいただいています。

いずれにせよ、「然るべき」は、きわめていい加減な響きを持った言葉に感じられなくもありません。お役人や官僚や政治家が好んで使っているのも、よく分かる気がします。

★

オリジナリティが疑いのないものとされている領域があるらしいことは感じています。

ある小説や曲や学説や教祖の教えを例に挙げて、これとそっくりな、あるいはよく似たものがあるのかと問われれば、2つの意味で困ってしまいます。

1つは、それを調べる方法や手段を個人的に持っていないという点で、首を横に振る

しかありません。降参したという意味です。ちなみに、議論は苦手なので、すぐに降参するようにしています。

2つめに、小説にしろ、曲にしろ、映画にしろ、学説にしろ、教えにしろ、いわゆるメジャーで、社会や世界の数多くのヒトに知られているものは、氷山の一角に過ぎず、いわゆるプロではないヒトたちの口にしたお話や言葉の断片やフレーズや口ずさんだ旋律というレベルでの、過去から現在にいたるすべての「小説」「曲」「映画」「説」「教義」まで検証することは不可能だと思われるからです。誰にも確かめられないという意味です。

ただ、たとえば小説の場合は、言葉で書かれていますから、どんなに長くても「分ける」ことができます。語、語句、センテンス、使用されている言い回し・熟語・比喩、仮名遣い、表記という具合に区切ると、「同じ」、「ほぼ同じ」、「似ている」部分が、あちこちに見つかるはずで。たった今書いた「です」「はず」「見つかる」「あちこちに」だけでも、今朝配達された新聞のなかで何回か使われていると推測できます。

あとは、そうしたパーツの組み合わせと、どの程度の長さを単位とするかの問題でしょうか。こんな感じの文学作品の分析について書かれた本を学生時代に読んだ記憶があります。同様の分析は、映画や音楽でもできるみたいです。詳しいことは忘れしました。

★

音楽の世界では、よく「パクリ」だ「いや、そうじゃない」といった議論が聞かれますね。言葉も、よく考えるとあんな感じです。でも、あんまり、ヒトは言いません。

盗作問題までに発展しないレベルでの、日常的な「似ている」「そっくり」「まったく同じ」という言葉やフレーズや文章の話です。いわゆる「コピペ」がやりやすくなった環境も、大きく影響している気がします。

「物語（説話）の構造分析」や「(芸術作品における)引用」、「ロシア・フォルマリズム」、「ブリコラージュ」という考え方を、大学生だった頃に見聞きした覚えがありますが、その辺の言葉やイメージや話に詳しい人であれば、おそらく、もっと気の利いた説明ができるでしょう。

★

確か物理学者、それも理論物理学と言われる分野の学者だったような記憶がありますが、最先端と言われる理論か学説を唱えていた人が、インド哲学か仏教の経典のなかに、自分の考え方とそっくりなものを見つけたとかいう話を思い出しました。

うる覚えなので、正確なことは書けないのですが、そういう話があるとするなら、ヒトの考えることには、「経路」というか「線路・回路」みたいなものがあるような気がします。

決まり文句といい、決まった筋のある話・説や、決まったパターンのあるイメージといい、ヒトは一種の出来レースをやっているという感じがしてなりません。発明とか、発見とか、独創性とか、本物とか、「わたしが先」、「わたしだけのもの」という発想は、もしかすると幻想かもしれないように思えます。

でも、それが幻想かどうかを確かめる方法も手段も、ヒトにないことは確かだと言えそうです。今のところはタイムマシンも発明されていないし、無文字社会も含めてありとあらゆる国、地域、共同体に属しているヒトたちの、広義の言語を記録したものも、存在していないみたいだからです。「検索」は不可能みたいです。

オリジナリティなどという、欲張った考え方をするのは、やめませんか。

★

ヒトは、あらかじめ決められている、つまり、お膳立てされている、またはプログラムされているものしか知覚したり意識することができない。

ヒトは、知覚器官やシナプスや脳が情報として受信・伝達・処理できるものしか、知覚したり意識することができない。

もし、今の述べた2つのフレーズがシステムとして、ヒトに備わっているとすれば、自分が見聞きして覚えた言葉やフレーズがすべて「決まり文句」であると言えるような気がします。

ヒトにとって、広義の言語は、すべてが「決まり文句」（※比喩です）、あるいは定型化されたもの、または「既製服」（※比喩です）である。

ここまで言ったら、やっぱり言いすぎですよ。一步譲って、「仮に」つまり「もしも」の話ならと言っても、言いすぎだという気もしないわけではありません。

ところで、たった今書いたフレーズは、何に書いてあったのでしょうか。記憶をたどってみます。

大切なことを忘れていました。ヒトは、すごく忘れっぽい生き物なのです。すっかり忘れていました。

09-08-31 げん・言 -7-

◆げん・言 -7-

2009-08-31 09:27:30 | さくぶん

★

決まり文句や紋切り型という言葉を意識したり使用することなく、ヒトは、紋切り型の言葉遣いや物の考え方をしがちな状況にある。そんなふう感じてきた人は多いようです。

アメリカ文学の話ですが、アメリカ社会で言葉が無意識のうちに統制されているのではないかという強迫観念みたいなものがあって、それが一連の文学作品のモチーフになっている。そうした内容の批評を、大学生時代に読んだ記憶があります。アメリカ文学の底に、そんな空気というか感情が流れているという話は、上述の批評を通してだけでなく、ほかの場でも聞いた覚えがあります。

日本においても、今述べた一種の被害妄想的な強迫観念とは、たぶん違った形で、紋切り型への反発というか抵抗があったし、現在でもあるような気がします。

★

あたまにあるのは、明治という時代です。鎖国状態が解かれ、明治維新、文明開化という大波がこの国に起こったらしいことは、中学・高校時代に学校の歴史の授業で習いました。国語の授業でも、習いました。

大雑把なまとめ方をしますと、開国後、欧米に追いつくために、欧米の文化や技術をせっせと取り入れる過程で、言葉、つまり日本語を変えざるを得なかったということです。文化や技術は言葉とセットになっていると考えられます。

新しい国家のもととなる、法律をはじめとする諸制度、行政のノウハウ、産業に必要な知識・科学技術。こうしたものは、書物・書類や、いわゆるお雇外国人の口頭による

伝授や指導という形で、この国に流入してきたにちがいありません。

当時、お雇外国人が日本人相手に使っていた教科書は、欧米で出版されたものだったそうです。授業もその欧米人の言語で行われたわけですから、その頃の日本のエリートはバイリンガルにならざるを得なかったそうです。

明治、大正、昭和と進むにつれて、バイリンガルエリートともいべき人たちは少なくなり、日本人の外国語力は低下した。学ぶべき知識が、日本語で得られるようになったのですから、当然ですね。留学して帰ってきたバイリンガルエリートたちも減っていったみたいです。

★

文化の流入に伴う言葉の変化について、思いつくままに並べてみます。

翻訳および翻訳語、古い言葉の借用・復活、造語・新語、言文一致運動、従来のスタイルにとらわれない話し言葉と書き言葉の創出。

こうした言葉の変化なしに、新しい文化を取り入れることは不可能だと考えられます。何が起こったのでしょうか。ここからは、今までに見聞きしたことの組み合わせによる、でませになることをお断りしておきます。素人の不正確な記述になるのは必至ですが、自分なりに思うところを書いてみます。

開国前は、かなり長い間にわたる広義の紋切り型が、広義の言語、言い換えると、話し言葉、書き言葉だけでなく、衣食住に関するしきたりや風習、政治経済的レベルでの掟、身分制度、社会生活をいとなむ上での約束事や決まり、つまり定型化したシステムが存続していたと考えられます。文化や価値観と呼ばれているものとも重なる部分があるでしょう。

これに匹敵する規模の大きな変化は、よく言われるように、敗戦後のこの国が、米国の占領下でこうむった変革でしょう。これは多分に思想および言論統制的な色彩が濃かったものと想像されます。

★

明治時代に提唱された、写生文という言葉思い出しました。それと連想して、つづり方という言葉もあたりに浮かびました。詳しいことは知りませんが、次のようにイメージしています。

決まりきった文章の書き方があった。それは、描写や、自分の思いを表現するという

より、これまでに蓄積された膨大なサンプルから、自分が描こうとする物・事・現象・状態を表すためにお膳立てされたパーツを引用して、組み立てるという作業に終始していた。

たとえば、明治維新以後も、手紙や公文書を書く場合には「候文（そうろうぶん）」とかいう形式があったらしいです。また、和歌や俳句の世界は、規則でがんじがらめみたいだったようです。

写生文から話を広げると、当時は次のような変動があったようです。

新しいものが欧米から次々と入ってくるのに、それを言い表す言葉がない。めまぐるしい変化の中で、ものを言おうとしても、その言い方にコンセンサスがない。過去からある漢語を無理に当てはめようとするヒトもいれば、何やら勝手に言葉を作っているヒトもいれば、やたら欧米の言葉を使うヒトもいる。英語びいき、仏語びいき、独語びいきなどがいて、わけがわからない。

忘れてならないのは、国家が学校教育を制度化したという大事業です。寺子屋の国営化みたいなものでしょうか。もちろん、私学もあったようですが、規模では国にかないません。頂点には、帝国大学があり、各種の分野にわたってエリートを養成するという急務があったのです。

単なる思い付きですが、「学校令」が発せられ、定着し始めたあたりから、「共通語」や近代における「つづり方」という考え方が出てきたのではないのでしょうか。

★

戦前は、軍部主導の全体主義による統制が、言論だけでなく、生活の隅々にまで染みこんでいたと聞きます。英語は敵性語だから使えない。他人と変わったことを言ったり書いたりすると、共産主義者や、売国奴というレッテルを貼られ、特高（※特別高等警察）と呼ばれる、恐ろしい官権の一組織によって半殺しの目に遭う。検閲は当たり前。国民みんなが互いに監視し告発し合うシステムが出来上がっていた。

それがひっくり返った。外圧により、さまざまな領域で、古い体制がぶち壊された。驚くほど、抵抗は少なかったと聞いています。

明治維新後と敗戦直後をいっしょくたにして、いかにも素人らしい粗雑な話の展開をしていますが、勉強不足なので、それくらいしかイメージできません。

とにかく、時代が変わりつつあった。言葉が時代に追いつかなくなってきた。話し言葉も、書き言葉も、それまでの決まり文句では表現しづらくなってきた。そんな感じで

はなかったかと想像しています。

従来の言葉遣いや、文章のつづり方は、封建的で民主的ではないし、個性を尊重するものでもない。定型を破ろう。決まりきったやり方に反抗しよう。伝統に従い、しがらみに縛られるのではなく、新しいものを作ろう。

かなり大雑把で杜撰（ずさん）なまとめ方だと思いますが、個人的には、そんな感じで、明治と敗戦直後に起こった大きな転換と、「話し方と書き方の変容」をひっくるめて受け止めています。

「話し方と書き方の改革」では、「書き方の改革」のほうに大きな力点が置かれていたものと想像されます。何と言っても、文書の力は強いです。保存がきくし、忠実な複製が可能です。伝達という意味では、話し言葉より書き言葉のほうが、はるかに優れた手段だろうと考えられます。

明治の場合には、大変動の時代を経て、現在使われている日本語に近いものができた。戦後の場合には、ある程度完成していた、つまりそのまま使っても大丈夫な方法を少し変えるという形で、一種の「置き換え」が行われた。そのような大まかな構図をあたまたに描いています。もっともらしく、うさんくさい話です。

外圧によって「やむを得ず」行われた変革らしいという共通点が、興味深いです。

★

かつて小説家を志したことがありました。その時に、心がけたことがありますので挙げてみます。

なるべく紋切り型の表現を使わない。比喩（※直喩という意味です）を極力使わない。視点を固定させる。説明ではなく描写に努める。修飾語はできるだけ削る。接続詞は使わない。詩ではなく散文を。

確か、以上のようなことを紙に書いて、ときどき読んで、肝に銘じていました。もちろん、上のルールは地の文に関してのもので、会話の文に関する制限は設けていませんでした。

今振り返ると、恥ずかしいです。そんなことできっこない、と思います。でも、その時はそれなりに真剣だったのです。

★

客観的な描写など不可能だということぐらいは承知しているつもりでしたが、「描写」という言葉とイメージにはこだわっていました。曖昧なイメージです。

作家を志したとき、当時のある新進作家の文体をお手本にしていました。美大を中退したヒトでした。デッサンなどを勉強した経験があるためか、文章の書き方も視覚的で、しかも正確に思え、描写がうまい書き手だという印象をいただいていた。

その作家に一足遅れるかたちで、デビューした作家がいます。2人はたまたま苗字が同じで年齢も近いために、よく比較されます。2人のうちでは、自分は先にデビューした作家の文章のほうが好きです。

「○○のようだ」「○○みたいに」といった直喩のうまさ、流行っていた時期でしたが、個人的には、そういう書き方には興味はありませんでした。できれば、そうした表現を避けて描写したいという気持ちのほうが強かったです。

紋切り型の言い回しや、直喩という通じやすいイメージに頼る書き方に抵抗を感じていました。あの頃、何を考えていたのか、よくは覚えていませんが、「散文」という言葉を意識していた記憶もあります。辞書的な、韻文に対する散文という意味ではなく、定型に頼らないというか、定型にはまらない書き方を模索していたさいに使っていた言葉のようです。

描写を突き詰めて考え、それを実践しようとするには、そうとうな困難が伴うようです。



21世紀に入り10年が経とうとしています。現在も、かなり大きな変動の時代にさしかかっているような気がします。インターネット、ケータイの出現により、書き方、話し方というレベルで、変化が起こりつつあることは確かでしょう。

今、その変化の真っ只中にいるわけですが、その中にいるために、かえって見えなかったり感じ取れなかったりすることが、たくさんあるのではないかと思います。

流行語、若者語、主にパソコンを使用してのメール独特の表記や記号の使用や言葉遣い、ケータイに特徴的な言葉遣いやメールの利用の仕方、広義のネット社会で特に用いられている表現法。こうしたものは、新しい「決まり文句」・「定型」・「紋切り型」の登場だとも言えるし、めまぐるしく変わりつつある動態の過程のさなかにあるとも言えるような気もします。

自分が偏愛する、つまり自分にとって居心地のいい、あるいは、そうしないと仲間は

ずれにされる恐れのある表現形式がある。一方で、「我が道を行く」式の人もいるでしょうし、また、何かの共通項でむすばれたさまざまな集団があり、その集団独自の表現形式がある。そうした多種多様な表現形式が共存している時代が、現在であるとも言えそうです。

もしそうであれば、「自分にとって快いもの」と「自分にとって不快なもの」と「どうでもいいもの」が無数にあって、それがにらみ合ったり、無視し合ったり、争い合ったり、一方的にどれかがどれかを攻撃したり、どれかが自然消滅したり、どれかが抹殺されることもある。そんな混沌とした状況なのかもしれません。

以上は、あくまでも、個人的な印象であり、妄想とも言えるものです。

★

決まり文句・紋切り型に対する反発として「異化」があるのではないかと考えています。「異化」はさまざまな領域で、いろいろなヒトが、いろんなことを言っています。そうした語義は、辞典や事典にお任せするとして、この言葉に関する個人的なイメージで話を進めてみます。

「異化」とは、ある定型、つまり紋切り型に対して、たとえば「揺さぶる・誤用する・文脈をずらす・源や過去の形にもどってみる」といった方法で臨む姿勢および働きかけである。そんなふうを考えています。

「異化」は、場合によっては、驚き、恐怖、怒り、笑い、悲しみなどをもたらします。ある物・事・現象・状態に見られた常態が、変わるわけですから、当然のことながら、ヒトに何らかの感情を引き起こします。

姿勢や働きかけのほかに、仕組みやシステムであるとも言えそうです。

★

見慣れたものが見たことのないもの、あるいは異形（いぎょう）のものに見えてくる。

そんな説明の仕方も、「異化」の定義としてあるみたいです。その説明で連想するのは、顔です。

難聴者であるせいか（※先天性の難聴ではなく、中途難聴です）、人の顔というか、表情を読もうとする傾向が強いみたいです。言葉を話し言葉・書き言葉だけに限らず、広義の言葉・言語にまで広げて考える傾向があるのも、そうした事情が影響しているかも

しません。ですから、表情も広義の言葉として受け取っています。

たとえば、「顔をうかがう」・「顔を見る」・「顔を読む」というほぼ同じ意味の決まり文句がありますね。個人的には、とてもよくわかる慣用句です。

顔をうかがおうとしても、化粧が濃すぎて読めない。これじゃあ、顔色（がんしょく）なし。

つまらない駄洒落を書きましたが、これも一種の「異化」でしょうか。いや、「異化」以下ですね。ま、いっか。

こんな感じで、以前のブログはやたらくだらない駄洒落を飛ばしていました。今は抑えています。ふと思ったのですが、駄洒落というのは、「異化」の一種だと言えそうな気がします。いかがなものでしょうか。



「異化」を意識的に用い、作品を書くさいの戦略としている書き手もいます。知っている例を2つ挙げてみます。

日本の職業作家にとって最大の名誉と言われる文学賞を学生時代に受賞し、20世紀の終わり頃に、世界で最大の名誉とされる文学賞まで手にしたヒトがいます。一般的には「読みにくい」と評される小説を書いていたヒトですが、あまりも日本国内の評論家の「読み」の水準が低いと感じたらしく、自らの作品を自ら批評するような本を出したことがあります。そのなかに「異化」という言葉が使われていた記憶があります。

もう1つの例は、これまた「読みにくい」とか「難解」というラベルを貼られがちな作品を書くヒトです。この書き手も、上で触れた日本の文学賞を取りました。そのヒトの作品のなかに、「イカ・異化」という言葉が直接的に出てくるものがあります。「ま、ま、いっか」とほぼ同じレベルで、言葉とたわむれていると、個人的には感じました。

ところで、今挙げた例では、作家とも呼ばれるヒトの名前が出ていません。数々の先入観や偏見や決まり文句に付きまとわれ、必要以上に強い意味とイメージを放つ性質を持った固有名詞は、なるべく使わない。そうした方法というか戦略があって、故意に名前は出さないようにしているからなのです。

固有名詞を用いないで、あえて言葉を積み重ねるという「描写」に似た書き方は、ある意味で「異化」と言えるような気がします。上記の書き手の氏名に心当たりのある方は、その氏名が使われた場合と、使われていない場合に受ける、印象・イメージの違いについて、比較なさってみるとおもしろいかもしれません。

★

以前のブログでは、駄洒落に加えて、○○=△△=□□=㊦㊦という具合に、言葉をやたら「=」でつなぐ書き方を、さかんにしていました。乱暴です。これは、意味の固定化と断定や、話が一方に流れるのを避けるという戦略でもあったのですが、一種の「異化」とみなしてよさそうな気がします。独りよがりの不発ギャグとも言えます。

あるとき、読者の方からご指摘というか、読みにくいという趣旨のお叱りの言葉をメールで頂戴し、弁解めいた記事を書いたこともありました。お恥ずかしい限りです。

その文体は現ブログでは、自粛していますが、万が一興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、このブログの過去の記事をのぞいてみてください。過去に書いた言葉たちも喜んでくれると思います。

★

言葉はいとしいです。

自分が書いた言葉であろうと、誰かが書いた言葉であろうと分け隔てはしません。「言う」と「書く」という行為において、「主語」は大切ではないと思います。「書く主体」という意味での「主語」です。

母語にあるどんな言葉であろうと、母語ではないどんな言葉であろうと、尊いと思います。

言葉は、なぜか「ある」のです。なぜか「出る」のです。不思議でいとしい存在です。

そう思います。そう思わない人の意見も尊重したいです。言葉をめぐって敵対するのは嫌です。だいいち、悲しいですもの。

★

顔には表情というものがあります。これが、自分にとっては、とても大きな意味を持っています。耳が遠い分だけ、他のヒトの顔にあらわれると言われている感情や気持ちや気分といった微妙なものに、神経をとがらせる傾向があると、自分でも感じます。

他人様（ひとさま）の顔をじっと見ることは、不躰で失礼になりますから、ときには盗み見るような形にもなります。そんな自分に嫌悪感を覚えることもあります。

人の顔にあらわれる感情を察しようとする、かなり緊張しますから、肩が凝り、ストレスにもなります。自分の場合には、常に耳鳴りがしているのですが、肩が凝ると決まって耳鳴りが強くなります。頭痛もしてきます。



表情というのは、人により癖というかパターンがあるみたいで、よく知っている人の表情は読みやすいです。苦勞するのは、初対面のヒトや、頻繁に会わない人を相手にする場合です。

でも、人の顔を観察するのは、おもしろいです。顔には、目、口、鼻、頬、額、髪、眉、耳、あご、顔の色や赤み、肌の艶、お化粧の具合、お化粧の乗りといったさまざまなパーツや要素があります。目だけでも、目くばせ、目つき、白目の充血ぐあいなど、奥は深いです。

顔だけでなく、仕草、動作、身ぶり、格好、服装、体を動かす速度、歩く速度も、いろいろな信号を送ってきます。「かもし出す雰囲気」という決まり文句がありますが、そうした言葉にしにくいものも確かに感じられます。

さきほどパターンという言葉を使いましたが、ヒトの全身にはパターンというより、「文法」という言葉にたとえてもいいような規則性みたいなものがあります。でも、これは一定したものではなく、「読みが外れる」ことはしょっちゅうあります。



ヒトはロボットではありません。一定の法則で決めつけようとするのは無理なようです。

性懲りもなく、再び、「文法」という比喩を使うなら、文法にそって言葉を使っているヒトなどいません。同様に、「文法」にそって動いているヒトもいません。

ヒトが使っている多義的な複数の言葉や、ヒトが動きや姿という形で発している多義的な複数の信号（※この信号も広義の言葉・言語だと思っています）から、「文法」がまぼろしとして立ちあらわれるというのが、正確な言い方かもしれません。

まぼろしは、一定だったり一様だったりするものではありません。見るヒトによっても異なる。そんな感じではないでしょうか。



文法というのは、まぼろしであるという意味で、うさんくさいものだと言えそうな気がします。幻想だからこそ、ヒトをとらえて離さないという面もある感じがします。

文法を権威が捏造する場合もあると思います。実際、ヨーロッパにはそれに近い形で、「文法が決められている」言語と国家が存在しているようです。中華思想という言葉と結び付けられることのよくある国です。

一方で、文法は、ヒトの思惑とは無関係にある（＝存在する）。なぜか知らないけどある（＝存在する）。そんな印象の言語や国家や地域がほとんどです。この国も、そのうちに含めてよさそうです。

文法というものがあるとするなら、それは「破る」ためにあるのではないかと考えています。仮に破っても、すぐに「回復する」性質があることも、忘れてはなりません。

「回復する」といっても、完全に原状にもどるのではなく、その時代や、その時その時の状況が要請する形態や様態に移り変わる、という感じです。平たく言うと、新しい時代にとって「使い勝手のいい」状態に変わっていくという意味です。きりがないとも言えます。それでいいのだと思います。

国語が乱れている。国語が乱れると、国の心が失われる。「それは正しい言い方ではない」。「それは間違った読み方だ」。美しい日本語。

そうした言葉やフレーズは、空疎なだけでなく、大切なことを忘れた、あるいは無視したヒトたちの言い方ではないでしょうか。

言葉はみんなのものだ。言葉を押しつけてはいけない。この2つのことが大切だと思います。

★

「異化」が「紋切り型」に対する抵抗の1つの形であるとするなら、「異化」とは一時的なものでなければならぬ気がします。「異化」が続けば、「異化」でなくなり、せいぜい「新たな紋切り型」になり、ついにはただの「紋切り型」の1つになるのは避けられないと思われまます。

「異化」とは、絶え間ない「更新」でなければならぬということでしょうか。川の流れてみたいにです。同じ水のように見えながら、池と違って、常に同じ水がそこにあるのではない。そんな感じです。

ファッションや流行みたいですね。きりがありません。

言葉のレベルで考えれば、「流行語」「新語」「若者語」と同じということですか。でも、ちょっと違うみたいです。

「異化」というのは、個人的には、ある決まった言い方を、そのままの形で、別のもののように感じさせるという「姿勢」・「仕組み」・「働きかけ」だと考えています。

たとえば、「環境にやさしい生き方をしよう」を「環境に悪い生き方をやめよう」みたいにほぼ同じ意味のフレーズに言い換えるのではなく、決まり文句の部分はそのままにして、文脈をずらし、「環境にやさしい死に方をしよう」とするみたいな感じでしょうか。

この場合だと、黒い笑い、つまりブラックユーモアとも受け取れそうです。

09.09.01 げん・言 -8-

◆げん・言 -8-

2009-09-01 10:55:28 | さくぶん

★

あくまでも「仮に」つまり「仮定」「もしも」の話です。自分の「学んだ・真似た」言葉やフレーズやイメージや考え方のすべてに、有効性と信頼性という点で著しい欠陥があったなら、などとよく考えることがあります。

こんなことをトリトメもなく考えている時に、決まって思い出すが、ある2人の「筆耕（ひっこう）」のお話というか、内容はよく覚えていないので、イメージです。

「筆耕」というのは、文字を書き写すのを職業とするヒトや、文筆業のヒトを指すと辞書に書いてあります。今、話そうとしているのは、19世紀にフランスにいたという小説家が書こうとして途中で亡くなったという、いわくのある小説の主要人物なのです。たぶん、文字を書き写すほうの筆耕だったと思います。

学生時代に斜め読みしただけで、ぼんやりとした記憶しかない小説なので、よく覚えてはいないのですが、次のようなストーリーだった気がします。

何かの事情があって筆耕を生業にしなくても生活できるようになった2人の男性が、何かの事業をしようとする。そのたびに、その事業に関する書物を買って求め、その内容に従って周到に準備をする。それにもかかわらず、事業は失敗する。それを何度も繰り返す。

たぶん、そんな調子の話だったと記憶しています。間違っていたら、この話は、ここででっちあげた馬鹿話だと思ってください。ごめんなさい。

★

ある文学史の本に、この未完の小説は人類に対する、あるいは言語に対する痛烈な風刺だと書いてあったので、風刺のたぐいが嫌いではない自分は、どんな作品なのか気になって読んだのだろうと、今になって思います。大学の授業のテキストでなかったことは確かです。

でも、どこが風刺なのでしょう。当時はぴんと来なかったのですが、今になって思うと、何となく分かるような気がします。というのは、自分の人生にそっくりだからです。

これまで、いろいろな分野の指南書、マニュアル、手引き、実用書、教本、入門書、専門書、ハウツー本のたぐいを何冊、拾い読み、または斜め読みしたことでしょう。なかには、わりと真剣に読んだものもありました。生き方の指針として小説を読んだこともあります。

でも、なに1つ、役に立ったという実感も記憶もないのです。単に、自分が無能だったからだとも思いますが、やっぱり自分はかわいいものです。なにか別の理由があったのではないかと考えたくなるのが人情でしょうか。

いずれにせよ、現在の自分の境遇を思うかぎり、あれらの本というか、あれらの本のなかに入っていたにちがいない知識は、ぜんぜん役に立ちませんでした。いや、「ぜんぜん」は言いすぎかもしれません。「ほぼぜんぜん」くらいに考えておきます。

その意味では、人類あるいは言語に対する風刺だというあの未完の小説を、自分に対する風刺だと、個人的レベルで勝手に受け取っているとも言えます。とにかく、あの小説のストーリーが他人事だとは、どうてい感じられないのは確かです。

★

知り合いに、自己啓発・発想法・問題解決といったジャンルの本のマニアがいます。なにしろ、その手の「話題の新刊」が出るたびに買うのです。そのヒトが自己啓発されて成功したり、幸せになったり、問題を解決しているのかというと、はなはだ疑問です。陰口になりそうなので、これ以上は書きません。

健康法・スピリチュアリティ・癒やし・宗教・カルト・オカルトなどのはしごをしているヒトたちも、よく見かけます。これも、陰口になりそうなので、これ以上は書きません。

そんなことを考えていると、例の本が、個人のレベルを超えて、人類に対する、あるいは言語に対する風刺だという話がリアリティをもって感じられてきます。

★

もしも、自分の「学んだ・真似た」言葉やフレーズやイメージや考え方のすべてに、有効性と信頼性という点で著しい欠陥があったなら、と考えた場合、自分の才能というか無能さは棚上げされることになります。

失敗の責任を、言葉・言語、あるいは「知」というシステムに、いわば押し付けるわけです。

その意味では潔くない行為ですが、「仮に」の話ということで、続けさせてください。その上で、うさんくさくて、いかがわしい、いわゆる「一般論」をさせてください。

★

もしも言葉・言語に重大な欠陥や不備があったとしても、ヒトは気付かないでしょう。気付くような視座に置かれていないからだと思われます。「不自由対自由」、「異常対正常」、「狂気対正気」、「正しい対正しくない」、「欠陥対無謬」といった対立したペアは程度の問題であり、別個のものではなく、連続しつながっている、またはからみ合っているものだと個人的には思っています。

基準や境い目は曖昧です。そのときのヒトの都合で、どうにでも線引きされそうです。その意味で、上述の2項対立は、いかがわしくうさんくさいとも言えます。

恐ろしいのは、その一定しない恣意（しい）的な基準によって、レッテルが貼られることです。ヒトが思考する過程での官僚的で事務的な手続き上不可欠だと考えることもできますが、それが固定化されたり、権威のお墨付きみたいに絶対化されるのが怖いで

す。

もしも言葉・言語がとんでもない欠陥品だったらという仮定の話、一般論として広げて扱っているうちに、何だかとんでもない方向に話がいきそうになってきました。

これは、言葉・言語の欠陥によるものというより、書き手の杜撰（ずさん）さと迂闊（うかつ）さが招いた事態のようです。

★

ヒトにおいては、知覚器官と脳のあいだの随所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

いつも、以上の2つのいかがわしいフレーズに、話が落ち着いてしまいます。芸がなく、申し訳ないと思いつつ、つい引用して「一件落着」状態にしてしまいます。悪い癖です。

「それを言ったらおしまい」状態を、「出発点」にするべきなのです。言葉は何とでも言えそうなので、ぜひ、そうしたいと考えています。

★

言葉・言語が代理であるという仕組みを基本とする、知・文化・文明・進歩・発展・繁栄という一連の考え方への懐疑と諦念をいなくヒトたちがいます。圧倒的少数者だと言えそうです。

そうしたヒトたちの矛先は、主に、話し言葉・書き言葉という狭義の言葉・言語に向けられていると思われます。一部のヒトは、音楽・舞踊・視覚芸術・スポーツなど、狭義の言葉・言語ではなく、広義の言葉・言語が主要な表現手段とされる分野へと、ヒトびとの注意を喚起しようとしているようです。

園芸、近所の散策、趣味としてのお絵描き、草木や野生の小動物の観察、軽い体操といった、大げさではない、「ものとの触れ合い」でもいいわけです。ものと触れ合うさいにも、ヒトは広義の言葉・言語、つまり表象という広義の道具・代理を通して触れ合わなければならないみたいです。

森羅万象に対し直接触れることも見ることも、ヒトにはできないようです。そのさいに使わざるを得ない「代理」・「道具」が欠陥品であるかどうかは、おそらく程度の問題で

あり、ヒトがその「おそらく」を観測も判断もできるたぐいの話でもないとしても、それは致し方ないことでしょう。それ以上を望む必要はないのではないかと、個人的には考えています。

★

どうやら、言界は限界らしいのです。

でも、せめて、言界を「幻界・幻の世」だと考えて、「まぼろし・幻」の親戚だという「まほろば・まほらば・まほらま・まほら」で、「まやかし」でもいいから、「まもの・真物」でも「まもの・魔物」のいずれでもいいから、「何か」に「まもられ・守られ・目守られ」ていたい。

だから、しかたなく、言にたより、すぎる。

★

何をやってもうまくいかない。うまくいくと書いてある本を読む。うまくいくと言うヒトの話聞く。そのとおりに試してみる。でも、うまくいかない。

書いてあることや言われている話が間違っているのか。そもそも、書くとか、言うとか、読むとか、聞くとか、伝えるとかいうやり方・システムが、どこか変なのか。

うまくいかないのは、やろうとするヒトの能力に問題があるのか。そのヒトを取り巻く環境に問題があるのか。運とか定めとか言われているもののせいなのか。

その全部なのか。そのどれかの組み合わせなのか。

そうしたことを観測し判断する方法は、間接的な「代理」という仕組みを通すしかないように思えます。

一方で、代理なんかに頼らずに、直接的な形で「さとり」とか、「啓示を受ける」とか、「何かが教えてくれる」とか、そんなことを自信ありげに言い切るヒトたちがいます。

でも、そのヒトたち自身が、何かの「代理」様だと称して、どうみても「代理」だとしか思えない、言葉だったり、紙切れだったり、木切れだったり、石のかけらだったり、金属片だったり、壺だったりを、お金という「代理」と「引き換え」に授けてくれることがある。

★

宗教、信仰、癒やし、スピリチュアリティ、スポーツ、音楽、イベント、芸、道、芸術、成功法、エンパワーメント、療法、美容、幸せになる方法、美しくなる方法、人間関係を円滑にする方法、お金持ちになる方法、良きリーダーになる方法、組織をうまく動かす方法。

★

代理というシステムの利用の仕方はさまざまです。現在は、貨幣という代理が、言語という代理よりも優遇され、優先され、重視されているみたいです。

★

数ある代理のなかの王様は誰でしょう。狭義の言葉でしょうか。

言葉は何でも言えるし、何でもつなぐ頼もしい代理。それは確かなような気がします。でも、もっと頼もしい代理がありそうです。

お金・貨幣という代理が、王座に居すわっているように思えてなりません。たいてい、というかほぼすべてのものが、お金に置き換えられるみたいです。

愛情はお金にかえられない。命はお金に換算できない。残念ながら、そんな抽象的な気休めのお話をしているのではありません。

言葉を弄（ろう）して、口当たりのいいフレーズを生み出すことはできます。美辞麗句で世界は満ちています。言葉で、一時的に癒やされた気持ちになることもできるみたいです。

でも、お金の圧倒的な「交換性」には太刀打ちできそうもありません。最強だと思われていた言葉の「交換性」、つまり「万物をつなげる力」の陰に隠れた「まもの・魔物・真物・間物」がいたようなのです。

★

「代理」という仕組みのすごいところは、「置き換える」という働き・機能です。置き換えの対象は、森羅万象、無限とも言えそうです。

言葉にも「置き換える」力があります。でも、言葉だけでは、食べていけないし、服も買えないし、住むところも見つかりそうもありません。

なぜでしょう。

言界でのできごと、つまり「こと・言・事」の世界での「こと」であって、「もの・物・者」の世界の「もの」ではないからかもしれません。

「こと」ではなく「もの」が重視される世界を、現界と呼んでみましょう。

現界では、「もの」に「かえる」ことができる「もの」が尊いと考えられているようです。

★

かえる・変える・代える・買える・換える・替える・飼える・帰る・返る・還る・孵る

今挙げた「かえる」のうち、何がいちばん欲しいですか。

持ち運びに便利な「かえる」がいちばん使い勝手がよさそうです。数字にでも化けることができる「かえる」なら、ITとかいう技術を使って、別に持ち運ばなくても遠くにまで持っていけそうです。

名前は忘れましたが何とかいう機械、つまり代理・道具さえあれば、ピッピッピと指でボタンを押すだけです。そうすれば、お金・マネーが手に入る。

★

話はそれだけにとどまりません。電子マネーとか、キャッシュレスとかいう「もの」です。「もの」というより「状況」でしょうか。すると、「こと」ということでしょうか。何しろ、「ないのにある」状態なのです。

お金は、そうした「こと」対「もの」の2項対立を「物ともせず」、世界をかけめぐっているみたいです。

「価値」という小ざかしげな言葉やイメージで説明できそうな気もしますが、そういう言葉遊びをしたところで、お金の強さの前では「たわごと」扱いされるのがオチかもしれません。言葉をいとしいと思う者にとっては、悲しいです。

★

ふと「実体経済」という、「ありそうでなさそうな」うさんくさい用語とイメージを思い出しましたが、その反対であるはずの「ちゃんとある」状態を専門家は何と呼んでいる

るでしょう。経済学が苦手なので知りませんが、ちょっと気になります。

とはいえ、それも「ありそうでなさそうな」状態を単に「言挙げ」しただけのように思えます。

「実体経済」の反対のものとされる、「もの」か「こと」かよく分からないものも、どうやら「ないのにある」みたいだという意味で、結局は「実体経済」と呼ばれている「もの」か「こと」かよく分からないものに「似ている」感じもします。

ややこしいです。こういう苦手な分野の言葉・イメージを比喩にするのは、やめておきます。

★

「ないのにある」状態・状況に、ヒトは働きかけられ、動かされているようです。それで、大騒ぎしているわけですから、その「働きかけ」はかなりパワフルみたいです。単なる物語・神話で片付けられない、尋常ではない事態のようです。

「そのもの自体に似ている」状態、つまり「そっくり」状態にも似ている気がします。スーパーや量販店やコンビニに並んでいる大量生産された製品のイメージです。でも、あれはあくまでも「あるからある」状態みたいです。

★

「ないのにある」状態。

代理というシステムの基本には、「何かの代理」、つまり「何かに似ている」あるいは「何かの真似」という仕組みがあったはずです。そういう考え方・イメージが揺らいできているのでしょうか。

「何か」という曖昧な「暗黙の了解」みたいなものさえが揺らいできている、という意味です。もしそうなら、気の遠くなりそうな話です。

森羅万象には、物だけでなく、事や現象や状態や状況も含まれるみたいですから、「何かの代理」とか「何かに似ている」という場合の、「何か」が「ない」でもいいという気がします。すると、ごく当たり前のことが起こっているようにも思えてくるから不思議です。

いずれにせよ、「「ない」のに「ある」代理」とは「究極の代理」という気がします。

ヒトは、何だか分からないとんでもない「代理」を手をしている。うまくいっているようで、うまくいっていないのは、そのせいではないか。そんなふうに思えてなりません。

★

19世紀のフランスで「未完に終わった」という、2人の「筆耕」がてんでこ舞いする小説。

ひょっとすると、あの作品は、「ないのにある」状態とか、「ない」のに「ある」代理」をめぐって「書かれ損なった」のではないか、という気がしてきました。

おそらく単に結果として、つまり不可抗力によって、そうなったのですが、「書かれ損なった」ことに、興味を覚えます。結局、書かれなかったと思われる部分、比喩的に言えば「余白」に、何かを読むことは慎まなければならないと信じています。

★

ひとだけかないのにあると おおさわぎ

ひとだけか かえろかえろとおおげんか

ないはある おなじことかも あるはない

09.09.XX げん・言 -9-

◆げん・言 -9-

【ブログ不投稿】

★

言霊という言葉とその言葉が喚起するイメージが苦手です。できることなら、言葉に

したくないという気持ちがあって、この言霊について言葉をつづるのを控えてきました。

なぜなのか。考えてみました。

怖いのです。

★

小学校に上がる前、神社のそばに住んでいたことがありました。振り返ってみると、お寺には縁がなく育ち、仏式のお葬式にも出たことがありません。家庭の事情と、個人的な交際の薄さから、冠婚葬祭とは無縁な人生を送ってきました。

お墓参りは年に一度します。里山の中腹の一面に設けられた小規模な墓地に、墓石があります。正直言って、自分にとって墓参は形式的なものです。

住まいには仏壇はありません。親が、自分の両親やきょうだいの遺影を切り貼りしたものが、それが額に入れられて飾ってあります。コップ八文目ほどの水と花を供えているだけです。

★

うちでは、お線香は立てません。親はあげたいみたいですが、問題があるのです。

自分は煙が苦手なのです。お線香、お香、点火すると匂いを放つろうソク、たき火、煙草など、全部駄目です。煙が鼻に入ると、猛烈な吐き気を催し、実際嘔吐します。香水や化粧品や洗剤でも、強い香料を使用してあるものは避けます。

ドクターに言わせると、アレルギーというより、たぶん心理的なものらしいです。

親には悪いと思っています。でも、ちょっと匂いを嗅いだだけで、食べたものを戻してしまうので、どうしようもありません。

★

神仏や霊や妖精のたぐいは信じていません。

でも、イメージというか体感というか、自分でも整理できない感覚はあります。

お寺を訪ねたり、墓地に行ったり、仏像や御地蔵様を目にすると、からだが火照るの

を感じます。いい気持ちです。落ち着きます。

神社の境内に足を踏み入れると、ひんやりとした気配を覚えます。そわそわして落ち着かない気分になります。

怖いのです。

★

幼い頃、神社の境内や、神殿の床下でよく遊びました。こどもだからできたことです。神を祀ったやしらの床下にもぐり込むなんて、大それたことをしたものです。

お坊さんの読経には、特に感じるものはありませんが、神主さんの唱える祝詞には、からだに反応します。肌が粟立つのを感じます。気が遠くなりそうな気配も覚えます。

怖いのです。

★

言霊という言葉を見聞きしたさいにいただく、個人的なイメージは、「こわいもの」、「わからないもの」、「ひんやりとしたもの」です。今、「もの」という言葉を使いましたが、言霊とは、「かたち」ではないかという気もします。

「わからなくて、こわくて、ひんやりとした、かたち」と書いてみましたが、言葉になるはずがないものであると思うと同時に、今書いている言葉の「かたち」というか「すがた」に立ちあらわれているという気もします。

文字。

声。

文字はいいとして、声と「かたち・すがた」は矛盾しません。少なくとも、自分のなかでは矛盾しません。「ありよう」という言葉と置き換えてみるまでもありません。

★

分節化という言葉があります。専門用語としての定義は、このさい、どうでもいいです。要するに、言葉を「発する」ことによって生じる「わかる・わかる」という、こころの「働き」だとも言えそうです。

言霊をわけると、「こと・事・言・げん」と「たま・たましい・魂・こん・霊・れい」となりそうです。

★

「こと・事・言」と「もの・物・者」を辞書で調べてみると、重なる部分と、意味のうえで相反する部分とがあります。両者の「あいだ・間・ま・あわい」は「あわい・淡い・泡い」という気がします。

「あわいがあわい」というのは、両者のあいだにある「差異・際」を決する線が「薄い」という意味です。ややこしい言い方ですが、気に入っているので、よく使っています。

言霊も言葉ですから（※「言葉を装っていると言え」と言霊が言っているような気がしますけど、いちおうこう書いておきます）、何とでも言えそうです。

個人的には、言霊とは「ありよう」の「よう・様・溶・容・妖・杳・揺・遙」だと解しています。

★

理屈をこねてみましょう。

言霊とは、抽象的な「こと・事・言」の「ありよう」であると同時に、具体的な「もの・物・者」の「ありよう」でもある。手で触ることができるし、形を見ることもできるし、音として聞くこともできるが、言葉にすることはできない。言葉を装うことならできそうです。

言霊とは、言葉を成立させる可能性であり、ちからであり、仕組みの「よう」なものだとも、とりあえずは言えそうです。

言霊は、「こと・事・言」を知覚し意識したヒトに「はたらきかける」。その「はたらきかけ」という「ようたい・様態」だとも、とりあえずは言えそうです。

言霊は、言葉を「装う」ことはあっても、本来は言葉ではないため、意味を持たないという感じがします。

言霊は、名詞を装った動詞だとも言えそうな気がします。動詞という言葉にある「詞」がお気に召さないような印象も受けます。「はたらき」という言葉を使うことで勘弁してもらえないでしょうか。

言霊は、ものである。

言葉によって「はたらき」かけられているヒトにとって、言霊は存在しない。言霊は「はたらき」であるため、「はたらき」の対象には、感知されないとさえそうです。

以上の、フレーズを読み直してみると、理屈をこねているというより、理屈もどきをこねているという感じがします。言霊と理屈とは相性が良くないみたいです。

ややこしいですね。

言葉に身を任せて書いているだけなのですが、でまかせだと言われても仕方ないというか、そのとおりだとしか言えそうもありません。



以下の文章は、詩みたいなものだと思って読んでください。隠喩、明喩、引喩、擬人法、誇張法、ほのめし、黙示などの、レトリックに満ちています。散文ではなく、詩に近い書き方をしてあるという意味です。言霊が嘲笑いそうなレトリックを使うことが、ヒトとして言霊について書くには、ふさわしい方法ではないかと、個人的には思っています。

言霊は、言葉・言語の物質性である。

言霊をめぐる言説はすべて混乱に陥る。混乱の原因は、ヒトの知覚・認識の側にも、言葉の仕組みの側にもない。言霊のありようにある。

言霊は、かたちであり、おんである。

言霊は、ヒトに働きかける。ヒトに働きかけるさいには、具体的な行為、物質としての声や文字として、立ちあらわれる。

言霊は「唯物論」の立場に立ち、あらゆる「唯心論的」言説を嘲笑う。

言霊は、呪わない。呪うヒトを嘲笑う。

言霊は、祈らない。祈るヒトを嘲笑う。

言霊は、統一を志向しない。言霊は、統一の名の下に命を落としたヒトたちを憐れむ。

言霊は、拡散のなかにある。

言霊は、自らをまつろうとするヒトを嘲笑う。

言霊は、自らを利用しようとするヒトの前では口を閉ざす。

言霊は、過去に生きない。いま、ここで息るヒトとともに生きる。

言霊は、さかのぼるヒトを嘲笑う。何が不足かと嘲笑う。

言霊は、矛盾を嘲笑う。矛盾にあたまをかかえるヒトを嘲笑う。

言霊は、矛盾に満ちた言説を吐き散らす。その言説にとまどうヒトを嘲笑う。

言霊にとって、矛盾はヒトの知るところであり、言霊にとって知るところではない。矛盾は、ことを信じるヒトが悩むもの。

言霊は、もの。ものに矛盾はない。矛盾はことにあるのみ。

言霊は、事割り・理を嘲笑う。整合性のどこが整合なのかと嘲笑う。

言霊は、「分かる・分ける」を嘲笑う。分け・訳のどこが道理なのかと嘲笑う。

言霊は、比喩を嘲笑う。安易なこじつけを嘲笑う。

言霊は、絶対を嘲笑う。

言霊は、自らをヒトがカミと混同するさまを嘲笑う。

言霊は、うつくしさを嘲笑う。

言霊は、ことという音と事という字に首をかしげるヒトを嘲笑い、たまという音と魂という字に畏怖するヒトを嘲笑う。

言霊は、あらゆる抽象を嘲笑う。否定することはない。否定は抽象である。肯定は抽象ではない。この矛盾を、言霊は嘲笑う。言霊は、意味を嘲笑う。言霊はイメージを嘲笑う。

言霊は、言霊の幸ふ（さきはう）国以外のヒトの前では口を閉ざす。

言霊は、他国、世界、宇宙にまで口を出さない。

言霊は、翻訳や国を越えた類推を嘲笑う。

言霊は、侵略や支配や普遍とは無縁である。

言霊は、民とともにある。知者や為政者や求道者には目を向けない。

言霊は、眠る者と愚者と童にやさしい。

あざける。

わらう。

いみをいむ。

ことなる。

たまあう。

よむ。

言霊は、言葉・言語の物質性である。

★

言霊は、森羅万象であるとも、森羅万象に隠れている。森羅万象に宿っているのではない。「やどる・宿る・屋取る」。「かくれる・隠れる・かくのごとく暮れる・眩れる・暮る・眩る・暗い・昏い・冥い・暗し・昏し・冥し」。

言霊は、かたちとしてすがたをあらわにしているが、かくれているため見えない。

言霊は、ものとして、そこにあらわれているが、ヒトの目には見えない。ヒトの目のまえでかたちをあらわにしているにもかかわらず、見えないのは、ヒトの目のせいであり、言霊の知るところではない。

ヒトは、言葉を僕（しもべ）としているつもりでいるが、それは言葉の知るところではない。

★

「こと・事・言・げん」だけでなく、「たま・たましい・魂・こん・霊・れい」にこだわってみましょう。

「たま・魂・魄・霊・玉・珠・球」というふうに、漢字を当てることができそうです。

「たま」を文字通り、球体という「かたち・すがた」をした「もの」ととらえてみましょう。分子、原子、粒子、素粒子、量子、光子といった言葉に、個人的には、「まるい」というイメージをいただいています。

それと、ここで問題にしている「たま」をつなぐのは、安易な比喩以外の何ものでもないと思われます。でも、ヒトである以上、比喩を用いて言霊の嘲笑いの的になるしかない術はなさそうです。

量子が、さまざまなたとえの対象とされつつある、昨今の流行を見ると、同様な動作と仕草を言葉たちに演じさせようとし、同様な表情や目くばせを言葉たちにまとわせようとしている自分を意識し、そうした行いを恥じ入りたい気持ちになります。

★

言霊の「たましい・たま」に、ヒトの「たましい・たま」をつなぐのは、やめたいと思います。

ことでもあり、ものでもあること、つまり、言葉としてしか、ヒトが知覚・認識できないもの。

今書いたフレーズの最後にある「もの」のありよう、つまり使い方が、ことにおけるもの、ものにおけることの限界性を「立ちあらわしている」ように感じられます。言霊が限界性を「嘲笑っている」とも言えそうです。

言葉が、ヒトの期待に応えない程度の欠陥品であるらしいことを思い出しましょう。

言霊の「こと」について言葉で語ることはゆるしてくれても、「たま」について語ることを、言霊はゆるしてくれそうもありません。

もちろん、ここで書きつらねていることは、単なる個人的な感想であり、妄想の記述の域にある言葉であることは、言うまでもありません。

★

ことのはにたまをみつけし ちのはてで

うそならべ ことわりかたるひとたえず

このくくに きそうかみなし かたもなし

ものはある ことわりなしに こともある



神仏や霊や妖精のたぐいを信じておらず、いわゆる超常現象やスピリチュアル体験をしたという自覚のない者としては、言霊に思い切り嘲笑ってもらうというスタンスもあるかと思われまます。

試してみます。

ヒトが広義の言葉・言語、つまり表象で、世界・宇宙・森羅万象を、知覚・認識し、狭義の言葉・言語、つまり話し言葉と書き言葉または手話で、時間的経過を通じ、および空間的広がりを通して、仲間に「つたえる」という行為をしていると想定してみましよう。

広義および狭義の言葉・言語は、あくまでも、具体的な「もの・物質・物体」として、時空を「つたわる」と想定してみましよう。つまり、テレパシー、以心伝心、預言、予言、交霊、交感は想定しないという意味です。

そのさいには、具体的な「もの・物質・物体」である広義および狭義の言葉・言語は「かたち・すがた・ありよう」としてしか、ヒトによって知覚・認識されないと考えられます。

「つたわる」あるいは「つたえあう」という行為は、発信・受信・伝達という言葉とイメージで便宜的に処理されるものと想定ましよう。

また、とりあえず、発信・受信・伝達という言葉とイメージを「代理」として「使う」ことで、さらに「システム」あるいは「仕組み」という言葉とイメージを「代理」として「使う」状況を想定ましよう。

さらに、ヒトが乗り込める機械という意味でのタイムマシンは存在せず、量子コンピュータは実現していなく、多世界解釈は比喩およびレトリックの粋を出ないものとして広く解釈されており、ヒトの身体レベルでのテレポーションは観測されていない

と想定しましょう。

そうした前提の下では、言霊とは、発信・受信・伝達という言葉とイメージを「代理」として「使う」システムおよび代理としてしか、ヒトには知覚・意識されないと書いてもよいような気がします。

以上の、物語が、「言霊」の「働きかけ」をめぐる物語の「引用のずれ」、「再演のしそこない」、あるいは「変奏」であることは言うまでもありません。いかがわしく、うさんくさい話です。



19世紀後半に、ヨーロッパの西に位置するほぼ五角形をした国で、日本の中学校に相当する学校で英語教師を務めながら、詩作と思索と試作に耽っていたヒトがいました。

仮に、そのヒトが言葉・言語の仕組みについて、自らの書く言葉に演じさせた、サイコロ賭博師を思わせる身ぶりと、言霊をめぐる個人的な感想を書きつづるさいにあたまに浮かべたイメージを、ここで重ね合わせたとすれば、言霊は嘲笑うでしょうか。

きっと嘲笑うでしょう。ヨーロッパを持ち出して、言霊に対して「理・事割り」めいた、言葉の身ぶりを示すことは、言霊の居場所を否定する行為に他ならない気がします。

「理・事割り」は翻訳できそうですが、言霊は翻訳とは無縁のようです。何ものにも置き換えられそうもありません。

ところで、「言霊の幸ふ（さきはう）国」というフレーズがあり、日本を指しているとのこと。さきほど、言霊の「はたらきかけ」とヨーロッパのサイコロ賭博師の身ぶりとを重ねたことを、きっと言霊は嘲笑うでしょう。

と言ってみたものの、そんなふうに、高をくくっていいものなのでしょうか。

怖いのです。

09.09.XX げん・言 -10-

◆げん・言 -10-

【ブログ不投稿】

★

「仮に・仮 (=かり)」という言葉の語源が気になって、調べたことがあります。どちらにも語源の説明はなかったのですが、「どこか他のところから借りてくるからではないか」とでまかせで、「借りる」を引いてみたら、何か関係ありそうな記述がありました。

うろ覚えなので、もう一度、辞書で確かめてみます。広辞苑によると、直接的には同源とは書いてないのですが、「借りる」と「借る」に次のような記述があります。

かりる【借りる】(2) 仮に他のものをある目的に使う。代用する。

かる【借る】(2) 仮に他のものを代用する。まにあわせる。(3) 他の助力・協力を受ける。

お断りしておきますが、辞書を引き、「正しい」や「本当」を探しているわけではありません。「正しい」対「正しくない」とか、「真か偽か」という2項対立には、あまり興味はありません。失礼に響く言い方かもしれませんが、正直言って、どうでもいいという感じなのです。自分にとって、辞書とは、楽しい物語なのです。物語＝語り＝騙り＝フィクション＝作った話という意味での、物語です。

★

「たとえば」と言って、例を挙げるだけでなく、「仮の」話をする場合があります。「列挙」だけでなく、「仮定」の前置きの言葉でもあると言えそうです。「たとえば、○○みたいなものです」という使い方をすることもありますね。「比喩」の前置きにもなるようです。

「列挙」「仮定」「比喩」に共通するのは、「置き換え」という作業だと思われます。「たと

えば」は「たとえる」のきょうだいのようなので、「たとえる」は、まさに「置き換える」であると比較的容易に体感できそうです。

断定的な言い方に置き換えれば、次のようになると思われます。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

ヒトにおいては、知覚器官と脳とのあいだの随所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

写像という考え方を採用するなら、ヒトは、「あるもの」と「その影」の間で、点と点レベルの「対応関係」を延々と数えあげている。

以上の3つのフレーズは断定口調ですが、「そうらしい」だけです。語源的に言えば、たぶん「仮・借り」ですもの。

★

個人的に語源がおもしろく感じられるのは、どこか嘘っぽかったり、こじつけぽかったり、駄洒落めいていたり、つまりいかかわしそうなところがあるからです。また、「転じて」「誤用」「訛って」という記述をときおり見かけるのも、楽しいです。

ですから、「かりに・かり」に「仮に・仮」だけでなく「かりる・借りる・かる・借る・刈る・狩る・獵る・駆る・離る・着る・枯る・涸る」まで読んでしまうのです。何となくつながれば、それでいいのです。つながってなくても、語呂がよければ、それでもいいのです。満足します。

快いか快くないかが大切なのであって、正しいか正しくないかの次元での選択ではないのです。再度、お断りしますが、個人的な話です。

言葉は、そんなふう「ある・在る・有る・或る」。そんなふう「いる・居る・入る・要る・射る・おる・居る・折る・織る」。そう感じています。また、そう信じてもいます。

★

小学生の頃から高校生時代まで、算数と数学には文字通り泣かされました。わからなくて、悲しくて、涙をこぼしたことが何度あったか、覚えていません。悔しいというより、情けなかったです。

大学に入り、数学と縁が切れた時には、本当に嬉しかったです。あれから、もう四半世紀以上が経ったわけですが、今でも、数学が気にかかります。未練があるというべきでしょうか。ときどき、本屋さんで、数学に関する本を立ち読みしたり、ウェブサイトを覗くことがあります。

むずかしいです。ややこしすぎます。あたまがついていきません。でも、何から、数学という分野で、それを専門にしているヒトがやろうとしていることのイメージみたいなものが感じられるようになった気がします。比較的最近のことです。

あくまでもイメージ・印象ですから、数学の得意なヒトからみれば、とんでもない誤解であり、曲解であると言われそうです。

★

数学を「仮に」の世界とイメージするようになりました。「たとえば」の世界とも言えます。そう考えると、楽です。

「こうなんだ」「これしかあり得ないのだ」「絶対にこうなるはずである」

以前は、数学をそうした断定の世界だと思い込んでいました。実際、そうなのかもしれないませんが、今はそう思っていない。ふっきれた、というのでしょうか。すっきりして、気が楽になったのは確かです。

★

数学は、広義の言葉・言語だと思われまます。道具だと考えているヒトもいるみたいです。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

今書いたフレーズの「その「何か」ではないもの」を、「道具」と個人的には考えているので、「数学は道具だ」とよく言われているフレーズにある「道具」とは、ちがうようです。

たとえば、物理学や化学で、ある現象や法則を記述するために「道具」として使うとか、機械工学や土木工学でも同様に記述の「道具」として用いるという意味が、一般的ではないかと思われまます。

理論物理学という分野があるようですが、思考実験でもしているのかなと勝手にイメージしています。ある説を提唱したさいに、理論物理学者本人か、本人以外が今度は

数学という思考実験で、それを補強する。たぶん、数式とかグラフとか、視覚的イメージでデザインする形で、エレガントにプレゼンテーションをして、もっともらしい、あるいは説得力ある説へとアレンジしてくれる。

そんなふうにイメージしています。あくまでも、素人の勝手な想像です。いかがわしい話です。

★

数学は、森羅万象のありようをイメージ化するのに、有効性と信頼性のあるモデルを提供してくれる絵か図のようだと、思うようになりました。

絵か図という言葉を選んで使っているのは、視覚的イメージを優先している気がするからです。

微分におけるグラフで「曲線を細かく区切ると直線に見える」というイメージ。確率での、サイコロを振るとか、ルーレットの円盤を回したり、スロットマシンで絵柄や数字を組み合わせるイメージ。統計での、何やら手作業的なせわしげな数値化にほんそうされるヒトたちのイメージ。行列でみられる、式というより印章や紋章の模様みたいなイメージ。写像という、影絵や幻灯に似たきれいなイメージ。ベクトルにおける案内図のような矢印などの記号に満ちたイメージ。

そもそも数式というのは、図なのだなあ、今ごろになって気づいて感心しています。お恥ずかしい限りです。

書き言葉や話し言葉では、ややこしくなるから、図式化するというのが、数学の基本みたいだと理解していますけど、たぶんそんなものではないのだろうという気がします。そうではなくても、かまわないと言えばかまわないと思っています。いい夢をみさせてもらえば、満足だという感じです。

フランスでは、たとえ数学者の書いた数学の論文であっても、論理的で朗読するに値する美しい響きを持った文章であれば、暗唱の対象になるという話を、学生時代に聞きました。どういう意味だったのでしょうか。あえて、数式にしないで、表現するという意味にも取れるような気もするのですが、不思議なお話として、解決しないでおきたい謎です。

★

もしも、こうだったら、こう言えるけど、ああだとすれば、ああなるはずなんだけど、どうなんだろうねー。

仮定とか、仮の話は、そんな感じですが、まさに、どこかから別のものを「借りてくる」わけです。森羅万象の一部を、別の森羅万象の一部を借りてきて、置き換えて、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもある、ああでもあるこうでもない、と言葉やイメージをいじくるわけです。

★

太古に、どちらかというひ弱な尻尾のないおサルさんがいて、その脳内で何か壊れたかずれたようなことが起こって、ヒトという種になった。よく見聞きする物語・神話・説です。おもしろい話です。ちょっと笑いたくもなります。

「ひ弱な」がキーワードだと思います。いかがわしくて、うさんくさくて、安易な連想ですが、「ひ弱」だからこそ、いろいろな道具や仕組みを考え出したり作り出したとも言えそうです。ヒトから、そうした道具や仕組みを取り上げてしまったら、どうなるでしょう。

よく考えるのですが、数歩歩くだけでも大変だと思います。靴を没収されているわけですから。確かに、24時間のほとんどを裸足で暮らしているヒトも、この惑星のどこかに多数いるはずですが、でも、個人的に想像すると、ぞっとします。下着も取り上げられてしまうのです。

なんて、ひ弱なんでしょう。仲間を月に送り込んだとか、天然痘を撲滅したとか、金属製の機械に乗って空を飛べるとか、数万キロ離れたところで起こっている出来事をニュースという「代理」で知ることができるとか、地球の温度を高めるのに貢献しているとか、ある意味ではとてつもない規模で共食いをし合っているとか、そんなことを言っても自慢にはなりそうもありません。

はだかになれば はだあかいさる さればさち

★

言葉には、いろいろな意味がありますが、そのなかに個々の言語と、諸言語に共通する言語活動という意味もあると言えそうです。

いろいろな意味での言葉について、個々の言語の1つである日本語、そのなかでも書き言葉を使って考え、書く。その試みは、圧倒的な劣勢にあつての冒険、つまり無謀だと考えています。とりわけ、諸言語に共通する言語活動という、個人的にはもっとも興味のあるテーマについて、ある特定の言語を用いて語ることは、まさに騙ることだと実感しています。

地図は現地ではない。そんな意味のフレーズを思い出します。言葉と現実との関係を、比喩的に述べたものだという記憶があります。

言語を用いて言語や言語活動を論じるとは、間違っただけの地図を持ってある土地をさ迷って、その挙句に、ここは地図のここにちがいない、ここはここのはずだ、みたいにトンチンカンな勘違いを重ねている作業のように思えてなりません。

みつけたぞ たからさがしで まけおしみ



世界の言語の多様さには驚かされます。膠着語（こうちゃくご）、屈折語、孤立語という分け方に、特に興味を覚えます。

昔習ったことの、おさらいをしてみます。

A) 「わたしはあなたを愛している」

「は」「を」みたいなものが、語と語を接着剤のようにつないでいるのが、膠着語。

B) I love you.

「I, my, me, mine」「love, loves, loved, loving」「you, your, you, yours」みたいに語を屈折させて文を作るのが、屈折語。

C) 我愛你.

「我」「愛」「你」は孤立していて変化せず、その語順で文の意味が変わる孤立語。

大雑把に言うと、そんな話だったと記憶しています。言語に、こういう違いというか種類があることが、すごく不思議です。言語学では、比較言語学など、ある程度実証みみたいな作業が可能で、比較的割り切れる分野もありますが、こういう分類をしたのはいいけど、それから先の「どうして」へ進めない領域もあります。

「なぜか」を受けつけない不思議さがあります。説明もできないし、理屈もつけられない。でも、そうになっている。どうなっているのでしょうか。



時制や法（※直説法とか仮定法という意味での法です）の違い、母音子音の多様さ、語彙（ごい）のばらつき、主語という考え方の有無や違い、話し言葉と書き言葉の差、文字の有無も、不思議でしかたありません。国や地域によって異なる手話についても、謎がいっぱいありそうです。

あるシステムでのみ有効性を持つようにヒトが作ったコンピューター言語やマシン語と呼ばれているものについても、言葉でしか知らないに等しいだけに、どんなものか知りたい気がします。

机の上の壁に、あいうえお表が貼ってあります。それを眺めるのが好きです。「あ」から始まって「ん」で終わる図なのですが、じっと見ていると、何なのかわからなくなる瞬間や、瞬間よりもう少し長めの「時」を経験することがあります。

その「時」が好きです。言葉では、言えません。ただ「好き」とだけ、かろうじて言えるだけです。

★

「ん・n」は、ふつう、口をかすかに開いたまま、上の歯の裏から奥にかけて（※硬口蓋というそうです）、舌をぴったりとくっつけて、鼻から息を出しながら出す音です。でも、個人的には、「m」、つまり、両唇を合わせて閉じて、鼻から息を出す「む・mu」の「u」なしの構えで出す音で読んでいます。

aum とか om とかいう、仏教かサンスクリットか知りませんが、そんな大そうな話とは関係なく、何となく、このほうがしっくりするので、癖でそう読んでいます。

横着をして、あいうえお表のうちの、「あ・a」と「ん・m」だけを口にすることがよくあります。伸ばしぎみにゆっくりと発音しながら、何度も繰り返します。2つはつながり、連続した音になります。目をつぶると、口と鼻という穴を通る空気の流れと、鼻の奥の震えだけが感じられてきます。そのうち、眠くなります。

ヒトは口を開けて「a」と言ってうまれて、「m」または「n」の口をして息を吐いてなくなる。そんな思いにとらわれます。ほんとうのところは知りません。

★

「ま・ma・間・あい・あいだ・あわい」という言葉とそのイメージが好きです。

「ま」には、あいがあります。わがあります。だがあります。いがあります。かんがあります。けんがあります。ひとがうまれてなくなるまでのあわいあわいがあります。それ

はうつろいつづくというきがします。

ことばをわけるとまがきまします。そのまにはなにがあるのでしょうか。であいがありそ
うなきもします。でもわかりません。わかるかもしれません。わからなくてもいいとい
うきもします。わかるよりもあいたいです。あいたい。あう。あうむ。

あからむへ あうむうあむと わをえがき

09.09.XX げん・現 -1-

◆げん・現 -1-

【ブログ不投稿】

★

おまじないをしてみます。

げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつ
うつ

★

広辞苑で、大和言葉系の「うつつ・現」を引くと「ウツウツの約か」とのっけに記して
あります。「約」というのは「約音（やくおん）」とも言うそうです。発音が変化するとい
う意味で、一種の「訛り」だと勝手に理解しています。

「うつうつ」に会いに行ってみると、「うとうと。うつらうつら」という言葉が見えます。
夢のなかで辞書を引いているような、よくわからない気持ちになります。

「うとうと」を訪ねて行くと「うつらうつら。とろとろ」と書いてあり、ますます、うと
うとしそうになってきます。「うそうそ」の間違いじゃないのかとさえ、思えてきます。
仕方なく、「うつらうつら」に行ってみたところ、「うとうと」がいました。

★

眠くなり億劫（おっくう）になってきたので、「うつつ・現」にもどってみました。広辞苑を読んでいて、生きている状態、目が覚めている状態、気が確かな状態、という語義の次に、次のような記述に出合っていました。

(4)（「夢うつつ」と続けていうところから誤り用いて）心がうつらうつらとして正気でないこと。夢心地。

これを読んで、「まぼろしのよ・幻の世」、つまり「夢の世」という言葉を思い出しました。

今度は「ゆめうつつ・夢現」を訪ねて行くと、「夢と現実」に続けて、「夢か現実か区別し難いこと。意識がぼんやりしている状態」とありました。広辞苑での旅はこんな感じでした。

辞書を引いたあとは、しばらく、ぼけーっとしていました。いい気持ちでした。

★

眠るのが好きです。夢を見るのが好きです。いい夢、わるい夢、どちらも好きです。夢は何でも肯定してくれます。安心して任せられる世界です。

現実が苦手です。苦しいです。否定に満ちています。ままならない世界です。安心できません。でも、致し方ありません。

★

小学生の頃の記憶ですが、世の中で自分と親だけが、孤立した世界に住んでいるような気がしてならない時期がありました。1日が2つに分かれていて、自分と親だけが、一方の時間帯に目覚めていない。ほかのヒトたちはその時間帯に目が覚めていて、生活している。

もしかすると、夜中に眠っているのは、親と自分だけなのではないか。きっとそうだ。そうにちがいない。

だから、自分は世の中がどのようなになっているのか、何が起きているのかが分からない。親は働いているから、そんなことは気にしていない。でも、自分は暇だから、分からない世の中の出来事が気になって仕方ない。

そういう感じでした。荒唐無稽と言えは荒唐無稽な話です。でも、そう信じていました。当時の、自分にとっては、世の中が分からないことだらけで、不安でならなかったのです。

今、おとなになったあたまで考えると、疎外感、孤立感、閉塞感という漢字を使ったいかめしい言葉が浮かびます。

自分たちだけが取り残されている。易しい言葉でいうとそんな感覚でした。現在も、このころの奥に、それとよく似た不安感があるような気がします。

★

広辞苑に記されている「ウツウツの約か」と「夢うつつ」と続けていうところから誤り用いて」というフレーズが気になります。ちょっとわくわくもします。

言葉がいか「うつうつ」「うとうと」したものかが確認できて、嬉しかったという思いもあります。

間違ってもいい。誤りがあるのが世の常。ヒトはたくさんいる。ヒトは移動する。ヒトはなくなる。新しいヒトが出てくる。訛ったり、変わったたり、話し方がずれても、おかしくない。ヒトは忘れっぽい。ヒトはしょせんひとり。

げん・幻・言・現、もう1つ加えて限

うとうとうつうつで、つながってしまいそうです。

★

ひょっとして、現実を見たり知覚したことのあるヒトは、いないのではないのでしょうか。

以前からずっとそう思えてなりません。どういうことなのかと申しますと、2つの意味というか、2重の意味があります。

1つは、ヒトという種は、1人1台のテレビで、1画面しか知覚・認識できないのではないか、という意味です。もちろん、比喩的に言っています。

もう1つは、1画面ですら、情報量が多すぎて、送られてくるすべて信号を受信し処理する、つまり知覚し認識することはできないのではないか、という意味です。これも

比喩的な言い方であり、科学的根拠はありません。説や意見というより、感想と言うべきでしょう。

以上の2つの制約があるために、ヒトは刻々と過ぎ去る自分の周りの「現実」についていけない。「現実」を取り逃がすしかない。受け損なうしかない。2重とは、そういう意味をイメージしています。

「2重」には、もう1つの意味があります。ヒトは、空間の広がりと時間の経過という、「現実」の2つの側面を、自らの知覚器官・シナプス・脳で、受信・伝達・処理し損ねている。量と質の両面で取り逃がしている。そうも言えそうな気がします。

★

ヒトの知覚は、「現実」に対し、常に遅れているし、その受け取り方は、結果として、まばらであり、まだらでもあるという感じがします。「まばら」とは「間があいている」、「まだら」とは「むらがある」というイメージのようです。

「まばら」と「まだら」に「あわい・間・淡い・泡い」を読みたい気持ちに駆られます。こうしたたわむれは、「夢現・ゆめうつ」のなかでは、許されもし、肯定されもするだろうという気がします。

この「まばら」および「まだら」状態が、ヒトにおける「うつつ・現」という覚醒した、つまり「(夢に対して)目が覚めている状態」であり、「(死んだ状態に対して)生きている状態」であり、「気が確かな状態」であり、「心がうつらうつらとして正気でないこと。夢心地」だと言えそうです(※以上の鉤括弧内のフレーズはすべて広辞苑から引用しました)。

蛇足とは思いますが、広辞苑からの引用は、権威にすぎているわけではなく、話を進めるうえで参考にしていただけです。話を始めたり続けたりするときの取っかかりと言ってもいいと思います。

★

ヒトにおける「まばら」および「まだら」状態は、ヒトにとって常態であるわけですから、ヒトは自分が「覚醒している」のか「ぼーっとしている」のかを決定はできそうもないように思われます。その時々 of 心理的および身体的自覚症状によって、いかようにも感じているだろうと推測されます。

数学でよく行われているレトリック、つまりある種のトリックを使うなら、ヒトの平均的な覚醒状態を、仮に50と数値化し、それが60を超える場合には、「かなり覚醒して

いる」と仮定し、40を下回る場合には「かなりぼけーっとしている」と仮定することも試みとしては、おもしろいと思われます。

その数値化が、指数となるか、あるいはパーセントで表されるかというレトリック上の問題は、その操作を行うヒトの好みに左右されると考えられます。確率・統計を用いたうさんくさい処理になるだろうという感じもしますが、素人には詳しい操作はわかりません。

いずれにせよ、ヒトの覚醒状態を、数値化、あるいは定量化できることは確かであろうと思われます。

★

ヒトにおける「まぼら」および「まだら」状態、言い換えると「覚醒」状態を、「現実」という言葉・イメージとほぼ同列に扱いながら、言葉のうちで書き言葉と呼ばれる手段を用いて、今、記述しつつあります。それ以外の方法が、この文章を書いている素人には備わっていないからです。

そうした制約の下で、とりあえず、次のようにまとめておきたいと思います。

ヒトは、世界・宇宙という時空のなかで、常に置き去りにされつつあり、置いてきぼりをくっているとも言えそうです。

こんなふうになると、さみしい気もしますが、ヒトはひとりでそういう状況に投げ込まれているわけではないと言い聞かせれば、なぐさめられる気もします。

★

ヒトは、現実を取り損ねている。とらえ損ねている。追いつけずにいる。

そんなふう想定してみましょう。

ヒトは、必死で現実を記述している。捏造（ねつぞう）している。想起している、あるいはそう思い込んでいる。再現しようと努めている、あるいはできると思い込んでいる。作り直そうとしている、あるいはそうしているつもりでいる。

そう感じられます。

★

ヒトは、現実を取り損ねている。とらえ損ねている。追いつけずにいる。

そんなふうに仮定してみましょう。

ヒトは、現実を先取りしようとしている。予測・予想しようとしている。予見しようとしている。予言者と称するヒトが出てくる。預言者として崇め奉られるヒトが出てくる。

そういう気がします。

★

ヒトは、現実を取り損ねている。とらえ損ねている。追いつけずにいる。

そんなふうに考えてみましょう。

ヒトは、現実をとらえるために、追いつくために、道具や言葉やさまざまな仕掛けを作ろうとしている。

そう思えます。

★

ヒトは、現実を取り損ねている。とらえ損ねている。追いつけずにいる。

そんなふうに思ってみましょう。

ヒトは、穴だらけの現実を埋めるために、ストーリーを作り、辻褄を合わせ、論理をあやつろうと躍起になっている。

そうであっても不思議はないみたいに感じられます。

★

ヒトは、現実を取り損ねている。とらえ損ねている。追いつけずにいる。

そんなふうに推測してみましょう。

ヒトは、失敗を補うために、想像力を働かせている。創造力を発揮している。妄想にふけている。

そも言えるような気がします。

★

ヒトは、現実を取り損ねている。とらえ損ねている。追いつけずにいる。

そう思うと、自分は現ではなく夢のなかにいるような気がしてなりません。

★

げん・幻・言・現、もう1つ加えて限

げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつ
うつ

無限・無間・夢幻・夢現・夢言・夢限

言を用いて間（あわい）幻と現を限の下に記す

★

うつりゆく あわいのうちに うつをうつ

うつうつと うつつをぬかし ゆめうつつ

09.09.XX げん・現 -2-

◆げん・現 -2-
【ブログ不投稿】

★

現実について語る場合には、当然のことながら言葉を用いるわけですが、言葉を用いて語っている現実を、言葉を代理としている現実とみなすのではなく、言葉そのものを現実とみなす考え方があるようです。

現実にもそうした考え方の下に生きているヒトたちが億、あるいは10億という単位でいるらしいとのこと。具体的には、経典とか聖典と呼ばれている、言葉で構築された書き物を、現実とみなして日々の生活を送っているという状況と現象をあたまに浮かべています。

個人的には、想像がつかない生き方です。この国に住んでいるヒトには、理解しにくい価値観だという気がします。なにしろ、言葉が即現実になる世界観と言えそうです。この世界観を代表する2つの宗教について、思いをめぐらせているところですが、両者には大きな違いがあります。

一方は、翻訳を肯定し、もう一方は強く否定しています。想像を絶する違いだという気がします、考えてみたいです。

★

どうして、一方の宗教が翻訳を肯定し、もう一方が否定しているのかについては知りません。知らないのです、その宗教を名指しはしません。あくまでも、話、つまりフィクションとして考えてみますので、そのように受け取ってください。現実とか事実とは無関係です。

小耳に挟んだ、ある言葉・フレーズの断片をもとに、ある素人が妄想していると思って以下の文章をお読み願います。実際、そうなのです。それ以上でも、それ以下でもありません。

★

翻訳というのは、ある言葉を別の言葉に置き換える作業だと考えられています。現在、この国に住んでいる感覚からいうと、たいていの言語とこの国の言語の橋渡しをしてくれそうな辞書はけっこうたくさんあるみたいだし、文法書もあるみたいだし、専門家が教えてくれる学校や塾や講習会もありそうな気がします。

嫌な言葉ですがメジャーな言語で書かれた簡単な文章なら、パソコンを通じて、ネット上の外国語辞書で翻訳して、だいたいの内容であればつかめそうです。

でも、昔々、伝道のために、聖なる書を、ある見知らぬ地域に持ち込み、長い年月を

かけてその地域の言葉を習得し、またまた長い年月をかけて、聖なる書をその地域の言葉に置き換えるなんて、よく考えるとすごく難しそうでややこしいことを行ったという話を見聞きした記憶があります。

そんな途方もない苦勞を支えたのは、信仰の力でしょうか。それとも、何かで読んだ記憶のある、植民地拡大の政策とか、お金がらみの事情とか、そんなものにも支えられて、あれだけの元気が出たのでしょうか。

いずれにしても、すごいと言わなければならないと思います。大変だっただろうとも考えられます。

★

何が大変だっただろうかと言えば、伝道された側、および、植民地にされた側のヒトたちの苦勞です。お節介と言えばお節介なことをされたわけです。

遠くからわざわざやってきたのは、向こうのヒトたちです。頼んで来てもらったわけではないようです。

土地のヒトたちは、きっとその土地の神、あるいは神々、または他の土地の言葉で呼ばれていた「何か」を崇めていたはずで

す。神は1つ。それ以外のものは悪であり、魔である。きっと伝道者たちは、強く主張したに違いありません。その背景には、唯一の神以外のものの大きな力あったと言われています。

力づく。強制。

土地のヒトたちの「何か」は追放されるか、滅ぼされるか、隠れるか、化けたという話が残っています。

「何か」は存続し、復活したという話も聞きます。

★

ある土地で生まれたある土地の言葉とイメージを、ほかの土地の言葉に置き換えることは大変だっただろうと推測されます。

今、書いたフレーズは、実は単純化されたものです。聖典とか経典とか教えとか神話と呼ばれているものは、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃしているのが、ふつうのようです。

おそらく最初に、混乱、つまりごちゃごちゃぐちゃぐちゃが1人のヒトによって発せられたと仮定しましょう。そのヒトは、言葉を預かったと言ったかもしれません。よくある話のようです。

次に、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃが伝えられることになるでしょう。大昔であれば、口伝えであったと思われます。伝言ごっこです。話が変わることは避けられそうありません。



変わるは換わる・替わる・代わるとも書けそうです。なかには、伝えるというより、作るヒトがいても不思議はありません。そんなヒトはいつの時代にもいそうです。

並はずれた記憶力を持つヒトが、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃを一時的に独占していたかもしれません。さぞかし、尊敬されただろうと推測されます。

出どころは同じはずの言葉や話が、いくつも存在する。出どころの違う言葉や話が、混じり合う。そんな話もよく聞きます。昔もあったと考えるのが、自然かと思われま



やがて、言葉や話が文字として記される、つまり何かに引っ搔かれたり、色素を持つ物質の染みとして何かにへばりついたり、何かに彫られたり、傷として残されることが起こったようです。

画期的な出来事です。

でも、忘れてならないことがあります。文字として記されたものは、依然としてごちゃごちゃぐちゃぐちゃであるということです。ひょっとして、時代を経た分、よけいにごちゃごちゃぐちゃぐちゃしたものになったかもしれません。

そのごちゃごちゃぐちゃぐちゃを、さまざまに解釈するヒト、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃは自分たちだけのものにして、ヒトびとに分かりやすくちょっと変えてプレゼンするヒトなどがいたらしいです。自ら威張るか、周りから崇め奉られるか、どっちかだったようです。

ごちゃごちゃぐちゃぐちゃが生まれた頃からあった、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃの解釈をめぐる争いは、しだいに拡大していったそうです。



さらに、記されたものを「うつす・移す・写す」という形で、複製する手段が考え出されたようです。

これも、画期的な出来事です。

でも、ここで確認しなければならないのは、ヒトが写したちょっと頼りないものであれ、印刷という技術でほぼ忠実に写されたものであれ、文字という形で残っているものは、依然としてごちゃごちゃぐちゃぐちゃだったということです。

このころ、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃを本という形にして、文字をみんなで覚えよと呼びかけ、みんなでああでもないこうでもないをするヒトたちが出てきたようです。

ごちゃごちゃぐちゃぐちゃは自分たちだけのものにして、ヒトびとに分かりやすくちょっと変えてプレゼンするヒトたちは、本の普及を喜ばなかったみたいです。独占できなくなるのですから、当然でしょう。



ある土地で生まれたある土地の言葉とイメージ、つまりごちゃごちゃぐちゃぐちゃを、ほかの土地の言葉とイメージ、つまり別のごちゃごちゃぐちゃぐちゃに置き換えることは大変だっただろうと推測されます。

でも、それが行われたことは確かなようです。世界のベストセラーは、いろいろなごちゃごちゃぐちゃぐちゃ、つまり言語に翻訳されています。

大切なのは、それが現実だということです。「既成事実」という言い方もできそうです。2重の意味の現実です。

ある土地で生まれたある土地の言葉とイメージが、翻訳という形を通じて、この惑星に生息するヒトという種（しゅ）に広まった。これが1つの現実。

ある土地で生まれたある土地の言葉とイメージ、つまりごちゃごちゃぐちゃぐちゃが、さまざまな土地で生まれた言葉とイメージ、つまり別のごちゃごちゃぐちゃぐちゃとしてありながら、そのごちゃごちゃぐちゃぐちゃを信じるヒトたちによって、そのごちゃごちゃぐちゃぐちゃは現実には他ならない。2つめは、そうした意味での現実です。



現実には正しいそうです。そう言うヒトのほうが、圧倒的に多数である場合には、下手に逆らわないほうが良さそうです。

ある聖なる本には、世界の終わりまでごちゃごちゃぐちゃぐちゃした文体で書かれているらしいです。広辞苑によると、「はっきりといわず暗黙の中に意思・秘儀を表示すること」を「黙示・もくし・もくじ」とも言うようです。

その聖なる書のことかどうかわかりませんが、自分たちの家に備えてある聖なる本に書かれているごちゃごちゃぐちゃぐちゃの一字一句が、真実——現実のきょうだいみたいなものではないかと信じているヒトたちが多数いるそうです。

その経典は翻訳されたものも、昔のものに比較的近い形のものもあると、かつて聞いた覚えがありますが、よく覚えていません。

いずれにせよ、以上の話は、ぜんぶ受け売りなので、真実あるいは現実あるいは事実なのかどうか知りません。

ちなみに、上で使った真実・現実・事実という3つの言葉についても、知りません。辞書を引きましたが、役に立ちそうもありませんでした。ただ、気になるので、自分なりに考えてみたいとは思っています。ごちゃごちゃぐちゃぐちゃの一種ではないかという気はします。

いつも、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃという言葉とイメージで片付けてしまう癖があります。わるい癖です。反省しています。



翻訳を否定する聖なる書。

その成立がどのような過程を経たのかは知りません。歴史的経緯に触れる気もありません。ただ、「置き換え」をいっさい拒否するという仕組み・システム・働きかけが、どのようなものなのかについて、考えてみたいです。

書であるからには、文字で記されているはずですが、文字は、黙読、および朗読の対象になると考えられます。もしも古い形で残っている文字だとすれば、それは専門的な教育を受けたヒト以外には、理解できないものだと思います。

ごちゃごちゃぐちゃぐちゃであることは言うまでもないだろうと推測されます。その文字を音読し、書かれている内容を説明できるヒトは、特権的な存在であるにちがいない

りません。

翻訳を否定する聖なる書のなかには、その書が法や掟であるものもあると聞いた覚えがあります。その場合には、その書を読める一部のヒトたちが、その書を読めない、つまり意味がとれないという意味で読めないヒトたちを指導し、裁く役目を負うと考えるのが自然だと思います。

そうした状況は、支配や体制や絶対という言葉および状況と高い親和性をもつものと考えられます。

翻訳を否定する聖なる書即現実であるという世界観。

個人的には、体感も、抽象的なレベルでの理解も、できそうではありません。でも、10億を越えると推定されるヒトびとにとって、その世界観はいかなる「抽象」でもなく、「現実」らしいのです。

★

翻訳を否定する聖なる書、およびその書の説く超越的存在を信仰の対象とするヒトびとが、現在、地政学および世界経済的レベルで大きな影響力をもっているという話があります。

この国では、なかなか体感できない話です。でも、その影響力が衰えることはまずないだろうという気がしてなりません。とは言っても、ニュースなどを通しての、きわめて根拠の乏しい知識をもとにいただいている希薄なイメージでしかありません。

意見を求められたとしても、テレビに出てくるコメンテーターやいわゆる「識者」の「意見」か、雑誌か新聞記事で斜め読みしたフレーズの「受け売り」、つまり「紋切り型の文句」しか口にできません。恥ずかしいと思います。

★

明治維新以降、欧米を規範として国家の建設を行ってきたこの国では、翻訳を否定する聖なる書とその書の説く超越的存在を信じるヒトたちが、そのヒトたちの信じる「現実」のなかで生きているさまを想像することは、きわめて難しそうです。

★

文明の衝突という一時期流行したフレーズがあります。

怖いです。

個人的には、すごくりアルなイメージをもって、恐怖感を発するフレーズです。そのイメージは次のように「分光」されます。

翻訳を肯定する聖なる書、翻訳を否定する聖なる書、核兵器、最終戦争、啓示、契約、律法、救世主、唯一。

こうした分光されたイメージが、からだを包むような恐れを感じるのです。怖いです。

ひょっとすると、こういうものが、ある意味で「現実」なのではないかとさえ、思えてきます。

★

TIMEという米国系の出版社の週刊誌があります。どういうわけか中学生の頃から、定期購読しています。もったいないので、毎週欠かさず斜め読みだけはしています。米国の雑誌ですから、視点は米国寄りです。

「洗脳」されないように気をつけていますが、斜め読みしたあとには、どうしても自分の物の見方に偏りが生じているのを意識します。あの雑誌の購読者であることは、あの雑誌に染まった「現実」に毎週接しているとも言えそうです。

一概には言えないとも思いますが、さきほどの、「怖い」という言葉を書いた背景には、米国寄りの視点から見た「現実」が影響している。そう思えてなりません。

★

「現実」とは、ヒトが作るものだ。もっと広く言うと、「現実」とは、世界・宇宙・森羅万象に関して、日常生活のレベルで自分が見聞きしている広義の言葉・言語に大きく依存している。そんな言い古されたフレーズとイメージがあたまに浮かびました。

「代理」の仕組みという、ややこしい話抜きでも、似たような物語・神話が出てくるものですね。

げん・幻・言・現、もう1つ加えて限——これぜんぶ、同じみたいです。

納得してしまいました。

09.09.XX げん・現 -3-

◆げん・現 -3-

【ブログ不投稿】

★

ヒトにおいては、知覚器官と脳のあいだの随所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である。

ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている。

以上の考え方もありイメージであるフレーズを、柵に上げてみます。現実を考えるさいには、邪魔な考え方だと言えそうです。柵に上げると、柵から見下ろす感じにもなります。脇に置きましょうか。そうすると、横目でじっと見られているような気がしてきます。

考えすぎですよ。とにかく、上述の2つはなし、ということにしましょう。

すると、見るもの、聞こえるもの、皮膚で感じるもの、舌先で味わうもの、匂いでその存在を確認できるものすべてが、「本物」つまり「現実」ということになります。

すっきりして気持ちがいいです。ややこしくありません。見たとおり、聞いたとおりの世界です。

よく考えると、ヒトにとって、それがいちばん「自然な」考え方であり、感じ方であり、受け止め方です。

★

広く共有された「世界像」というか、日常生活を送るさいに、ほとんどのヒトが何の疑いもなく受け入れている「世界」、これを「現実」とヒトは一般に呼んでいるようです。

森羅万象の代理とか、表象とか、何かの代わりなんて、たわごとです。それが常識、英語で「common sense」と言っているように、文字通り、「みんながいただいている感じ」だと言えそうです。

ややこしいこと、めんどうなこと、いっさいなし。そんな感じですよ。

★

空間を越えたある共同体や、ある地域に住むひとびとによって共有されている「世界像」を「現実」と呼んでみましょう。

「現実」は肌で感じられるものであり、知覚できるものであり、認識や思考の対象にもなるものであると、とりあえず単純に考えてみましょう。

そのうえで、「現世」、「来世」、「前世」も肯定してみましょう。苦手な考え方なのですが、難しく考えるのはよして1つの考え方とか物語だと思ってみます。

いざその気になってみると、わくわくしてきます。気が楽です。病みつきになりそうな気配も感じられます。ちょっと不安でもあります。

★

「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」

= 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

= 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」

= 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」

= 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

= 「げん・Gen・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

= 「げん・眼・がん・まなこ・め・見（=げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

= 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらり」

ん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげ
る・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

＝「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足でき
ない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無
限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちが
う・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこ
べ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即
減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・
まあるくおさめませー・輪・和・わ・わっ」

＝「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひび
き・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆ
れる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でっ
けー・うへーっ・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ・わけわかんない」

★

うーむ。よくないです。とんでもない作業をしているようです。たぶん、こういうの
は、やってはいけません。許されないような気がします。

「理・事割り・断り」をしている「こと」がむなしくなりました。

言葉と自分との関係について、しばらく考えてみます。

★

ことわればさけびきこえる あきのそら

ことうつす かがみわれたるばちのおと

ことはもの たかをくくりし ぐをおかす

ものはある ことわりなしに ことはある

うたいたい あわいのうちに めをつむり

09.09.XX こんなことを書きました（その15）

◆こんなことを書きました（その15）

10の「げん」について、各10本の記事を書く――。その無謀な予定が挫折に至った記録です。「幻→言→現」で、立ち往生してしまいました。お恥ずかしい限りですが、そのまま再録いたします。

※ブログタイトル：「うつせみのあなたに・・・」（2009-08-23～2009-09-01）＋ブログ不投稿記事5編

*「げん・言-1-」2009-08-23：「げん」を「幻」から「言＝言葉」とずらして論じる第1回目です。まず、言葉を言語学的視点から事務的に5つに分け、次に言葉を比喩として置き換え、さらには言葉と関係のありそうな言葉を羅列する作業を通し、「言」を「分ける」ことが「ぐちゃぐちゃ」「ごちゃごちゃ」になる様を言葉に演じさせ、その身ぶりを全面的に「肯定する」というスタンスを戦略にするという「宣言」をしています。このシリーズを学問や探究や研究から遠ざけ、あくまでも「遊戯」に徹しようという意思表示とも言えます。キーワードとキーフレーズは、「言葉は何とでも言える」「分ける」「言語」「比喩」「隠喩」「直喩」「類語」「レトリック」「イメージ」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャック・デリダ」「ソシュール」「マラルメ」です。

*「げん・言-2-」2009-08-24：ヒトが言葉に接する場合に、言葉を単に道具のように使うという日常レベルでの付き合いだけでなく、「言葉そのものにこだわる」、つまり「言葉にのめり込む」という態度があることを指摘し、後者の危険性を訴えています。つまり、言葉にこだわりすぎると「不幸になる」＝「ある種の狂気に陥る」というわけです。半ば冗談、半ば本気で、「不幸にならない」ための方法を、いくつか提案しています。言葉について語るさいに避けられない「代理」という仕組みにも言及し、最後は言語の多様性への言及で締めくくっています。キーワードは、「狂気」「まける・まかせる」「かける」「翻訳」「伝道」「教義」「解釈」「知」「わかる」「あう」「はなす」「かく」「情報」「信号」「伝達」「代理」「貨幣」「異形」「絶対的他者」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒュー・ケナー」「ジョージ・スタイナー」です。

* 「げん・言 -3-」 2009-08-26 : 「げん」という音（おん）および文字の多義性と多層性を再確認しています。その小道具として、「言界」「現界」「幻界」「原界」「限界」「Gen 界」「滅界」といった文字を交えたおまじないのようなフレーズを唱えています。「言葉は何とでも言える」と繰り返し、駄洒落を頻出させ、言葉が多種多様なつながりを身ぶりとして演じている様を現出させようと努めています。言葉のごちゃごちゃぶりと豊饒さを言葉に演じさせるために、言葉を固定させまいと必死になって文章をつづっています。「論じる＝まとめる」と「戯れる＝拡散する」の両立を目指しているとも言える、絶望的な戦略で書いていますが、当然のことながら、読者がどう取るかは不明だとあきらめている節も感じられます。前回の「言葉そのものにこだわり」、「のめり込んでいる」状況を、自らが実践しているとも言えます。このシリーズでは、最も重要な記事だと思います。キーワードは、「うさんくさい」「わかる」「部分・全体」「写像・対応」「無限大・無限小」「まつりごと・政」「政治・宗教・権力」「わかれる・ちる・あう・つながる・かわる・かえる」「part-」「uni-」「光の二面性」「知覚」「脳」「情報」「伝達」「物語・フィクション・定型」「competence」「performance」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒュー・ケナー」『The Stoic Comedians: Flaubert, Joyce, and Becket (邦題:『ストイックなコメディアンたち——フローベール、ジョイス、ベケット』)』「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「ギュスターヴ・フローベール」「ジャック・デリダ」「ジャック・ラカン」「ソシュール」「マラルメ」「チョムスキー」「レフ・ヴィゴツキー」「ジャン・ピアジェ」「赤塚不二夫」「吉田戦車」「松鶴家千とせ」「丸山圭三郎」「坂部恵」「高山宏」「高橋康成」です。

* 「げん・言 -4-」 2009-08-27 : ヒトが言語というものを手にしてしまった「喜劇性」と「悲劇性」がテーマです。その両義的な状態を前提にどうすればよいか。その問いの答えとして、「言葉の物質性」を肯定するというスタンスを提案しています。その帰結として、言葉のフェティシズムという生き方が出てきます。それが、誰もが日常的に経験する行為であることに、読者の注意を喚起しています。キーワードは、「代理」「不毛」「抽象的」「抽象化」「知覚」「読経」「音楽の歌詞」「外国語」「読み聞かせ」「聞こえる・聞く」「具体的」「即物的」「直接的」「書道」「写経」「活字」「文字」「フェティシスト」です。直接書かなかったキーワードは、「音声学」「タイポグラフィー」です。

* 「げん・言 -5-」 2009-08-28 : 「わかる・わかる・わかれる・わけ」に漢字を当てる作業を通し、「わかる・わかる・わかれる・わけ」を具体的な体験として読者に示そうと努めています。次に、「わかる・わかる」を抽象的な話＝物語に還元して「説明する」という作業をしていますが、同時にそれが「割り切れない」話にしかかなり得ないことを言葉の身振りとして示そうとしています。その過程で、言葉を「道具」という比喻に見立て、その「道具」が「ヒトに使われるもの」という暗黙の了解を無化し、「非人称的で匿名的でニュートラル」なものとしてヒトの支配を超えた存在であり、むしろヒトが「道具」に依存している状況にあることを指摘しています。言語に支えられた、ヒトの「知・知性」についての懐疑の念も示しています。キーワードは、「つくる」「備わっている」「主導権

「学問」「まばら」「必然性」「整合性」「機械」「システム」「偶然性」「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」「すっきり」「狂気」「正気」です。直接書かなかったキーワードは、「ヴィトゲンシュタイン」です。

* 「げん・言 -6-」 2009-08-29：ヒトの言語能力と言語運用を可能にしているものとしての、先天的な「回路」「システム」「経路」があるらしいという説に加担しながら、議論を進めています。その考え方と「フィクション」「筋」をからませ、あくまでも自分自身の経験をもとにしながら、その説の有効性を探る方法をとっています。根底にあるのは、ヒトは「紋切り型」に沿って思考し生きているのではないかという疑問です。キーワードは、「決まり文句」「自由意志」「仕掛け」「仕組み」「出来レース』『紋切型事典』『パッチワーク』『オリジナリティ』『引用』『真似る・学ぶ』『物語 (or 説話) の構造分析』『ロシア・フォルマリズム』『プリコラージュ』『理論物理学』『インド哲学』です。直接書かなかったキーワードは、「チョムスキー」「ギュスターヴ・フローベール」「構造主義」です。

* 「げん・言 -7-」 2009-08-31：ヒトが他者や共同体から「統制されることを恐れる」という心理と、「進んで統制を望む」心理がテーマです。この相反する2つの心理と、アンビバレントな心理の3つのからみ合いをさまざまな例を挙げて考察しています。後半で、「異化」という言葉を自分なりに定義し、「統制」への反発力を備えた「武器＝戦略」にできないかと手探りしています。キーワードは、「アメリカ文学」「明治維新・文明開化」「翻訳・翻訳語」「写生文」「学校教育の制度化」「共通語」「つづり方」「文章の書き方」「描写」「比喩」「インターネット」「ケータイ」「難聴 (者)」「表情」「文法」「国語の乱れ」です。直接書かなかったキーワードは、『言語の都市——現代アメリカ小説』『トニー・タナー』『村上龍』『村上春樹』『大江健三郎』『多和田葉子』『動機の文法』『ケネス・バーク』です。

* 「げん・言 -8-」 2009-09-01：言語に支えられた「知」というものの有効性への懐疑がテーマです。実用書、ハウツー本、マニュアル、入門書、専門書はもとより、自己啓発書、発想法や問題解決の指南書といった書物をやんわりと非難しています。また、言葉が欠陥品でしかないという認識に立ったうえで、言葉で「知」を伝え流通させるという既存のシステムに対し、無駄な抵抗と承知しつつ、ぼやいています。言界は限界であるという駄洒落をむなしく吐いています。「代理」という仕組みに対して悪態もついでいますが、迫力に欠けます。徒労感と疲れがみられます。キーワードは、「代理としての貨幣」「交換性」「置き換える」「価値」「実体経済』『『ないのにある』状態』『『ない』のに『ある』代理』です。直接書かなかったキーワードは、『ブヴァールとペキュシェ』『ギュスターヴ・フローベール』『ヒュー・ケナー』です。

※以下の記事は、ブログには掲載しませんでした。

* 「げん・言-9-」【ブログ不投稿記事】：「げん」シリーズを書くために溜め込んだ走り書きメモを、ほぼそのまま断片的に並べながら、ある程度の「つながり」を持たせるために、つなぎの言葉で間を埋めている形式となっています。残暑の中で体調不良に耐えながら、「言霊」という重いテーマを扱おうとした結果です。いろいろ書いていますが、「言霊=言葉=物質≠ いわゆる魂・いわゆる心・いわゆる神々 or いわゆる神・いわゆる霊」という、「いわゆる唯物論」が核となっています。要約不可能な文章です。キーワードは、「神社」「神仏」「霊」「妖精」「文字」「声」「こと・事・言・げん」「たま・たましい・魂・こん・霊・れい」「つたわる」「使う」「代理」「働きかけ」「嘲笑う」です。直接書かなかったキーワードは、「ステファヌ・マラルメ」「賭け」です。直接書かなかったキーワードは、「原点への回帰」「復古主義・復古運動」「朝鮮語・韓国語・古代朝鮮語」「古代日本語・現代日本語」「漢語・漢文・漢字・中国語」「帰化人」「万葉集」「語源」です。

* 「げん・言-10-」【ブログ不投稿記事】：これも走り書きメモを材料にしたブリコラージュ=パッチワークです。「仮に・仮(=かり)」「たとえ・たとえる」をキーワードに、苦手な数学と物理学をイメージとして言葉で紡いでいます。断片の集成ですが、再読してみると、けっこうおもしろいです。他人事のような言い方ですが、日ごろ思っていることを素直に書いているという印象を受けます。愛着のある断片集です。静かな語り口で書かれていて、こういうのもいいな、と思います。

* 「げん・現-1-」【ブログ不投稿記事】：10の「げん」について10本ずつ(計100本)の記事を書くという、今考えると無謀とも言える「げん」シリーズを構想して挫折した残骸である「メモたちを継ぎ接ぎしたパッチワーク」という点では、「げん・言-9-」と「げん・言-10-」の不投稿記事と同じです。「幻→言→現」と来たわけですが、「げん・現・現実」という「音読み=からことば」から、「うつつ・現」と「訓読み=やまとことば」に「うつる」ことにより、「正しい」「正しくない」という2項対立という「嘘=虚=空」を超えた「嘘=虚=空」へとイメージが「うつろっていく」さまが、断章をつなぐテーマとなっています。つまり、「うつろい」がテーマと言えないこともないという意味です。「ヒトは、現実を取り損ねている」というフレーズが何度も出てきます。その言葉をめぐって書きたかったのだなあ――。今となっては、他人事のように思うばかりです。「うつろい」の「うつ」に、「抑うつ」の「うつ」が重なっているのは言うまでもありません。残骸には残骸のおもしろさがある――。自己弁護と言われれば、返す言葉はありませんが、そんな印象を持ちました。キーワードは、「ゆめうつつ・夢現」です。

* 「げん・現-2-」【ブログ不投稿記事】：これまで続けてきた不投稿記事とは対照的に、元気がいいです。勢いが感じられます。テーマは、そもそも伝道の手段として発達をみた「翻訳」という行為です。教義を記した書物における「げん・現・現実」とは、「げん・言」に近づくというヒトの意思と、「げん・幻」の方向へ引き込もうとする言語のメカニズムの間での葛藤である。その葛藤をつづろうとしていたのではないか。再読して、そう思いました。キーワードは、「聖書・バイブル」「伝道・ミッション」「植民・植民地・植民地

政策・植民地主義」「うつす・移す・写す」「写本」「印刷」「ファンダメンタリズム」「法・掟」「支配・体制・絶対」「地政学」「文明の衝突」「T I M E 誌」です。直接書かなかったキーワードは、「クルアーン（コーラン）」「イスラーム」「神道」「国家神道」です。

* 「げん・現 -3-」【ブログ不投稿記事】：「げん」シリーズを断念する宣言となった断章です。白旗を掲げています。10の「げん」を「=」でつないだ、シリーズの見取り図がむなしく見えます。やろうとしていたことが、思い出されますが、本当に「アホな＝無謀な」ことを企てたものです。でも、結局は、その夢の残骸を「解体した＝ほどいた」ものの、のちにさらにまた言葉をつむいでいったわけです。因果を感じます。

以上です。

小品集（1）09.09.04～09.09.26

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

※以下は、「小品集」というタイトルのブログに収録した記事のダイジェストです。ハンドルネームは「恵」で、小説とエッセイが中心のブログでした。各記事は、後に小説やエッセイとして編集・加筆されました。

※ブログタイトル：「小品集」

※2009年9月4日から26日までに掲載した22作の小品を紹介した記事です。

*「名前」2009-09-04：【解説】押入れから出て来た古い手帳に列挙された名前たち。かつて自分を腹に宿していた母親が、記したものらしい。手帳を見ながら、物心がついた時には父親がいなかった過去を振りかえる。【抜粋】名前を書き付けていたとき母は妊娠していたのだと、今になって気づいた。自分の迂闊さにあきれられる。手帳の裏に、母の実家の住所が記されていることから、母のものであることははっきりしている。曖昧にしていた事実を意識し、ようやく認めたということか。もう一つ改めて意識したのは、住所に添えられた氏名に母の旧姓が用いられていることだ。どういう意味なのか。

*「ねえ、傘、貸して」2009-09-05：【解説】童話。小学校二年生のあいちゃんが、同じクラスの愛（めぐむ）という名の男の子が学校に来なくなったのを心配して、その家を訪ねようと決心した日、道で雨に遭う。どうして？【抜粋】そのときです。先生が言いました。「恵あい（めぐみ・あい）さんと、相田愛（あいだ・めぐむ）さんって、何となく似ていない？」

*「セレブリティ」2009-09-06：【解説】新幹線のホームで、同じ列車に乗ろうとしている知り合いに呼び止められる。住み慣れた東京を後にし、実家に帰ろうとしている知り合いの語る過去に、じっと耳を傾ける。だが、その知り合いにとって終止符となるはずだった旅が、新たな出発となる。【抜粋】「私って、かわいかったでしょ。お金の心配をしたことはなかったなあ。ある時期まではね」。若くてかわいかった少年時代のその男は、

驚くべき数の男性遍歴を経てきたという。

*「バット・スキン・ディープ」2009-09-07：【解説】翻訳家を志している一人暮らしの女性のところに、同じ中学と高校に通った女性が転がり込んでくる。人間嫌いの傾向があった女性は、他人との共同生活によって次第に狂いの中へと落ち込んでいく。【抜粋】歩道橋の上まで来た玲子は、犬を抱きかかえた。喜んだ犬は再び玲子の顔を舐める。玲子は犬を道路に落とした。けたたましい鳴き声をした。トラックが急ブレーキをかける音も聞こえた。

*「分身」2009-09-08：【解説】幼いころから問題児的傾向のあった男の子のいくつかのエピソードを通じて、一人の人間を過去から照射する。この語り手とは誰なのか？【抜粋】でも、とても涙もろい人です。根はいい人だと信じているので、別れずにいます。長い付き合いをさせていただいております。

*「アユ」2009-09-09：【解説】童話。段ボールに入れられて川に流された生まれたての九匹の子猫たち。一匹だけが生き残り、年老いた猫を仲立ちに、神様と約束をする。その約束は、使命でもあった。【抜粋】「おまえは、生きたいか？」と年老いた猫が尋ねると、「はい、生きたいです。せいっぱい、生きたいです」と、子猫は答えました。

*「九つの命（「アユ」PART2）」2009-09-10：【解説】童話。九匹の子猫の中で一匹だけ生き残ったアユが、神様から与えられた使命を果たそうと奔走する。その使命には、ある条件があった。誰もがいつか経験しなければならない宿命を受け入れる命たちの物語。【抜粋】声によると、九つの命は同時に、この世からあの世へと飛び立つ運命にあるというのです。それは、神様にも、どうしようもない、宇宙の決まりなのだというのです。

*「リハーサル」2009-09-11：【解説】十七歳のときに産んだ息子と四年振りに再会する日の前日。息子をもてなすために料理の練習をするはめになった母親が、年下の愛人との別れを予感する。息子が帰った当日の母親の揺れる心境。息子のセクシュアリティを理解するのではなく、そのままの形で受け入れる母親。【抜粋】相手のセクシュアリティには関係なく、好きになった人が好きな人という点で、意見が一致しているんだ。達郎はそうした言葉で、その女性と自分自身の生き方を語っていた。

*「詐欺」2009-09-12：【解説】大学卒業後に、アルバイト生活をしていたころを回想する語り手。文庫本の知識を利用して、生活に苦しんでいる学生を騙し、お金を手にしたときのもようを描写する。そのトリックは、現在でも使えないことはない。悪用厳禁。【抜粋】この文章をお読みになっている方に、唐突な質問をいたしますが、角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？

*「XYZ」2009-09-13：【解説】西暦二〇八五年。幾たびかの核兵器を用いた戦争によって、人口が激減し、さまざまな異常に見舞われている人類。両親と姉弟から成る、ある

家族の日常を通して、殺伐とした世界をマイクロとマクロの両面から描く。【抜粋】「そもそも、これだけ薬漬け器械漬けにされていれば、長生きできるわけないよな。われわれYジェネレーションとしては、子どものXジェネレーションを行く末を憂い、放射能をこの惑星に撒き散らしたエロZジェネレーションと、その前の歴代のジェネレーションを呪うしかないってわけさ」

*「PDSG（「XYZ」PART2）」2009-09-14：【解説】西暦二〇八五年の荒廃した世界で、新たな危機が訪れようとしている。人類は愚行と悲劇を繰り返すのか？ ナカタニ一家も、その危機の真っ只中にある。いったんは絶望の淵に追い込まれた父親が希望を取りもどし、静かに朝を迎える。【抜粋】「PDSはPDSじゃないか。『パーソナリティ・ディスオーダー・シンドローム』、つまり『人格障害症候群』、立派な医学用語だろ。それにジェネレーションズをつけて、PDSジェネレーションズってメディアが使い始めたのは、ずいぶん前の話。素人だから不正確な使い方をしているのは認めるけど、その言葉を自粛しろだって？」

*「反・少女」2009-09-15：【解説】女子高校生がビデオショップでDVDを買う。店を出たところで、男に声を掛けられる。男はなぜか、そのDVDの中身を知っている。なぜだろう？ 女子高校生は、男と「対決」しようと思意するが……。【抜粋】「一つ聞いていいかな——」真琴は、無意識のうちにそんな質問を口にしていた。「どうして、女だってわかった？ 店にいるのを見ている時は分からなかったんでしょ」

*「不思議」2009-09-16：【解説】日ごろ、特に何も考えることなく、道具として使っている言葉。言葉を取めた辞書。ワープロソフトで書くさいに利用する文字変換。言葉を習うときに最初に目にする、五十音表やアルファベット表。そうした当たり前のものに潜んでいる不思議さについて考える。【抜粋】びっくりしました。それまで何度も英和辞典を引いていながら、そんな見て明らかなことに、全然気づかなかったことに気づいたのです。分かるようで分からなくなりました。

*「トイレ同盟」2009-09-17：【解説】他人がそばにいと緊張しておしっこができない二人の少年。中学に進学した今、新しい環境の中でどうやってトイレ問題を解決するかが緊急の課題だ。諦めかけた友達を励ます少年のちょっとナーバスな気持ちと、付き合いかけた女の子への淡い恋心を描く。【抜粋】始業寸前に二人でトイレにいることが何回か重なって、ぴんと来た。ちょっとうれしかった。渉もぴんと来たと言った。

*「街の天使」2009-09-18：【解説】ある街の路上や公園で男性の客をとっている少年の一日。いくらのお金が手に入ったが、パンツ一枚が減った。そのいきさつと過去の回想。性についてのダークな面とライトな面の両方を活写する。【抜粋】小学生だった明は、その男がなぜ男子生徒の鞆ばかりを盗んでいたのか、いろいろ想像してみた。その事件について語る町の人びとの口調は、ためらいがちで歯切れが悪かった。変態とか、頭がおかしいとか、変質者とかいう言葉を盛んに聞いた。そうした言葉を耳にするたびに明

は、どきどきした。

*「聞こえてる？」2009-09-19：【解説】さまざまな「見えない障害」について紹介する一方で、健常と障害という区別への疑問にも触れる。特に、難聴者として生きることの不自由さとちょっと笑える話に焦点が当てられる。健聴者に対し、耳を大切にしたいというメッセージも込められている。【抜粋】もうどうでもよくなってくる。聞いている。聞こえている。聞いている。聞こえている。そのうちに、聞こえてくるのが言葉ではなく、音、音楽、旋律のように感じられてくる。そして意識が薄れる。

*「輝きの日」2009-09-20：【解説】在日の日系外国人の一家をめぐる物語。日本語が得意で社交的な妹と、日本語ができない内向的な兄。経済的な事情で二人とも小学校に通っていない。兄は、入院した父親の口から、曾じいさんの語ったという生と死にまつわる話を聞く。死が間近に迫った父親は、死への恐れではなく、生き続けるための力を、ある「印」によって息子に贈る。【抜粋】「朝、目を覚ますと、周りのものすべてが黄金色に光り輝く日が来るんだ。まばゆさに目を細めるほどの、光が全身を包む」

*「ビッグ・ブラザー」2009-09-21：【解説】ある飲屋である男から原稿を手渡された編集者。事実を裏付けるデータが皆無で、単なる妄想の産物として片付けられそうな原稿の内容が紹介される。根も葉もない話だが、昨今の状況を考慮すると、無きにしても非ずとも取れないこともない、超監視国家の実現をめざす「グランドデザイン」の可能性を感じさせる不気味な話。【抜粋】データベース作成にあたっては、玉石混交であって構わない。さらに真偽は問わないことが鉄則らしい。質よりも量。とにかく数多くの情報が集められ、「名寄せ」作業による分類と蓄積が行われる。

*「夏の制服」2009-09-22：【解説】佐久間一家の息子の無断外泊をテーマにした三部作の第一弾。父親である秀行の視点から、親子関係、性、夫婦関係について、心理と状況の両面から描写される。性に関する父親の感情は、息子だけでなく自分にも向けられている。【抜粋】まず廊下のつき当たりにある男子トイレを調べた。次にその階の店舗を一つ一つ覗いてみたが、啓一はどこにもいない。エスカレーター脇の全館案内図をにらんだ。館内放送で呼び出してもらおうと思い立ったところで、エスカレーターで降りてくる啓一の姿をみとめた。一瞬、啓一は前に立つ二人連れの女性の後ろに隠れるような動作をした。

*「煙草のけむり」2009-09-23：【解説】佐久間一家の息子の無断外泊をテーマにした三部作の第二弾。視点は、母親である有佳。従来の男女の役割、性差に対して批判的な考えを持つ女性として描かれている。息子と同じく、男の子から男になりかけている少年たちへの有佳の感情は複雑である。【抜粋】小学二年生のとき、実家近くの公園のトイレで、同じ小学校に通う四年生の男子児童からいたずらをされたときの記憶がよみがえる。額と鼻、首筋、手のひらが汗ばんでくるのを感じる。やっぱり、引き返そう――。

*「プチプチ」2009-09-24：【解説】佐久間一家の息子の無断外泊をテーマにした三部作の第三弾。息子の啓一を、その妹の茉莉の目からとらえている。兄妹のやりとりを点描することで、一般社会における性に関する通念が揺らいでいるさまが暗示される。【抜粋】「お兄ちゃんのこと、かっこいいって言っている友達がいるんだけど——」。わたしが四年生のときに、そう言ったら、「ぼく、女の子には興味ない」って、お兄ちゃんがはっきり言ったから、「そうだよな」なんて、何となく返事したけど、あれってよく考えると、すごく変なことだった。

*「文字の顔」2009-09-25：【解説】普段は書かれている内容や情報が優先されるために、見えていながら見えていない存在である文字。その文字の「顔」にまで、時には目を向けてみようと呼びかけている。「普段は見えないものたち」への愛をつづった文章。【抜粋】読めない。でも、あの人の書いたものだと分かる。こんな夢のようなことが、他の言語でもあり得るのでしょうか。日本語の豊かさ？ 美しさ？ 言霊？ まさか。そんな抽象的なことではないと断言できます。

*「小品集リスト（その1）」2009-09-26：【解説】2009年9月4日から25日までに掲載した22作の小品を紹介した記事。【抜粋】いったん書かれた作品は作者の手から離れてしまう、と言われることがあります。作者も、その作品の読者の一人にすぎなくなってしまふという意味でしょうか。作品を読み返してみると、確かにそんな感じがします。

小品集（2）09.09.27～09.10.23

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

※以下は、「小品集」というタイトルのブログに収録した記事のダイジェストです。ハンドルネームは「恵」で、小説とエッセイが中心のブログでした。各記事は、後に小説やエッセイとして編集・加筆されました。

※ブログタイトル：「小品集」

※2009年9月27日から10月23日までに投稿した28作の小品を紹介した記事です。小品だけを収めていくという当初の計画から外れ、連載と連作を書いてしまいました。

*「おばちゃん」2009-09-27：【解説】自分の父親に近い年齢の男性とその老母の家と一緒に暮らしている青年が主人公の、ちょっと変わった家族小説。【抜粋】そんな二人を智樹は似ていると思う。同時に、自分とも似ていると思う。自分にも、友達や親友と呼べる人がいない。他人が頻繁に訪れる家だったら、こんなに長くこの家で二人と一緒に暮らしていなかっただろう。だいいち、あの人も十年以上生活を共にすることもなかったにちがいない。この家に来るまでは、その人とひっそりと慎ましい日々を送っていた。

*「分からない（「おばちゃん」PART2）」2009-09-28：【解説】年上の男性とその老母の家と一緒に暮らしている青年が、自分の実家について男性に語るたびに、その男性は分からない家庭だと口にする。他人から見ると、青年の実家も不思議な家庭らしい。【抜粋】その人と出会って間もないころ、「ぼく、お父さんと一緒に家でご飯を食べたことが一度もない」と話すと、その人は「嘘だろう」と決めつけた。本当だと言い張ると、「君のお父さんについて、もっと知りたい」と興味を示した。母子家庭で育って、父親についての記憶が一切ないと、その人が自分の生い立ちを語ったのは、そのときが初めてだった。

*「アクシデント（「奪還 -1-）」2009-09-29：【解説】農業を基本とする生活共同体であるコミューンから、二人の少年が脱走する。親に伴う形で、自由を奪われた身となっ

ている子どもたちを支援するEXというグループに助けられ、小田真人はコミュニケーションに残った弟のことを気に掛けながらも逃走を決意する。【抜粋】このままじゃ、人間ではなくなってしまう。コミュニケーションに長くいる人たちや子どもは、半分は人間、半分はロボットみたいだ。コミュニケーションを取り仕切っているやつだけが、ぎらぎらしている。あれも人間じゃない。かといって、ロボットでもない。人食い鬼——。コミュニケーションに来る前にやっていたゲームに出てきた怪物を、真人は思い出した。

*「了解（「奪還 -2-）」2009-09-30：【解説】EXの支援を受けて祖母の住む千葉県にある団地に逃げた真人を追って、コミュニケーションの関係者が団地を訪ねてくる。祖母は110番通報をする。【抜粋】制服姿の警察官二人のうち、一人が祖母とG友の会の男たちの言い分を聞いた。双方の間で、「親権」、「拉致」、「子どもの人権」、「児童虐待」、「ネグレクト」、「誘拐」、「G友の会」、「洗脳」、「優良団体」、「県会議員」といった言葉が飛び交う。

*「親権（「奪還 -3-）」2009-10-01：【解説】コミュニケーションに住む両親が直接、祖母の住む団地に向かっているという情報が入る。親権者である両親が訪ねてくれば、真人はコミュニケーションに戻るしかない。真人は団地を離れる意思を祖母に伝える。【抜粋】「おれ、ここを出る。ここにいっても、結果は見えているじゃないか」と真人は言って、居間の棚に並んでいる冊子を指さした。「親権だろ？ お父さんとお母さんが来たら、親権があるって言って、おれを連れて帰るんだ。警察も、自治会も、EXも、どうしようもない。ただ、見てるしかない——。そうだなんだろ？」

*「熱（「奪還 -4-）」2009-10-02：【解説】団地を出た真人は高熱を出す、EXの協力者の家にかくまわれて看病される。一方、真人を連れ戻すために団地を訪れた両親に対して、祖母は毅然とした態度で臨み対決する。【抜粋】「お黙りなさい」と、祖母が弁護士をにらみつけたという。「ちなみに、わたしはこちらの弁護士さんとは、お話しする意思は全然ありません。あなたが一言でも喋ったら、一一〇番通報します。あなたは不法侵入者ということになりますから。いいですね、本気ですよ。廊下じゃなくて、ここに座っていただけるだけでも感謝しなさい。さあ、ご用件を聞きましょうか」

*「事実（「奪還 -5-）」2009-10-03：【解説】コミュニケーションを出て、さらに祖母の家を出た真人は、自分の置かれた立場の意味を理解しようと努める。これから先、EXのメンバーの住むアパートを転々とするしかないのか？【抜粋】「あいつはあいつの置かれた立場を理解したうえで、行動している。おまえは、自分の置かれた立場が分かっていない」「そんなことない。おれだって、考えている」「じゃあ、ここを出ろよ」

*「考える（「奪還 -6-）」2009-10-04：【解説】EXの関係者の謎めいた青年中川大地によって、真人はあるアパートに連れられて行く。そこで一人で生活することになるが……。【抜粋】「あの人は、過去に心に傷を受けた経験があって、それがまだ治りきっていないの。だから、初めて接する人には、あの人は頭がおかしいんじゃないかって思われることがとても多いうこと。難しい？」

*「部屋（「奪還 -7-）」2009-10-05：【解説】中川大地によって連れて来られた部屋で、一人きりで生活している真人。大地の過去を知ろうとし、恐ろしくも悲しい事実をつかむ。やがて大地が真人を迎えに来る。【抜粋】「おまえ、裸になれ」。ふいに言われた。唐突な言葉だ。大地が口にするるとそれほど不自然に感じられないのが、不思議だった。

*「眠る（「奪還 -8-）」2009-10-06：【解説】大地と共同生活をするようになった真人は、大地の不可解な一面を知ることになる。戸惑う真人は、大地を理解しようとするが、とうてい理解できない部分があると悟る。【抜粋】初めて見る笑顔だった。泣いているようにも見える。今、この人は、無防備な姿をおれの前にさらしている――。真人は幼児か赤ん坊を相手にしているような錯覚に陥った。抱きしめたくなくなるような、いとおしさを覚えた。

*「逃げる（「奪還 -9-）」2009-10-07：【解説】真人が理解できないでいる現在の自分が置かれた状況とこれから先の展望を、大地は大地なりの荒っぽい現実的なやり方で示す。それは恐怖に満ちた体験だった。【抜粋】「おまえ、この国で一番強いボディガードをつけているやつって誰か、分かるか？」また唐突な質問をされた。真人は、毎日のニュースで出て来る政治家の名を三つ挙げた。「違う」。大地は、そのどれに対しても否定した。考えた後、ある公安関係の組織のトップの要職を口にした。「違う」

*「決行（「奪還 -10- 最終章）」2009-10-08：【解説】五カ月半ぶりでコミュニケーションのある町に真人は戻る。目的は、弟の雄詞を奪還すること。数日かけてコミュニケーションの動静を探り、計画の決行に踏み切るが……。【抜粋】コミュニケーションから雄詞を連れ出すことにより、うちの家族は完全に破壊される――。雄詞は母親と一体化している。雄詞を奪うことで、おれはこの家族を壊し、父親と母親に復讐しているのではないか。そんな唐突な思いにとらわれ、真人ははっとした。

*「奪還・ダイジェスト」2009-10-09：【解説】「アクシデント（「奪還 -1-）」2009-09-29から「決行（「奪還-10- 最終章）」2009-10-08までの「解説」と「抜粋」と反省文を収録。【抜粋】小田真人と中川大地という個性は、まだ自分の中に生きている気がします。いつか、別の小品として、同名で登場させてやりたい。そう思っています。特に、謎の多い人物として書いた中川大地の視点から、その生き様（＝いきざま）を描いてみたいです。

*「空前の「純文学」ブーム（前編）」2009-10-10：【解説】エッセイ。現在、かつてないほどの大きな規模で「純文学」ブーム、または「純文学」復興運動が起きているという説を展開する。また、ケータイ小説についても持説を述べる。【抜粋】毎日、数えきれないほどの「純文学」の書き手たちが、数えきれないほどの作品を書いているのです。いえ、海外の話ではありません。この国で起きている現象であり、現実なのです。嘘ではありません。さて、純文学とは何でしょう？

*「空前の「純文学」ブーム（後編）」2009-10-10：【解説】現在、出版界で「純文学」を上梓しにくくなっている状況を述べ、新しい「純文学」の出現に期待を寄せ、その書き手たちにエールを送る。【抜粋】「作為」「演技」「物語性」とは、「かつて純文学の規範とされた私小説と心境小説が排除しようとし排除し切れなかった要素」、つまり「言葉で書かれたものである、あらゆるテキスト＝フィクションにこびりついている属性」です。こうしたややこしい話も、どうでもいいでしょう。

*「残された携帯電話」（「ディスタンス-1-」）2009-10-11：【解説】不可解な自動車事故で亡くなった弟の持ち物を警察から受け取った姉。弟の住んでいたアパートを引き払い帰郷しようとするが、遺品である携帯電話に登録されたデータが気になる。【抜粋】携帯電話の電源を入れる。世田谷署で受け取った時には、電源は切られていた。メールはない。警察が削除したのか、そもそも弟がメールをあまり使っていなかったのか、読んだメールをこまめに削除していたのか。「電話帳検索」を出し、登録された番号をざっと見ていった。女気がない。アドレス帳と同じ印象を受けた。

*「オレンジ色の記憶」（「ディスタンス-2-」）2009-10-12：【解説】亡くなったばかりの弟が住んでいたアパートの部屋で、引っ越しのための荷造りをしている姉。年子で仲の良かった弟をしのび、その衣服を身に着けてみる。幼かったころの記憶がよみがえる。【抜粋】屈んで放尿する癖は、姉のわたしやほかの女の子たちばかりと遊んでいたことから身に付いたのかもしれない。注意する年長の者もいたが、光太はしゃがんでするほうが落ち着くらしく、一向にその習慣を変えようとはしなかった。

*「染まる」（「ディスタンス -3-」）2009-10-13：【解説】弟の自動車での事故死について、担当の刑事から詳しい説明を受けた姉。事故の経緯は分かっても、事故に至るまでの事情は謎のまま。このままでは帰郷する気にはなれない。東京に残ろうと決心する。【抜粋】「あちらさんとしては、大金を払わなければならない立場にありますから必死です。失礼で酷な言い方になりますが、それが商売なんです。病院でH I Vの抗体検査の結果まで調べているんですから――。現在では、あらゆる事故で、あの種の検査をするのが常識になっています」

*「つながり」（「ディスタンス -4-」）2009-10-14：【解説】初対面の男性同士の同乗する車が事故を起こし、二人とも亡くなった。警察は二人のつながりと身元が判明しない一人について捜査する。犠牲者のうちの一人だった少年の姉は、警察の調べた結果には満足できない。知りたいことはほかにある。【抜粋】「でも、おれ、そいつとは一回会っただけですよ。そいつのケータイにおれの番号があったから、つながりを疑われたとしか思えないんですよ。絶対に、警察はこういうデータを集めています。一度入手したデータは破棄しないと考えるほうが賢明でしょう」

*「大丈夫」（「ディスタンス -5-」）2009-10-15：【解説】亡くなった弟の利用していた美容室を訪ね、弟と同じ髪型にしてもらおう姉。なぜ自分がそこまで弟への同化に執着して

いるのかを意識していない、危うい精神状態の彼女を気遣う友人。【抜粋】すらすらと嘘が出てくるのが快い。弟と並んでカメラに収まるという考えも楽しい。空想ってわくわくする。鏡の中で美容師もわたしも、声を出して笑っている。楽しそう。自分のことなのだけれど、他人事みたいにも思える――。大丈夫だ。

*「変わる」(「ディスタンス -6-」) 2009-10-16 :【解説】美容室で男の子っぽい髪型にし、亡くなった弟の衣服を身に着けて夜の街をさ迷う姉。男の子になりきろうと必死の努力をする姉の、哀しくもあり滑稽でもある行動。【抜粋】すがすがしい。男同士って、何てさっぱりしているのだろう。わたしはこの発見を喜ぶ。周りの男性たちがみんな自分の仲間のような気がする。そんな幸福感に浸っていると、その喜びをぶち壊しにするような不穏な気配が目の前に迫ってくるのを感じた。

*「視線」(「ディスタンス -7-」) 2009-10-17 :【解説】男同士が視線を通じて、さまざまなメッセージとサインを交わす街。亡くなった弟の格好をして、その街に出掛ける姉。そこで繰り広げられている視線ゲームに戸惑い魅惑される。【抜粋】この街は違う。男が男を見る目。男が男を装ったわたしを見る目。通りを歩いている男同士が交わす視線。すれ違いざまに送り合う目線。何かが、どこかが違う。この国の文化と風土の中で、公(おおやけ)の路上を舞台にして、こんな濃密な視線のやり取りが当たり前のように行われている場が、ほかにあるだろうか。

*「踏み出す」(「ディスタンス -8-」) 2009-10-18 :【解説】男装をして、男ばかりが視線を交わす街に来た二十歳の女性。路上で声を掛けられ、自称大学生とコーヒーショップに入る。男の子に見られようと努めているが.....。【抜粋】「しょっちゅう、こんなことをしてるの?」「こんなことって?」男は一瞬見せたむっとした表情を素早く隠した。「いきなり、通りで声を掛けてきてさあ」こういう時に弟が口にしそうな話し方を想像して、それを真似る。「しょっちゅうしているように見える?」「見えるよ。現にしているじゃん」

*「出発点」(「ディスタンス -9-」) 2009-10-19 :【解説】香織は自称大学生の松長に男装を見破られる。動揺してコーヒーショップから外に飛び出したものの、中年の男にからまれる。後を追ってきた松長に助けられ、いったん男ばかりの街を去る。翌日、松長に食事に誘われた香織は、遊び慣れた松長を利用しようとする。【抜粋】「松長さんって、『ワル』なんですか?」「『ワル』の定義にもよりますね――。そんな考え込まないでください。ジョークです。笑ってください」。わたしは無理に笑みを作った。「わたし、男の子に見えるでしょうか」「見えます。これはジョークじゃなくて、マジに」「でも、きのう、あの時にどうしてわたしが女だと分かったんですか」

*「隔たり」(「ディスタンス -10-」) 2009-10-20 :【解説】自分を女性だと見破った松長という男と一緒に、男たちが視線を交わす夜の街に出掛ける香織。男に見えると松長に言われても、不安が残る。松長に気を許し始めた香織は、男装している理由を打ち明け

る。【抜粋】「男の人同士用のケータイの出会い系サイトとか掲示板とかも、あるそうですね」「もちろんあるさ」「松長さんも利用するの?」「たまに覗く程度かな。でも、ぼくは直接、こういう場所で出会うほうが好き」「どうして?」「掘り出し物が見つかる可能性が高いから」

*「符合」(「ディスタンス -11-」) 2009-10-21 :【解説】香織は松長に伴われて、生前の弟がよく来ていた「ディスタンス」という店に入る。ここでも男同士の視線のゲームが繰り広げられている。そこで弟の仲間だったという三人の少年に会う。死へのドライブに出掛ける直前の弟の様子を聞かされるが.....。【抜粋】「君って、本当にヒカルの双子の兄弟?」。三人連れの少年たちが寄って来て、そのうちの一人が聞いてきた。とっさの判断ができかねて、わたしは松長の顔を見た。とぼけた表情でそっぽを向いている。いかにも松長らしい。「そうだよ。おれのほうが兄」と、わたしは居直って答える。

*「幽霊」(「ディスタンス -12-」) 2009-10-22 :【解説】亡くなった弟の住んでいたアパートを引き払い名古屋の実家に戻った姉。香織(かおり)と光太(こうた)という年子だった事実を受け止められず、カオルとヒカルという幻想に侵されつつある日々を送っている。母親の受けた心の傷もまだ癒えてはいない。時折、幻聴となって現れる弟の声が、香織を徐々に癒やし、元の状態へと戻していくのか?【抜粋】やめろ。お姉ちゃんは、か・お・り。ヒカルはもういない。カオルも、もういない。カオルは、ヒカルの代わりにあの街とヒカルの仲間たちにお別れに来た幽霊だったんだ。

*「ディスタンス (ダイジェスト)」 2009-10-23 :【解説】「残された携帯電話」(「ディスタンス-1-」) 2009-10-11 から「幽霊」(「ディスタンス-12-」) 2009-10-22 までの「解説」と「抜粋」と反省文を収録。【抜粋】各小品は一種の風俗小説としても読めるように書きましたが、中にはミステリー、サスペンス、社会派小説、耽美小説、幻想小説、実験小説、心理小説、恋愛小説、家族小説、または哲学小説的な風味に仕上げたつものものもあります(ただし、連作として個々の小品をダブらせて読むのではなく、一編一編を完全に独立した作品として読んでいただいた場合の話ですが――)。

*「小品集リスト (その2)」 2009-10-24 :【解説】2009年9月27日から10月23日までに投稿した28作の小品を紹介した記事。【抜粋】今回のリストには、「奪還」という連載と、「ディスタンス」という連作が収録されています。連載はストーリー重視、連作はシチュエーション重視の姿勢で書きました。本来はストーリーよりもシチュエーションに重点を置いて書くスタイルが好きなのですが、何だか訳の分からないスタイルの連載と連作になってしまいました。

小品集（3）09.10.25～09.11.14

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

※以下は、「小品集」というタイトルのブログに収録した記事のダイジェストです。ハンドルネームは「恵」で、小説とエッセイが中心のブログでした。各記事は、後に小説やエッセイとして編集・加筆されました。

※ブログタイトル：「小品集」

※2009年10月25日から11月14日までに投稿した28作の小品を紹介した記事です。

*「仮面と人形（仮面編）」2009-10-25：【解説】エッセイ風味の小品。お面や仮面に代表されるさまざまな「べらべらなもの」について、「深読み」するという少々ひねった文章。内容は割とマジ。【抜粋】かつら、お面、仮面、お化粧、表情、顔つき——こうしたものは、さきほど書きました「表象の働き」とか「象徴の仕組み」という言葉でひっくるめることができそうです。要するに、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることです。ぶっちゃけた話が、何かに「化ける」ことです。もう少しお上品に言うと「装う」ことです。

*「仮面と人形（人形編）」2009-10-26：【解説】前回の続編。人間が自分に似せたものをやたら作るのは、どうしてなのか？ その不思議な現象について考えた文章。エッチな話も混じっています。【抜粋】お人形さんの起源は、子どものおもちゃだけでは、説明できないことが分かりますね。もっと、深いというか、恐ろしいというか、言葉にしにくい感情が込められているのではないかと。そんな気がします。ですから、人は人形（=にんぎょう・ひとがた・ひとかた）に対して、「ひとかたならぬお世話になっております」と、一言お礼を述べてもいいのではないのでしょうか？

*「あなたなら、どうしますか？」2009-10-27：【解説】かつてミステリーを書こうとして勉強中に知った、驚くべき事実。誰も逃れることができない恐ろしいものとは？【抜

粹]「このバカタレ！」と言うお叱りの声が聞こえるようです。でも、本気です。反抗しちゃ、駄目です。一つ間違うと反抗から犯行へと即座に発展して有罪になってしまうんです。あくまでも、とりあえず、おとなしくしておいて「ハンコ」ポンポンペタペタ＝ペーパーワーク、に身をゆだねるしか、ないんです。

*「やっぱり、ハンコはえらい(続・「あなたなら、どうしますか?」)」2009-10-28:【解説】ハンコがなぜ偉いのか、に徹底的にこだわったエッセイ的風味の小品。かなりマジ。他人事ではない話。【抜粋】要するに、「伝染るんです(うつるんです、と読みます、念のため)」。恐ろしい言葉が出てしまいました。とうていタミフル(「民振る」とか「民降る」とか「民 full」とか「民 fool」とも書きます)なんかじゃ、太刀打ちできません。吉田さんのお孫さんも、官僚と役人の「伝染るんです」には勝てませんでした(お孫さんでは役不足が過ぎました)。たとえ戦車を繰り出しても、太刀打ちできないでしょう。

*「な、いいだろう?」2009-10-29:【解説】おとぎ話。尻尾のないおサルさんに何かが起きて、ホモ・サピエンスになってしまった。その出世物語を風刺的に描く。【抜粋】この魔法もどきには、おまじないの文句があります。しるしるちしる、しるかけて、つばつける(広辞苑あたりで「しる・知る・領る」「しる・汁」「マーキング」「しるし・印・標・徴」「唾を付ける」を引いてみてください、ハンコも知も地も血も出てきますよ)。なかなか含蓄のある文句です。こうなると魔法もどきじゃなくて、立派な魔法です。

*「テラ取り物語(続・「な、いいだろう?」)」2009-10-30:【解説】おとぎ話。ホモ・サピエンス、つまりヒトという種(しゅ)が犯している、地球規模での大ルール違反についての物語。【抜粋】ノー・モア・ノーズ(No more 'no's)。脳はもう結構ざんす(=脳に悪いことばかりしようぜ)。でも、ワナ・ノー・モア(Wanna know more)。もっともっと知りたいのだ。これは、ヒトに仕掛けられた「欲望という名のワナ(やっぱり、ここでも名が付いて回るんですよー、どうあがいても無理なんです)」かも知れない。ワナは電車のようにはとまらないのでしょうか。滅亡へのワナ。

*「宇宙法廷審理中(1)」2009-10-31:【解説】尻尾のないサルの一種の脳内で異変が起きた。宇宙法廷が、この異変の危険性を察知した。実害に至る前にコンピューターを使用したシミュレーションによって、脳内異変事件が審理にかけている最中であるという珍説。【抜粋】原理はきわめて単純です。何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる。つまり、代用する。これだけです。その最たるものが言葉です。たとえば、「花というもの」を「花という言葉」で代用する。または、「○○という言葉」を「CECEという言葉」で代用する。そんな仕組みです。

*「宇宙法廷審理中(2)」2009-11-01:【解説】脳内異変によって人類が獲得した仕組みのうち、仮定と比喻に焦点を絞る。【抜粋】個人的な意見なのですが、仮定と比喻の二つは、人間にとって究極の武器だとかねてから思っております。簡単に申しますと、「もしも○○だったら」と「△△みたい」の二つがそろると、人間は最強の武器を手にしたの

も同然だということです。

*「宇宙法廷審理中（3）」2009-11-02：【解説】シミュレーションは継続している。肥大した脳を持ってしまった人類は、地球上の生き物たちに共通する、ささやかな縄張り行動を、地球の存続を脅かしかねない途方もないレベルにまで引き上げてしまった。【抜粋】以上のことをまとめてみましょう。「地（ち）」⇒「知（ち）」⇒「血（ち）」。こんな具合にシンプルな図式になります。

*「宇宙法廷審理中（4）」2009-11-03：【解説】目下シミュレーションの只中にある人類が、宇宙法廷の審理の成り行きを知る方法はある。胸に手を当てれば分かるはずだ、と説く最終章。【抜粋】その錯覚の根底にあるのは、名付ける ⇒ 言葉を作る ⇒ 言葉を「事・物・現象＝森羅万象」に与える ⇒ 言葉で森羅万象を詳細に分ける＝分類する ⇒ 森羅万象が分かった＝理解したという錯覚に陥る ⇒ 森羅万象を支配＝征服したと思いたがる、あるいは思い込むという、図式ではないかと思えます。

*「コロニー（前編）」2009-11-04：【解説】拠点病院を取り巻くように住んでいる男性たちに、週2回、ボランティアでお弁当を配っている女性が主人公。彼女が運転し、配達は知的障害のある中年の男性。女性は過去に受けた性的虐待により、重度の男性恐怖症に陥っている。カウンセラーの勧めを承諾し、あえて男性たちを相手にした作業に取り組んでいる。【抜粋】だいたいこんなやりとりで終わる。お弁当の届け先である相手のほとんどが、女性に興味がないという。だから、わたしはこの仕事を引き受けた。それでも、男性と向かい合うと心の奥で大きな抵抗を覚える。今のわたしの敵は、その抵抗感だ。

*「コロニー（後編）」2009-11-05：【解説】自分と同じような悩みをかかえる女性たちとの集会に参加している主人公は、ちょっとした偶然から、自分がお弁当を配っている男性たちの同様の集会を傍聴することになる。社会復帰を目指す主人公の心の緩やかな移り変わりを描く。【抜粋】「わたしはわたしなのに、セックスがからむと、わたしじゃなくて、一人の女だという意識が前面に出て来るんです。で、セックスの間は、自分ではなくて女の代表選手という感じで振る舞ってしまう」

*「女装文学登場」2009-11-06：【解説】文学史における、ちょっと気になるお話を思い出しながらつづったエッセイ。【抜粋】女装が女性運動に火をつけちゃった。つまり、女装が女性運動のさきがけとなった。そんな話なのです。やっぱり、ややこしいし、屈折していますよね。

*「女心を男が歌う国」2009-11-07：【解説】大学生時代に、ある米国人から指摘されたことを思い出し、もしもそれが本当ならば日本はよほど「特殊な」国ではないか、と戸惑っているエッセイ。【抜粋】以上は昔の話ですので、最近、米国生まれの方に確かめてみると、やはり「あり得ない」とおっしゃりました。本当なんですか？ それこそ、「あり得ない」という感じがして、アンビリバーボー状態なんです。

*「複数形のわたし」2009-11-08：【解説】前々回と前回のエッセイの連作。性差だけでなく、ヒトがTPOに応じてさまざまな役割を果たしている状態を常態とみなすのがテーマ。【抜粋】人をメスとオス、男性と女性、子どもと大人と二つに分けるのは、やっぱり窮屈です。なぜなら実際には、人間はもっと多面的な存在として、日々の生活をいとなみ、人生を送っているはずだからです。

*「小説と性」2009-11-11：【解説】結果的に4回の連作となったエッセイの最終回。この連作が、翌日から書く予定の小説の助走＝序奏であったと説明している。【抜粋】以上の小説たちにおける書き手は、複数性をそなえたヒトです。一方、小説の登場人物は、複数性をそなえたヒトをモデルに書かれています。ヒトである書き手がどのようなキャラクターを書いても、それはしよせんヒトの変種でしかないようです。

*「アセクシュアリティ（1）」2009-11-12：【解説】小説。一酸化炭素中毒による心中を図った男女。亡くなった青年の心理カウンセラーだった語り手が、やりきれない思いから過去を回想し始める。【抜粋】「そう、人間がかなり嫌いみたいです。度が過ぎていませんか？自分が人間だということも許せないような感じ。個人にそなわっている人格とか人間性とかいうレベルだけじゃなくて、生き物としての人間が嫌いみたいです。匂いとか、汗とか、肌に触れるとか、容貌や体つきというレベルです」

*「アセクシュアリティ（2）」2009-11-13：【解説】臨床心理家としての仕事を辞して、後進の指導に当たっている語り手。パートタイムで働いている塾で、若い心理学者及川と出会う。【抜粋】未成年者である時期に受けた性的虐待が、その人のセクシュアリティにどのような影響を及ぼすか。セクシュアリティとは先天的であったり自発的なものであるだけではなく、後天的であったり他者による働きかけによって左右される場合も多いのではないか。セクシュアリティの選択が、外的な要因の結果であって、内的な要素の発露ではないケースも少なくないのではなからうか。

*「アセクシュアリティ（3）」2009-11-14：【解説】語り手は、女性と心中した内山の少年時代と、10年後に再会したさいの変貌ぶりを描く。【抜粋】「あのも、よくそんな気がしていたんですけど、人間は心と体が一緒の時と、離れている時があると思うんです。ぼくは、個人的には、離れている時のほうが好きです。できれば、体は要らない。別に無くてもいいんです」

*「アセクシュアリティ（4）」2009-11-14：【解説】語り手は、女性と心中した内山の少年時代と、10年後に再会したさいの変貌ぶりを描く。【抜粋】「あのも、よくそんな気がしていたんですけど、人間は心と体が一緒の時と、離れている時があると思うんです。ぼくは、個人的には、離れている時のほうが好きです。できれば、体は要らない。別に無くてもいいんです」

*「アセクシュアリティ（５）」2009-11-14：【解説】語り手は若い心理学者の及川と対話する。かつてのクライアントだった内山と自分自身とを重ね合わせながら、語り手はセクシュアリティについての思いを語る。【抜粋】「その種の考え方は、分からないわけではありません。ただ、性的虐待者に口実を与えかねない危険性もはらんでいます」

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係ない。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」＝「代理の仕組み」——「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いるという仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬ世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

- 09.04.29 あう (3)
- 09.04.30 あう (4)
- 09.05.01 あう (5)
- 09.05.02 あう (6)
- 09.05.03 あう (7)
- 09.05.04 こんなことを書きました (その6)
- 09.05.05 スポーツの信号学 (1)
- 09.05.06 ドラマ信号論 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (2)
- 09.05.08 信号学的視線論 (1)
- 09.05.09 信号学的視線論 (2)
- 09.05.10 信号論 (1)
- 09.05.11 もくじをつくりました
- 09.05.12 信号論 (2)
- 09.05.12 信号論 (3)
- 09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

- 09.05.14 かく・かける (1)

- 09.05.15 かく・かける (2)
- 09.05.16 かく・かける (3)
- 09.05.16 かく・かける (4)
- 09.05.17 かく・かける (5)
- 09.05.18 かく・かける (6)
- 09.05.19 かく・かける (7)
- 09.05.19 かく・かける (8)
- 09.05.20 占い・占う
- 09.05.21 賭け・賭ける
- 09.05.22 書く・書ける (1)
- 09.05.22 書く・書ける (2)
- 09.05.23 こんなことを書きました (その8)
- 09.05.24 と、いうわけです (1)
- 09.05.24 と、いうわけです (2)
- 09.05.25 あられる・あらず (1)
- 09.05.26 あられる・あらず (2)
- 09.05.27 あられる・あらず (3)
- 09.05.28 あられる・あらず (4)
- 09.05.29 あられる・あらず (5)
- 09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 巻

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第8巻

<https://puboo.jp/book/17487>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/17487>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17487>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第8巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
